ちっちゃくなっちゃった、ゆーのくん。

形右

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ネタと気晴らしに書きました。特に深い考えはなかったです。

ただ何となく幼児化ネタがやりたくて、当麻かキリトあるいは八幡なんかもいいかなぁと思って、その内男の娘な感じのきゃらのほうが面白いんじゃないかと思っているうちに戸塚、明久、秀吉となんだかんだと回ってたらユーノくんに行き着きました。

結論：なんとなく面白そうなんで始めました。

とあるロストロギアの影響で子供になっちゃったユーノくんに降りかかる色々な出来事を、適当に本編を交えながら面白可愛く書きたいと思います。

１０／９　この度、《ステージシフト》の原作応募の方式を少しだけ変えようかと思います。

これまで原作を指定していただく形でしたが、大変不甲斐無いことに技量不足の為ンおそのクロスオーバーの長編を書くようにしてしまう結果になったので、思い切ってここまでのステージシフトの分をリセットして新たに始めようかと思います。

またそれに合わせて《ブランクタイム》も別途投稿か一旦停止に切り替えようかと思っています。今はそこそこ時間がありますが、始めた当時高校生で、受験の最中だった者でパソコンで打ち込むよりノートにメモ書きが多くまだ書き起こしきれていないので、一旦この作品の元々の形である短編投稿に切り替えるべく少しずつ変えていきま

す。

これまでの《ステージシフト》や《ブランクタイム》の作品は、あと三ヶ月後を目安に消そうと思っています。

勝手な決断ですが、どうかご理解いただけることを願います。

なので、今後作品募集の際は、その作品の再現してほしいシーンまでの募集という形でお願いいたします。その際、配役なども重ねて決めて頂けると尚助かりますが、無くても大丈夫です。

その代わり、この場合の配役はこちらのイメージで決める事といたしますので重ねてご了承願います。

誠に勝手ですが、今後も作品を楽しんでいただけるような努力は続けていきますので、どうぞよろしくお願いします。

目　次

《本編》
『ユーノ君、ちっちゃくなる。　――始まり――』――1
『幼馴染たちの騒乱　――模擬戦開始――』――6
『争い止める者　――翡翠の拘束者――』――14
『お宅訪問！　――ナカジマ家（スバル＆ノーヴェ＆チームナカジマ＋α編）――』――23
『来訪の弟子、再会　――マテリアルズ――』――36
『金色の閃光のまどろみ　――memorys to Fate.――』――51
『着せ替えって、替えてる方は楽しいけれども、替えられる方は辛いらしい　――Cosplay of U―no.――』――58
『月下流麗、妖艶な眼に映るのは　Bloody desire for you.』――73
『番外編』
『番外編』　ドキドキっ！　お風呂たいむっ!!――84
《ステージシフト》
『第一話　試作・Wパロ』――91
第二弾　『ウルトラマンガイアパロ　序』――104
《空白の時　――ブランクタイム――》
《ブランクタイム》　第一話　『始まりの傷』――111

《本編》

『ユーノ君、ちっちゃくなる。　――始まり――』

ある日、依頼されたとあるロストロギアの調査中……そのとあるロストロギアから発せられた光を浴びてしまったユーノ。

そのまま意識を失い……目が覚めたら――

――体が縮んでしまっていた！（小さな探偵風）

「なんでこんな事に……？」

そうぼやくユーノくん。と言いつつも、だぼだぼの服のまま……普段通り業務続行中。

「ってコラァァァ――ッ!?」

そこへ飛び込んできた、ユーノの幼馴染のフェイト・T・ハラオウンの使い魔・アルフ（ロリバージョン）。

「うわっ!?　び、びっくりしたぁ……。ど、どうしたのさ、アルフ？」

「どうしたのか？　じゃ、無いだろうが！　そんな異常事態起きてんなら治療に専念しろ、仕事休め！　なんで普通に仕事してんだよッ!?」

「えぇー……」

「なんでそこで嫌がるんだよ!?」

普通に仕事をしていただけ（そこがまず根本的に間違っている）なのに、怒られユーノは不真腐れるような反応をする。

普段から聡明というか、素直な彼としてはかなり意外な反応である。本当の子供の頃の彼でさえこんな反応はしなかったように思う。（まぁ、今の彼はその頃より若干幼い風貌ではあるが。見た感じ、五歳くらい……だろうか？）

しかし、いきなり理不尽に（だからまずその認識がまちがって（ｒｙ）怒られたユーノは不満気である。この真面目系鈍感ショタ司書長は……。（呆れ）

しかし、ここで引き下がるわけにもいかない。

アルフはとにかくユーノを、せめて診察くらいにはいかせようと、短く明確に、そして尚且つ強制的に言った。
「兎に角、シャマル先生のとこに行ってきなよ」
「でも……」
「良いから！　そのロストロギアの解析もそうなった原因も分かってないんだろう？　まずは体に異常がないかどうか調べてもらって来なって」
「……分かったよ……」
まだ不満げである。まぁ確かに今ユーノが抜けるのは少々手痛いが、発足当時に比べればここ『無限書庫』も、大分人手も増え……業務も軌道に乗って来た。
だが、それでもまだユーノが一番仕事をこなしている現状に変わりはない。
でもだからと言って、この状態のユーノをそのまま働かせるのははっきり言って問題がありすぎるほどにある。
それに、ただでさえ管理局の中で一番有給ためてる人トップスリー入りは毎回確定なユーノ司書長その人。こんな機会でもなければその溜まりに溜まった有給を消費させることもできないだろうし……丁度いいと言えば、丁度いい。
まぁ、そんな訳で人事部が泣いて喜びそうなくらいに溜まった（カモン、有給申請カモンッ！）、定期預金並みな有給休暇の申請をさせることにしたのである。
「ならとっとと行ってきなよ、有給申請は出しとくから……」
「ええっ!?　有給って、なんで!?」
「驚くとこそこかよ!?」
アルフ、決死のツッコミである。
「だって別に問題らしい問題もないし、検査したら戻ってくるってば」
「いやいや、ちゃんと戻れるようにしてからにしなよ」
「ええー……、別にこの姿でもそんなに問題ないし……戻らなくてもいいかなぁって、というか行くのが面倒くさいんだけど……」
「いやいや!?　少しは足掻けよ、抗えよ!!　そしてちゃんともとに

戻ってから、戻ってきてくれよ!?」
もの凄ぉ～く、普段のユーノより子供っぽい。これは絶対ロストロギアの影響があるような気がする。
こんな子供っぽいユーノを見ることができるのはかなり珍しい。
「だってさ～アルフ。僕が子供になったからって何か不都合なことや面倒な事起こるわけないじゃないか」
そんな呑気なことを言っている我らが司書長殿だが、彼のその楽観的な見解をのたまうが……アルフはなんとなく既に面倒ごとの布石が打たれたような気がした。
まさに完全なる前兆、伏線――イベント発生フラグ投下である。
その予感は早々に的中し、呑気な司書長の見解と憶測はあっさり外れてしまうことになる。
さて、世界はこんなこんなはずじゃなかったことばかりだ、と某黒ずくめの元・執務官、現・提督の司書長の悪友が語ったように、まさしくこんなはずじゃあなかった事が起こりだすとは……誰も（？）予想していなかった。
「兎に角、早く行って来なよ。どうせまだ行きたがらないだろうから、助っ人も呼んだし」
「助っ人……？　って、誰？」
その時、『無限書庫』の扉が開き、二人の少女が入って来た。
「こんにちわ～」
「おぉ～来た来た。」
「まさか、助っ人って……」
「やっほ～アルフさん、ユーノししょちょー。ししょちょーホントに小っちゃくなっちゃったんですねぇー、可愛いです～」
「こんにちは、お邪魔しています」
やってきたのは、金髪オッドアイと銀髪オッドアイの少女たちだった。
「や、やあ……いらっしゃい、ヴィヴィオ、アインハルト……」
「お久しぶりです♪」
「こんにちは、ユーノ司書長」

普段なら娘のような可愛い子供たちも、現在のユーノには悪魔の手先にしか見えなかった。
そんな訳で、咄嗟に逃げようと少し体をずらしたら……バインドされた。
「あの……アルフ？　これは……？」
「よし。ヴィヴィオ、アインハルト。連れてって♪」
「「ラジャー／です」」←大人モード発動。
「いや、ちょ、ちょっと待っ……」
「問答無用です」
「申し訳ありません、さすがにそのままの司書長を放置しておくわけには……」
「それはじゃあ頼むよ～二人とも」
「なんでぇ～～っ!?　誰か助けてぇ――っ！」
しかし、悲しいかな今子供の姿になってしまっている彼は……大人モードの二人に抱えられ、おまけにアルフからバインドを掛けられた状態であり――彼にはもはや逃げ道などは無く、それに加えて既に動けるような体制・状態ではなかった。

× × ×

医務室にて――
シャマル先生の診察を受けた彼は、一応健康的な意味では問題ないという診断を受けた。（ただ思考は少しだけ子供よりになっている様な傾向がみられるが、勿論それも酷いものではなく少しわがままになったり、思考が短絡的になる程度の物である）
ならさっそく、と無限書庫に戻ろうとした彼をシャマルも加わった三人のお姉さんに止められる。
「い、行かせてよ！　僕は、仕事がしたいんだぁー！」
「だ、駄目ですよユーノくん！」
「そうだよユーノくん。子供になったのにいつもみたいなペースで働いたら！」

「そうですよ、司書長……いえ、ユーノさん」
ワーカーホリックここに極まれりな状態の、ショタユーノくんを取り押さえるお姉さん三人組。
「じゃあ、どうしたら行かせてくれるの!? 模擬戦でもして君らに勝てばいいの!?」
「ええっと……まぁ、その状態で勝てる気があるなら……たぶん」
「まぁ、そうですね……ユーノさんは検索以外の魔法のチェックはまだしてらっしゃらないようですし、案外丁度いいかもしれませんね」
「あ、私はここに残らないといけないので模擬戦なら三人でということになりますが……（本当はあの頃よりショタになったユーノくんを、もう少し楽しみたかったんですけどねぇ……）」
「ホント!? よし、ならやろう。すぐやろう！」
そういうや否や速攻で模擬戦の場所を借りるユーノくん。こういう時便利ですよね、権力って。←（提督待遇）
そしてサクサクと場所を取り付けると、せかすような勢いで二人を戦技場に向かうユーノくん。
この人どんだけ仕事したいんだろう、とヴィヴィオとアインハルトは思った。
正直休ませられるのは嫌なユーノくん。理由は特にないほかにすることが特にない事や、この後依頼がたまる事などを恐れていたりする部分も無くもないが……やはり一番の理由は、仕事がしたいからなのかもしれない――ユーノくんマジワーカーホリック。
そんな訳で、唐突に始まることになったこの模擬戦。はてさて、一体どんな結果になる事やら……。

――こうしてこの騒動は幕を開け、始まったのである。

『幼馴染たちの騒乱　――模擬戦開始――』

我らが司書長ユーノくんが仕事をかけて模擬戦を始めようとしていた頃、管理局の何か所では騒ぎが起きていた――

× × ×

――とある元部隊長の場合。

「あぁー……。平和や～」

しかし、暇である。

「でも、暇やねぇ～リイン……？」

「ですぅ～」

「あー、なんか面白いこと起きへんかなぁ～……」

なんとも不真面目な部隊長である。

しかし、そんな部隊長の下へ、彼女の守護騎士で家族な桃髪の女騎士から連絡が入る。

『主はやて、今ちょっとよろしいですか？』

「ん～？　どないしたんー？　シグナムぅ～」

「シグナム、どうかしたですかぁ～？」

『いえ、ちょっと小耳にはさんだ話なのですが……なんでも、スクライアがアインハルトとヴィヴィオの二人と模擬戦をするという話を聞きまして』

「えぇッ!?　なんでそんなことになっとるんや!?」

「ユーノさんと、アインハルト、それにヴィヴィオが……ですぅ？」

『なんだかよく分からないのですが、先ほど模擬戦をやっていたらそんな話をしていた者がいて、少々気になりまして……それで主ならば何か知っているのではないか、と思いまして』

「そんなん言われても、そんなこと知らへんしなぁ……。でもなんや面白そうやなぁ、よっしゃ。リイン、シグナム。ちょっと様子見にいこか？」

「はいですぅ！」
『了解です、主』
　そんな感じで、はやてはちょっと見に行くことにしたのだが、一体何でこんなことが起こっているのか分からなかったが――
「何や、面白そうな予感がビンビンやなぁ♪」
　――とりあえず今日も彼女の直感というか、センサーはものすごい感度で何か「面白い事」をキャッチするのだった。
　その時、はやてはふと思った。ユーノと言えば、あの二人もこのことを知っているのだろうか？　と。
「なぁ、シグナム。なのはちゃんとフェイトちゃんはこのこと知っとるん？」
『いえ、高町の方は今日は久しぶりにスバルと特訓だと言っていたので、おそらく小耳にはさんではいるかと思いますが……テスタロッサの方は、分かりませんね。そもそも今日本局にいるかどうかもよく分からないので……』
「んー……。『クラウディア』は、今のところ停泊中やから、本局（ここ）おるとは思うよ？　ただ私も最近二人とあってへんからなぁ～……ほんなら、フェイトちゃんの方には連絡してみよか、なのはちゃんは大丈夫やろ。それにほっといた方が面白……いや、何でもあらへんよ？」
（（主／はやてちゃん……））
　ぶれないタヌ……失礼――部隊長であった。
　そして、とある金髪執務官の場合。
　本日は彼女の普段添乗している次元航行船『クラウディア』が本局に待機しているので、彼女は現在暇だった。なので彼女は依然彼女が所属していた部隊、通称『機動六課』の頃の部下であり執務官の先輩として六課解散後も面倒を見たティアナ・ランスターに久しぶりに会いに行った。
　そして二人で近況を報告し合い、談笑をしているところに、これまた元・『機動六課』部隊長を務めていた幼馴染の八神はやてから連絡をもらった。

「あれ、はやてだ……。どうしたのかなぁ？」
「はやてさんからですか？」
「うん。どうしたんだろ？　何か事件でもあったのかな？」
　早速送られてきた通信のウィンドウを開くと、画面の向こうに見える幼馴染の顔はにこやかなものであり、とりあえず事件云々とは関係ないようなのでほっと胸をなでおろした。
『フェイトちゃん、久しぶりや』
「うん、久しぶり。元気だった？」
『そら勿論。ところでフェイトちゃん、今暇？』
「え、うん。時間が開いちゃって、ティアナのところに来てたんだ。はやても暇だったりする？　なら三人で一緒にお茶でも行かない？」
　どうせ暇ならと、同じく暇らしい幼馴染をお茶に誘ってみる。
　しかし、はやてはそれを制してこういった。
『お茶も魅力的やけど、フェイトちゃん。もっと「おもろい」暇つぶしがあるんやけど……一緒に行かへん？』
「面白い？」
『せやせや、面白そうな事今やっとるらしくてなぁ』
「面白い」という単語とはやてが組み合わさると、何だか嫌な予感というか……ちょっとばかり心配になってくる。どうにも大人になってからノリがよすぎるこの幼馴染は、時たまとんでもないことを仕出かすことが多々ある。かつてのあの儚げな薄幸美少女の姿はもはやどこにもない。（まぁ……もちろん、幸せなのはいいことなのだが）
　そんなフェイトの思いを知ってか知らずか、はやてはそのまま話を進めていく。
『それがやなぁ……。何と今、ユーノ君とアインハルトとヴィヴィオが模擬戦してるらしいんよ！』
「……え？」
　今なんて言ったのだろうか？　模擬戦？　ユーノが……ヴィヴィオとアインハルトと？　なんで？
　数々の疑問がフェイトの脳裏を駆ける。というかなんでそんなことに？

「え……ええっ!?　な、なんでそんなことに!?」
　これにはフェイトもティアナもびっくりだ。
『さぁーそれは私も知らんけど……　なんやシグナムがこの話を聞いたらしくてなぁ。そんで私らで身にいこかと思っとったんやけど、そういえばフェイトちゃん今本局におるなぁ～って思い出して、誘ってたんよ。どや？　一緒に行かへん？』
「えぇー……？」
「な、何なんですかそれ……」
　とはいえ、何だかこうなってははやてを止めるのは――はっきり言って、経験則上不可能だ。それに実際のところ、なんでそうなったのか気にはなるし、娘同然のヴィヴィオとそのお友達と、幼馴染でかつての恩人で、さらに勉強を見てもらった『先生』的な存在がなんでそんなことになっているのか確かめなければ。とフェイトは思った。
(ティアナもヴィヴィオとは友人であるし、ユーノに勉強を見てもらったこともある。←フェイトの推薦)
　まぁ、あのユーノに限ってそれは無いと思うが――もし仮に、本気で戦っているんだとすれば……アインハルトはまだともかく、ヴィヴィオにとってはユーノは相性最悪である。
　ぶっちゃけユーノの捕縛能力は並では止められない。加えてヴィヴィオはまだ幼く経験も薄い。いかに『聖王』の血を引いてるとは言えども、「カウンターヒッター」のあの子ではユーノには敵わない。まず、バリアを破れない上に、ユーノは遠距離での戦闘も得意だ。彼はまさに、攻撃だけが『戦い』ではないことを体現しているタイプなのである。
　ただ、アインハルトはまだ大丈夫な気がする。彼女には『繋がれぬ(アンチェイン・)拳(ナックル)』があるから、上手く行けばユーノのバインドは突破できるだろうし、防御を突破するには至るかはかなり疑問だが、悪くない戦いはするはずだ。
　それに加えて、ユーノは文官である。徹夜なども平気でこなすし、元々放浪の一族なこともあり、割と力もある彼だが……ここ十年ほどは戦闘には参加していない。かなり鈍っているといっても過言では

ないから（実際、自分もティアナも体力落ちてたし！）大丈夫だろう……と思う。
まぁ、そんなわけで、それを見に行くことに決めたフェイトとティアナははやてに場所を聞き、ともにそこへ向かうことを決めたのであった。

おまけ

「アレ、そう言えばはやて……この事なのはには教えたの？」
『ん？　教えてへんよ～？』
「？　なんでですか？　確かに今なのはさんは、スバルと練習行ってますけど……そこまで忙しいわけじゃないですよ？　というかあれは自主練らしいですし」
『いや、べつにそういうことやないんよ』
「？　じゃあどういうこと？」
はやてが何故、ここまでしてなのはに教えていないのかが分からない二人は首をかしげる。
『実はなぁ、この知らせを聞いた後に、シグナムから続報がはいってなぁ？　何とそのユーノ君たちが模擬戦しとる場所がやなぁ――――何と、なのはちゃんとスバルの模擬戦しとる会場の真横なんよ！』
「えええぇぇッッッ!?!?!?」
『いやぁ～早まって教えんといてよかったわぁ～！』
「は、はやてさん？　なんでそこまでするんですか？」
ティアナの当然の疑問に、はやてはにこやかにかつさわやかにこう答えた。
『そりゃあ勿論――――面白そうやからや♪』
この答えを聞いて――あぁ……この人本格的に駄目だ……、と二人が思ったことはここだけの秘密である。

そして本命、とある悪m……ゲフンゲフンッ！　とある『戦技教官』の場合。

久方ぶりに愛弟子であり、現在救助隊で第一線を張ってるスバル・ナカジマと模擬戦をしていた高町なのは。
かなり激しく戦い、互いの成長を確認しあいしばしの休憩を取っていた……そんな時だった。
急に通信が寄せられたので、どうしたのだろうかと思いつつ通信に応じると、通信を送ってきた相手は顔見知りの局員で模擬戦をする闘技場等のスペースを管理している人だった。
『高町一等空尉、ちょっとよろしいですか？』
「どうしたんですか？　何か事件でも……」
緊急収集かと思い、気を引き締めそう尋ねるなのは。それに合わせて隣のスバルもその瞳に鋭さが宿るが……通信の内容はそういうことではないさらしく、画面の向こうからは朗らかな返事が返ってきた。
『あ、そうではないんです。ただ、高町一等空尉達の使っているスペースの隣での模擬戦申請がありまして、その連絡にと』
「あ、そういうことですか……」
その知らせを聞き、ホッとするなのは。事件でないのなら、一安心といったところか――と思ったのだが……。
「因みに、その申請をした人は誰ですか？　ここを使うくらいですから……シグナムさんか、ヴィータちゃんとか……あ、確かフェイトちゃんも今いるんでしたよね？」
その申請を出した人物を尋ね、その人物の名が画面の向こうから耳に入った瞬間……なのはとスバルは固まった。
『いえ、確か申請者は……えっと、あぁ――――スクライア司書長ですね』
「「……えっ？」」
なのはとスバルは相手が何を言っているのかガ……本当に何を言っているのか、分からなかった。
模擬戦？　あのユーノが？　一体誰と、なんの目的で？
そうは思ったが、ユーノだって全く模擬戦をしないわけではない。今でも時たま、クロノ辺りがユーノを引っ張り出すことはある。

どうにか、正気を取り戻したなのははこう聞いた。
「あ、あの……相手はクロノ君――――じゃなくて、ハラオウン提督です……よね？」
『いえ、司書長のお相手は――高町一等空尉の娘さんとそのご友人のようです』
「「はい……？」」
二人は今度こそ何を言ったか理解できなかった。
ヴィヴィオとその友人？　第一候補アインハルト、次点でリオかミウラ。それよりずっと下がってコロナといったところか。
だとしても、なんであのユーノが子供相手に模擬戦するとも思えない。
というかあるはずがない。ユーノにかなり絶対的に近い信頼をよせるなのははそう思った。
『なんだかかなりご急ぎのご様子でしたし、何か事情がおありなのかとは思いますが……でも、かなり意外でした。司書長があんなに模擬戦をしたがるなんて。申請があったのは十分くらい前だったので、たぶんもうそろそろ始まっているんじゃないでしょうか？』
したがる？　あのユーノが？　そんな馬鹿な、あり得ない。というかもう始まっている？　といった疑問となんとも言えない感情がなのはの中を渦巻くが、画面の向こうでは何か用事が入ったらしく『あ、ハイ分かりました。それでは高町一等空尉、失礼します』と言って通信を切ろうとするのが見えた。それを見てなのはは我に返り、慌てて止めようとする。
「あ、ちょ、ちょっと待ってくださ……！」
しかし、プツッと通信は切れてしまう。
その場に残ったなんとも言えない雰囲気が残る。
「な、なのはさん！　ともかく隣のブースへ行きましょう」
「そ、そうだね！」
スバルもなのはと同じような状態だったが、ここにいてもしょうがないという活発な彼女ならではの気持ちが先行したのか、はたまた戦闘機人故の回復速度の速さか、それは分からないが、行動へと移るこ

とを決めた彼女が発した言葉でなのはも再び我に返り、隣のブースへと向かうことに。
――隣のブースへと急いで移動していく二人。
そうしてなのはとスバルが隣のブースへと移動し、そしてその中に入ろうとしたとき――
「「あっ」」
――どうやら同じような理由で集まったらしい友人たちと、会った。
「み、皆……どうして――って、決まってる……よね……？」
「ははは……」
「まぁ、そうやねぇ～」
なのはの問いに苦笑を返すフェイトと、なのはの反応が予想通りなので面白そうなはやてとその隣でそんな主の姿を見て、呆れているリインとシグナム。
更にその横では、ティアナとスバルが談笑する。
「ティア～」
「スバル。スバルも来たの……って、そりゃ来るわよねぇ」
「うん、なんかユーノせんせーとヴィヴィオ達が模擬戦してるって連絡が入って……」
「やっぱり……」
何だかはやての思惑通りの反応はばかりなので、ため息をついてしまうティアナは決して間違っていない、と思う。
しかし、当のはやてはその反応を面白がっており、やっぱりこうなったらなのはこう反応するだろうという思惑通りだ。
まぁ、その楽しみもこの辺にしておこう。
「まぁ、この件の真相はこん中や。入ってみよか」
「う、うん……」
「そうだね」
はやてが先陣を切って中に入ると、一同はその中で行われている光景に二重の意味で驚くことになる。

『争い止める者　――翡翠の拘束者――』

模擬戦の行われているブースに入った一同だったが、その中で行われている光景に……一同は驚愕した。
そこで行われていたのは、確かに模擬戦。模擬戦ではあった。
あったのだが――
「覇王空破断ッ！」
「ラウンドシールドッ！」
――入って来た一同をいきなり出迎えた爆風。そして、それが晴れると、翠の魔力光を放つ結界が張って有り……その中では二つの影がぶつかり合っていた。
先程の声から、おそらくアインハルトと……ユーノ？　だと、思われるが……　なんだか、妙に高かったような……もしかしてヴィヴィオだろうか？　声が似ているヴィヴィオが大人モードで声が低めのテイストになっている……ということなのだろうか？
しかし、その疑問は――
「うぅ～、誰か……降ろしてぇ……」
「ヴィヴィオっ!?」
――翡翠の鎖に縛られた、ヴィヴィオがぶら下げられていたのを見てそれは違うのを知った。
「えっ!?　なのはママ、フェイトママ！　どうしてここに？　それにははやてさんにシグナムさん、リイン、ティアナさん、スバルさんたちも」
「それはこっちのセリフだよ。ヴィヴィオ、一体何でユーノ君と模擬戦なんて……」
「それは……」
そう言ってヴィヴィオの視線の方向を見た一同は、シールドと拳のぶつかり合いがはじけ地面に着地したアインハルトと、バリアジャケットのマントが翻りよく見えないユーノの後ろ姿が見えたのだが……。

「？　何だろ……何か、小さいような…………？」
「えっ？　あ、ほんまや……何かユーノ君後姿小さいなぁ……」
「ホントだ……ユーノが小さい…………？」
「えっ、そんなまさかぁ……。だって、ユーノ先生の身長ってシグナムさんと同じ位だった筈ですよ？」
「まぁ、そうだな」
シグナム１６７㎝、ユーノ１６８㎝である。
「だよねぇ～、せんせー背高いもん」
ティアナとシグナム、スバルがそんなことを言っていると、なんだか土煙が立ち込めよく見えなかったフィールドの全容が見えてくる。
「さすがに、御強いですね……」
「仕事に……、戻る…ためさ！」
確かに、そこにはアインハルトとユーノがいた。
いた、のだが…………──
──すごく、ちっちゃかった……。
「「「えぇぇえええええええええええええええええええええええええええっっっっ!?!?!?!?」」」
──物凄く、ちっちゃかった。
そこにいたユーノは、なのはたちの記憶にあるよりも、小さかった。
「どど、どういうことなのっ!?」
「わわわ、分かんないよッ!?」
「…………」
三人娘驚嘆。あのはやてですら、この状況についてこれず、硬直中である。
「せんせー……だよね？」
「た、多分……」
「いったい何が起こっているのか……」
状況が分からない一同は、仕方なく戦いの行方を見守ることに……。
「そろそろ、終わりにさせてもらうよ、アインハルト！」
「させません……！」

互いに構え、決定打を打つべく動き出す。
「チェーンバインド！」
「この程度なら……覇王流には、通じま、せんっ！」
「勿論、そんなことは、わかってるさ！」
「っ!?」
ユーノがそう宣言した瞬間、チェーンバインドを交わしたアインハルトの両足にディレイドバインドが発動・拘束する。
「こんなもの……っ!?」
アンチェイン・ナックルの要領で、足のバインドを砕こうとするが――その隙が、決定打を許した。
ユーノの両手に、魔法陣が出現する。
「広がれ、戒めの鎖……」
翡翠の鎖が、縦横無尽にアインハルトの周囲を駆けめぐる。
「――ッ！」
アインハルトは焦ってどうにか拘束から脱しようとするが、ちょっとやそっとで破れるほど、高位の結界魔導師であるユーノのバインドは甘くない。
その間に、アインハルトに鎖が絡みつき、固める。
「捕らえて固めろ、封鎖の檻ッ！　アレスター・チェ――ンッ!!」
ユーノが鎖を引くと、その瞬間鎖に込められた魔力が凝縮し……爆発する。
ドカーンッ！　という音と共に鎖ははじけ飛び、爆発の中心にはアインハルトだけが残った。
「終わった……」
「……負け、ました……。流石なのはさんの――エース・オブ・エースの師匠……」
ユーノは、武装形態が解除され子供の姿に戻ったアインハルトに歩み寄り、謝った。
「ゴメンね……」
「えっ……？」
アインハルトは、その謝罪の意味が分からずポカンとした表情を浮

かべる。
「ゴメンね、アインハルト……よく考えてみたら、僕が仕事をしたいだけのわがままで君たちを困らせたのに、怪我までさせちゃって……」
「あ、いえ……私たちも司書長――ユーノさんと戦えて、いい経験になりましたから……」
「それでも、僕の考え不足だったよ……。ゴメン、今治療するから」
――シャマル先生ほどではないけど、少し間マシになると思うから、とユーノは印を組み詠唱を始める。
「妙なる響き、光となれ。癒しの円のその内にて、若き覇王に安らぎを与えよ」
翡翠の魔法陣が再び現れ、アインハルトを包み込む。
「これは……？」
「回復魔法なんだけど、昔なのはにも使ったことがある回復の結界魔法で、『ラウンドガーター・エクステンド』の防御抜きのバージョン。『ヒーリング・エクステンド』（癒しの拡張）」
翡翠の輝きが、自分の物とは少し違う『翠』の魔力光が、優しく舞い散る雪のようにアインハルトの体の傷を癒していく……。
「凄い……」
そして、ユーノはその結界を維持したまま、アインハルトを抱き上げる。
「ゆ、ユーノさんッ!?」
「？　どうしたの？」
「え、だって……ええっ!?」
「？　なんだかよく分からないけど、じっとしてて。子供に戻っちゃってるから、動かれると支えずらいから」
完全無自覚である。
そうして、ユーノはそのままアインハルトを抱えて、ヴィヴィオを拘束しているあたりへと向かう。
「ヴィヴィオ～ずっと縛ったままでゴメンね。いま解除するから――アレ？　どうしたのみんな？」
ヴィヴィオが拘束してあったところには、何故か――幼馴染ズとそ

の守護騎士、元生徒とその友人がいた。
なんで皆がいるのだろうか？　と、ユーノは疑問を口にした。
「「どうしたの？　じゃなあああああぁぁぁぁいいいいっっっ!!!!!」」
「〜〜〜〜〜〜っ!?」
皆の大声に、耳がキーンとするユーノ。
「な、なんだっていうのさぁ〜〜……？」
「ユーノくん！　この状況と、その姿は何ッ!?」
「そうだよ！　何で子供になってるの!?」
「そや！　なんでそうなっとるん!?」
「えぇと、その……」
かくかくしかじか、まるまるうまうま――というわけでこうなったと、その経緯を話したところ――
「「そんな状況になってるのに、なんで休まないの／ないの／へんのッ!?」」
――理不尽（？）にも、怒られた。←まずその認識が（ｒｙ。
「だ、だって……仕事したくて……――」
「「――休みなさいッ!!」」
「〜〜〜〜〜〜っ!?」
また怒られた。今この幼児化の原因となったロストロギアのせいで、思考が幼く子供寄りになっているユーノは、この理不尽（←だから、その認識が（ｒｙ）な怒りにもはや涙目である。
そもそも、替えの効かないポジションに据えられている以上、ユーノがいなくなるのは管理局としても、勿論なのは達としても困る。（勿論、婚期的な意味でも……ゲフンゲフン）
なのに、本人はそういうところに無頓着で……こんな状況になっても誰か別の後継者に司書長を譲り、そのうえで自分がサポート役になればこの姿でもよくね？　と思っている始末である。
それを本気で思っているあたり、たちが悪い。
ユーノが大物だと誰もが言うが、本人は「僕が大物？　そんなわけないよ〜」という始末、ほんっとうに始末に負えない。

――大物じゃない？　『無限書庫』を稼働まで至らせたくせに？
――替わりはいる？　誰がアンタみたいに百冊同時に検索＆速読できるマルチタスク持ちなんていねぇよ。
ユーノが必要な理由や、いてほしい意味など、挙げればきりがない。なのに、本人は無自覚。
そんな訳で、先ほどの発言を理解していないユーノはただただ、怒鳴られた理不尽（？）に涙目になり、皆を上目遣いで（現在の身長的な意味で）一同を見上げるだけである。
「な、なんなのさぁ～……？　みんなしてぇー……。ぼ、僕が何したってのさぁ……？」
そんな涙目ユーノに、一同の胸がキュンとなったのは内緒だ。
「と、とにかくッ！　ユーノ君には休息が必要です！　なので、ここはユーノくんの愛弟子の私が……」
ガシッ！　と音がするほど、なのはの肩をフェイトが強くつかんだ。
「ふぇ、フェイトちゃん？」
「ユーノのお世話をするのは……私だよ」
「……これは、いくらフェイトちゃんとは言えども譲れないの」
「私も、譲れない……」
二人はいつの間にかセットアップしており、各々のデバイスである『レイジングハート』と『バルディッシュ』を構えて、瞳のハイライトを消した姿で対峙していた。
ユーノはそんな二人を見てオロオロとしていた。
「な、なのは、フェイトも！　どうしたのさ？」
「ええんやよ、ユーノくん。気にせんといてや、それより……　私の家でご飯食べへん？　好きなもん作ったるよぉ？」
「は、はやて？」
「ええから、ええから～。お家帰ろうなぁ～？」
「えっ……ちょ!?　は、はやてっ!?」
はやてに抱きあげられるユーノ。
「あぁ～……フェレットモードとはまた違った、抱き心地が……」

ユーノのことをモフモフする、はやて……だが――
「――はやてちゃん？　何してるのかな……？」
「――はやて、何してるの……？」
――悪魔と死神の目と鼻と耳は、しっかりとそれを捉えていた。
「な、なのはちゃん、フェイトちゃん……？」
「どこ行く気なの？　ユーノくんをお持ち帰りするのは、私なの」
「違うよ、なのは。それは私……だからはやて、ユーノを渡して……」
「……こればっかりは、譲れんなぁ」
バチバチと火花散る修羅場（↑というより、ユーノ一人が割を食う状況である）にユーノはすっかり怯えている。だんだんと思考が――というより、感性が子供寄りになっているユーノはこのよく分からない（ユーノ一人だけだが）状況に泣きである。そんな彼に手を差し伸べる天使（つまり、悪魔）の姿も。
「ユーノ先生……私と行きましょう」
「へっ？　ら、ランスター……さん？」
「そんな他人行儀な呼び方しないでください、前みたいに『ティア』って呼んでくださいよ」
「あぁー……ずるいよぉティア～！　私もせんせーを抱きしめたいぃ～！」
「スバル、アンタはもう妹がいっぱいいるでしょ……そっちで我慢しなさいよ！」
「ええ～、おーぼーだよぉ～！」
年下にさえ引っ張り合いされることに抗えない自分が情けないユーノくんでした。
（誰か……、助けて……）
それは――切な願いであった。
「ししょちょー……そろそろ、私を下してください……」
「あっ、ゴメン……ヴィヴィオ」
ユーノはヴィヴィオを下す。
「うぅ……汚されましたぁ」
「他人聞きが悪いよ……すぐに降ろさなかったのは謝るから……」

「……じゃあ、責任とって――家に来てください♪」
「なんでそうなるの!?」
「それは……何でもいいよね♪」
「何その理不尽な理由!?」
大人モードが解けてないヴィヴィオは、ユーノをがっちり捕まえ……お持ち帰りの体勢に入った。
しかし、それをなのはが止める。
「ヴィヴィオ……ユーノくんを、返して……」
「……なのはママ、ユーノ君はもうヴィヴィオのだよ」
「何言ってるの？　ユーノくんはなのはの旦那様なの」
「うぇぇぇっっ!?」
驚愕の宣言。確かになのはに人並み以上に好意はユーノも持っていたが、いつも『お友達』な反応ばかりなので、もう希望は無いかなと思っていたのだが……。
そして、高町母娘の母娘喧嘩、勃発。
流石にこのカオスな状況に、ユーノも怒った。
自分が原因なのだろう、でもだからと言って今こうして争っている皆はいつもの皆じゃない。
――だから、止める。
ユーノが腕を振ると、彼の翡翠の魔法陣が部屋中に次々と並んでいく。
その様子を見て皆は一斉にユーノの方を向く。
「ゴメン。きっと僕がいけなかったんだ、だからここで皆を止めるよ……。広がれ、戒めの鎖。全てを捉えろ……封鎖の檻。アレスター・チェーン・アルティメットッ！」
全ての魔法陣から発生された鎖が、その場にいた全員を捉え、固める。
そうして皆を引き離し、落ち着かせるためにユーノはみんなに謝った。
「ゴメン皆……。僕がわがままで仕事をすると言い張ったばかりに、こんなことになって……」

心から、謝った。
ただそれだけの事。
だが、それでみんなの頭も冷え、冷静になった。
互いに謝り合い、ここでこの混沌は終わりを告げた。
『司書長幼児化事件』による副次的な抗争は、ここで終わったのだった。

おまけ

何やら精神リンクでフェイトから変な感情が流れ込んできたので、心配になり様子を見に来た。すると、フェイトのほかにいたなのはたちも何やらただならぬ様子で戦っておりいったい何があったのか!?
と驚いたが、それもすぐユーノの鎖で終了させられた。
ホッとして、フェイトたちに何があったのかを聞き、しばし説教をしたのち……。仕方ないのでローテーションを提案してみた。
(ぶっちゃけこのままユーノを一人で家に戻らせたら、子供の一人暮らしとかそういうこと以前に、このお子様司書長はまともな生活サイクルを送るとも思えない。よって、誰かを監視役にとのことだ)
そのローテーションはくじ引きにより決まった。
早速今夜からユーノはお泊りの日々開始である。(ただ、一人暮らしの者はユーノの家に来てもらう、という形だが)
ユーノはそのアルフの発言に驚いていたが、正直今の彼の生活状況を把握しているアルフにその事実を突きつけられるとぐうの音も出ないので、ユーノはおとなしく従うことに。

――司書長の受難は、ここからはじまる。

『お宅訪問！　――ナカジマ家（スバル＆ノーヴェ＆チームナカジマ＋α編）――』

それではリクエストの多かったナカジマ家編（一応メインとして据えるヒロインはスバルとチームナカジマの面々です）

×　×　×

――ナカジマ家（スバル宅にて）

「それにしてもセンセーよ、災難だったなぁ～そんな姿になっちまうなんてさ」

「うん、でも生活面ではそれほど困ってはいなんだけどね」

苦笑しながら、ノーヴェにそう返すユーノ。

「その生活面が不安だからこうなってんじゃねぇ――の～？」

「うっ。た、確かに……」

言い返せない。ぐうの音も出ない正論である。

はてさて、なんでユーノはこんな感じにスバルの家でノーヴェに抱っこされているかと言いますと、その話はほんの二、三時間前へと遡る。

×　×　×

さてさて。公平なくじ引きの結果、最初にゆーのくんと過ごせる権利を得たのは――

「いーやったぁぁぁぁぁぁぁッ!!」

――スバルだった。

「くぅッ……。不覚なの……！」

「うぅぅゆーのぉ～……」

「なんでや……ある意味不遇な者同士のシンパシーとか働かへんのかいな……」
「スバルに取られるなんて……！」
「……ユノユノ」
「べ、べつに……悔しくなんてねーですよ!?」←ちゃっかり参戦してるヴィータちゃん。
「シャマルセンセー、残念です……」←こちらもいつの間にか参戦してる先生である。
「うぅぅ、ユーノくん……」
「……残念です」
　敗者の悲痛な叫び（？）を受けつつも、スバルは完全に有頂天である。
「ふっふふ～。じゃあ今日は私んちですね～、せんせー？」
「あ、うん。ゴメンねスバル。迷惑かけると思うけど、よろしくお願いします」
「いえいえ～（寧ろ歓迎！　せんせーなら万事オッケーですよ！　寧ろカムヒアーですよ!!）」
　スバル、幸せ頂点！
　――だったのだが。
「なんでこーなるのぉぉぉオオオオオオオッ!!??」
　みなさんご存じだとは思うが、彼女の職業はレスキュー、である。となれば、急な招集も所詮よくある事である。
　早速ユーノの家に行こうかと思ったのだが、その瞬間――依頼が飛び込んできた。
　そんな訳で泣く泣く現場へと急行するスバル。
　しかしそうなると困るのはユーノである。さてどうしたものかと思ったが、そこへ丁度誰かが図ったようなタイミングで妹登場。
「よースバル、こんなとこで何してんだ……？　ン？　その子誰だ？」
「ノーヴェ！　ちょっとせんせー預かってて！　はいコレ家の鍵！」
「へ？」
「ゴメン！　後よろしく！　――あっ！　後せんせーに変なことしな

いでよオオオオオ……!!??」
「……一体何だってんだ……？」
「たははは……」
――そんな訳で冒頭に戻る。
急遽以来の入ったスバルのところに偶々通りかかったノーヴェにユーノを任せた、ということがこの話の顛末である。
そんな訳でノーヴェに抱っこされているユーノくん。
――するとそこへ一通の通信が入って来た。
『ノーヴェ～、月の練習のことなんだけど――って!? なんでユーノくんがそこに!?』
「何そんな驚いてんだー？ ヴィヴィオ～」
『えっ、だって……ええっ!?』
「スバルに緊急の仕事が入っちゃってね、それでノーヴェに預けられたんだ」
『はぁ……そーですか――って、そうじゃなくて!? ノーヴェ狡いよ！ 私だってユーノ君といたかったのに――』
「なら家来るか？」
『――へ？』
一周呆けるヴィヴィオ。
「丁度いいから皆連れて遊び来いよ、今二人で暇だしよ」
「あ、それいいね。ヴィヴィオ達もおいでよ」
そのセリフに一瞬固まるヴィヴィオだが、ノーヴェとユーノが声を掛けると即座に我に返り速攻で返事を返した。
『……、』
「ん？ どしたーヴィヴィオ～？」
「ヴィヴィオ？」
『――ハッ！ す、すぐ行くから！ 五分で行くからね!!』
「いや、何もそんな急がなくても……」
「ゆっくりおいでよ」
『分かってるよぉ！』
「「(絶対分かってないな……)」」

それはともかくとして、そのやり取りの約五分後――ナカジマ家の玄関にぜーぜーと息を切らせたヴィヴィオ達四人娘と、どこから引っ張って来たのか……ヴィヴィオの友達で、ヴィータとザフィーラの弟子であるミウラとインターミドルの前々回チャンピオンであるジークまで連れて来ていた。
「だ、大丈夫……？」
「だ、大丈夫です……」
どう見ても大丈夫そうには見えない。
仕方なくユーノはパパッと六人分のドリンク作り、それを彼女らに渡していく。
「はい、ヴィヴィオ、アインハルト」
「ありがとぉ……、ユーノくん」
「す、すみません……」
あからさまにバテバテの状態であるヴィヴィオとアインハルトは、差し出されたそれを素直に受け取る。
そしてユーノはその隣で半分のびかけているリオとコロナにもそれを渡す。
「はい、リオ、コロナ。お疲れさま」
「あ、ありがとうございますぅー……」
「ししょちょ――……ありがとうございます～……」
二人はよほどバテていたらしく、ドリンクを受け取るとちびちびと力なく飲みながら、乱れるなんてものじゃないほどに荒れた息を整える。
「はい、君たちも」
「あ、有難うございます！」
「お、おおきに……」
どうやら二人は他の子どもたちよりかは疲れていないらしく、荒息こそついているものの、そこまで深刻ではないらしい。
ユーノはそれを見て体力があるなぁ～、と感心しつつ……　子供たち（勿論今の彼は見た目子供だが）の回復を待っていたが、不意にミウラがおずおずとユーノにこう尋ねてきた。

「あ、あのぉー……」
「ん？　何だい、ミウラさん」
「あ、あの、ユーノ司書長さん――何ですよね……？」
「うん、そうだけど……、それがなにか……？」
「あ、いえ……。ただ、その……以前『無限書庫』にお邪魔したときに見たときとは大分イメージが違うなぁ……と思って」
「ああ、それがちょっと今ロストロギアの影響で子供になっちゃってて……」
　苦笑しながら頭をポリポリと掻くユーノ。
「たはー、子供に戻っちゃうのって、結構あるんですねぇ……」
　――ボク、ビックリです。とミウラは口を開けたまま驚きを表す。
まぁ、そんなに頻繁に起こることでもないんだけどね？　とユーノは伊藤そう弁明しておくが、
「ウチは、少しわかるなぁ……その気持ち」
　ジークはそんなことを口にする。
　何を隠そう彼女もまた、先日の『無限書庫』の騒乱で〝魔女〟であるファイビア・クロゼルグに子供に戻された経験がある。
「ししょちょーさんのお気持ち、わかりますぅ」
「いやぁ……なんともお恥ずかしいことで。でも、僕ホントは二十三なんだけどねぇ……」
　その瞬間、ジークとミウラが固まる。
「え、ってことはヴィヴィオさんのお母さんと同い年、ってことですか？」
「あ、うん。そうだけど……」
　なのはたちと比べられるとやっぱり老けて見えるかなぁ、たははは……。とユーノが苦笑するが、二人の驚いたところはそこではない。
「「(二十三!?　あの中性的な顔立ちで、しかも声もかなり高いのに……)」」
　彼女たちの父親と比べても、というか世の中の全般的な男性の基準からすれば絶対おかしい。
　まぁ確かに、ユーノは正直男らしいという基準には確かに当てはま

らない。中性的な顔立ちは衰えず、毛深いわけでもなく、すらりとした体躯に、高い声――正直女性にしか見えなかった第一印象を振り払っても、最低でも十代後半くらいじゃないと男性としては老けなさすぎではないだろうか？

男性からもだろうが、寧ろ女性からクレームが来そうである。何せ特に手入れしたわけでもないのにさらさらな髪質で、室内勤務ということを差し引いても『男性』としては綺麗すぎる肌――正直むかつくというのが幼馴染たちの結論である。（以前抱き着こうとして、自分達より細い体躯にさらに女性としてのプライドが折れそうになったらしい）←ティアとスバルはギリギリ耐えた。（まだ、同じくらいだから）

まあ、そんなことはどうでもいいことと言えばそれまでであり、ユーノのことはそうだと納得したミウラ。その間に息を落ち着けたヴィヴィオたちもノーヴェに促され玄関から家の中へと入る。

× × ×

さてさて、家の中に入った一同は早速今度の鍛錬の話し合いをすることにしようと思われたのだが、ノーヴェがふつーにユーノくんを膝の上に載せたのにヴィヴィオとアインハルトが「狡い」と文句を言った。

「ノーヴェず～る～い～っ」

「あ、あの。わ、私も……その……」

「わーったわーった。じゃあ悪いんだけどよセンセー、ヴィヴィオとアインハルトの隣にいってくれ」

「あ、うん」

そう言って苦笑しながら二人の隣に行くユーノくん。五歳くらいゆえにその動き一つ一つがトテトテとしていて可愛い。ヴィヴィオは挙句の果てに自分の膝上に載せようとしたが、さすがに小学生の、それも幼馴染の娘で、自分自身も娘的な存在だと（少なくとも自分は、とユーノは思ってる。←向こうは寧ろ女と見てほしかったりするら

しい）でもある彼女に膝上に載せられるのはちょっとと思ったが、アインハルトも一緒になってキラキラと擬音が付きそうな程に期待したようなまなざしを向けられ、ユーノはついに折れた。
「……僕なんかわざわざ抱っこしても面白くないと思うんだけど……？」
「そんなことないからぁ～、こうしてるんですぅ～♪」
すりすりとユーノくんを愛でるヴィヴィオ。
「ヴぃ、ヴィヴィオさん。は、早く交代してください……！」
「も、もうちょっとだけ～～」
そのわちゃわちゃしてる様子と、その間に挟まれて困っているユーノくんの様子を見て、リオやコロナたちもうずうずとし出したのは内緒であるとここに記しておこう。（まあ、内緒なんて防壁はすぐに決壊するのだが）
その間にもヴィヴィオからユーノを受け取ったアインハルトは、いつもの無口に拍車をかけて言葉を発さず、ただただ蕩けたような表情でぽわぽわ～、としていた。
「……♪」
「……　あのさ、アインハルト」
「――っ……！　は、はい……何でしょうか？」
ヴィヴィオと同様の有無を聞こうとしたのだが、なんだか――アインハルトの表情を見ているとヴィヴィオ以上に天然な答えを返されそうな気がして、先に出そうになった言葉を引っ込め、何か適当な言葉を探す。
「……重く、無いかな？」
やっと出てきた言葉は何だが少し、いやかなり不自然な気もしたが……天然なアインハルトはその言葉をそのままにとらえ質問の答えを変えす。
「はい、とても軽いです」
「（男としてはちょっとショックかも……）そ、そっか……」
適当に言葉を選んだことを地味に後悔しながら、どうやら彼女はヴィヴィオと同じく自分を抱くことを――〝楽しんでいる〟らしい

ので、とりあえずそれに乗っておくしかないのかぁとユーノは考えた。

――しかし……。

（なんかこうしてると、本当に子供の頃を思い出すなぁ……）

子供の頃、部族の友達とたわむれた記憶や……昔、魔導学院に通っていたころに会った姉的な存在や九歳の頃無限書庫の調べもの中に仲良く（？）なった猫姉妹（特に妹の方）に可愛がられた（勿論いろんな意味で）記憶が思い出される。

当時は色々と恥ずかしかったが、今考えてみるとそれもいい思い出というやついなるのだろう。

肉親がいない自分にとって、そうやって可愛がってくれる人がいるというのは恵まれた境遇だということはよく分かっている。

もし少しでも何かがずれれば、自分自身が孤独という闇に囚われ、道を踏み外すほどに狂う可能性だってある。勿論、自分が狂ったくらいで世界がどうこうなるなどとは考えないが、それでも多少（？）迷惑にはなるだろう。

そういう意味では、こうして誰かのやさしさのぬくもりを感じていられることは本当にありがたいことなのだから……。

ただ、今ユーノが管理局に反旗を翻したらかなり困ったことになるだろう、ということだけは簡単に想像がつく。

――何せ、今世界の記憶とその全容足る叡智に近いのは――彼なのだから。

むろん、彼がそんなことをしない、というのが大前提となって存在しているのだが……もしかしたら〝そんな未来〟も〝孤独〟もあったかもしれないということである。

とまあ少々暗い思考に突入してしまったが、現状はほのぼのとしたものである。アインハルトの様子を見て他の子どもたちも少しうずうずしている様な微笑ましいものである。（その間救助現場ではスバルを含めた方々が現状に涙していたが……犯人たちの命が心配である↑ちなみに、事件の原因は金目当ての強奪という非常に器の小さい小物であるが、ただその強奪の後、逃走の手段の一つにビルまで倒壊

させたとかで彼女らが駆り出される羽目になったそうな――本気で彼らの今後が心配である……主に制裁的な意味で）

その間にも自分たちよりも年下になってしまったユーノくんを愛でる一同。

ユーノの抱いていたネガティブな感情など何のその、温かい雰囲気が彼の周りを包んでいく。

（ああ……）

――恵まれてるな、と先ほどのネガティブな感情とは違う……本当の温かい思いが、彼の周りを包む。

そのまま、ユーノを交えたまま今後の練習スケジュールを組んでいく一同。ユーノは最近とんと目にしていなかったヴィヴィオのストライクアーツの現状を見て、頑張っているんだなぁと嬉しくなった。

優しく微笑みつつ、皆の話を静かに聞き続けるユーノ。その様子は、在りし日のなのは、フェイト、はやて、アリサ、すずかといった幼馴染たちや、アルフやクロノやエイミィ、リンディ、ヴォルケンリッターの皆や、あの頃ずっと一緒だった大切な人たちとの日々が、今この瞬間と重なったような気がした。

――なんだか、落ち着く……というか……楽しい、なぁ……。

純粋に……そう思った。

そうやって久しく感じていなかった〝穏やかな日々〟をユーノは今、確かに感じていた……。

そうやって流れる時間は、早く過ぎていく――とよく言われるが、ユーノにとってはこの時間は長く、ゆっくりと『心』にしみわたっていた。

（ロストロギアに……感謝、かな……？）

そうつぶやいたユーノは、なんだか久しぶりに誰かと過ごす『日常』の〝楽しさ〟を、感じたような気がしていた。

終わり。

× × × おまけ・そのいちっ！

その夜の事、結局ヴィヴィオ達もここに泊まっていくことになり、かなりは大人数での夕食を終え眠る段階となったのだが――
「あの……、なんでこうなるのかな……？」
「？　どうかしたんですか、ししょち……おっと、ユーノくん」
「いや、だって……なんでわざわざ皆僕のところに来るの？」
「いいじゃないですか、可愛いユーノくんと一緒にいたいんだよ～」
「はぁ……」
いっそフェレットモードでも使おうか？　と思ったが、べつに必要でお無いのにフェレットになる趣味はない。だが、皆わざわざ自分の部屋に来るのやら……。
女の子同士の方が楽しいだろうに……。（そんな風に優しすぎるほどに「受け身」な姿勢のままではだめなんじゃないかなぁ……）
しかし、久方ぶりに〝人のぬくもり〟を感じて眠りについた彼の表情は――とても穏やかだったという。

×　×　×　おまけ・そのにっ！

その翌日、かなりボロボロな状態で帰宅したスバルをユーノは介抱していた。
「えへへぇ～……」
「なんだか今日のスバルは甘えん坊だね？」
「そ～ですかぁ～？　あ、でも～せんせーの会いたかったのはぁ……ホントですよ～？」
「そっか、有難う……スバル」
ユーノの膝枕にすりすりとしつつ、ゴロゴロ～と犬か猫のようにして甘えている。
「でも、僕なんかでよかったの？　ノーヴェとかヴィヴィオ達もいるのに」
「今は～、せんせーがいいんですぅ～♪」
「そっか……有難う。そう言ってくれると、嬉しいよ。僕にできる事

なら何かしてあげたいな……」
「！　じゃあ、せんせー……一つお願いがあります」
「何だい？」
「えっとー……その……〝お姉ちゃん〟って……呼んでもらえませんか？」
「ええっ!?」
　その願いに驚くユーノ。しかし、スバルはせっかくの好機を逃したくない。
「おねがいします！　何なら後で私に何してもいいですｋ……――」
「あわわわっ！　わ、わかった、分かったから！　」
　何だか不穏且つ、どこかで自分の命を縮めかねないような発言をされるところだった気がする。主に先の出動で不機嫌な魔王とか死神とかタヌキとかその守護騎士とか凡人（笑）とか、後今自分の後ろで怒気をはらんでいる視線を向けている方々とか。
「そうですか！　ならぜひ！」ケロッ
「（……わざと？　いや、そんなわけないか……）」
「せーんせ！　早くはやくぅ～！」
　やっぱりわざとなんじゃなかなぁと思いつつ、ユーノは出来ることをするといった手前、何もしないというわけにもいかない。
　よ、よし！　と意を決し、スバルの方を向き……その言葉を言う。
「え、えっと……その、――お、……おね……――お姉…ちゃん……？」
「――――ッ!!??　ぐハッ!!」
「す、スバルーっ!!?!?」
　何か知らんが鼻血吹いて倒れたスバルに驚くユーノ。
　あわあわと慌てるユーノ、ノーヴェ達の方を向くが……そちらでも同じような光景があった。
「み、皆――っ!?」
　そのあと、ユーノくんはしばらく倒れた皆の介護のために奔走するのだった。

――ちなみに、そのユーノくんの〝お姉ちゃん〟ボイスは……とある同人作家もやっているゴーレムクリエイターが録音していたことがのちに発覚し、それは戦技教官と執務官と指令の手に渡り、三人やそれに関連する者たちの尊い犠牲を払ったとかなんとか。

×　×　×　おまけ・そのさんっ！

時はスバル帰宅より少し戻り、真夜中――ユーノの周りを固めていた少女たちだったが、雑魚寝の状態では少しずつ皆が動くことで多少初期の状態からずれてしまうことが多い。

そしてこの時もその例にもれず、一番端にいたはずのジークがユーノの目の前に来てしまうこともよくある事、であった。

ちなみに、幸か不幸か――目を覚ましたのはジークの方であった。

その光景を目にした瞬間、ジークは声にならない悲鳴という奴を上げたが、幸いなことにまさに声にならざる悲鳴は、当然誰にも聞かれることはない。

「んぅ……っ……」

「――っ!?」

ビクッ！　思ったよりも近かったユーノが少し動いたので、ジークは驚いたが……ユーノが起きる気配はなくホッとしていた。

だが、改めて見ていると――

（……ししょちょーさん、ホンマに男の子なんやろか……？）

――当然の疑問が浮かんでくる。

あざやかな金髪や、翡翠の瞳（勿論今は閉じられているが）、優し気な顔立ち、柔らかそうな唇……とそこまで想像して目をそらした。

（う、ウチ何しとるんやろ……！）

自分がやっていたことに赤面し、布団を深くかぶりなおすと音を立てないようにじたばたと悶える。

その間にも、

（二十三……やったっけ？　ししょちょーさんの年……）

十六と二十三なら、それほど問題はないかな……とジークは考えてしまう。ここまで男の子に接近したことなど無い彼女はどうにも思考が先走り過ぎであった。

――ちなみに、ミウラはそれと同じことを寝ぼけながらに体験し……、彼女は朝までユーノに抱き着きっぱなしだったとかなんとか。

「ふぁ～……いいにおいですぅ～……」

「ん……っ……あった……かぃ……」

――翌朝のヴィヴィオとアインハルトの反応。

「にゃぁぁぁぁぁっっ!!!!」

「ず、ずるいです…ミウラさん……!!」

今度こそ本当に終わり。

『来訪の弟子、再会　――マテリアルズ――』

ナカジマ家にてお世話になっていたユーノくん。久々に管理局本局に足を運び入れた彼は、幼馴染たちのいるという部屋を訪れようとして彼女らのいるという部屋に連絡を入れたのだが……。

何だか、変なのだ……。

「……なのは、だよね？」

『ええ、そうですよ――ではなくて……うん、そうだよぉユーノくんっ♪』

「（ちょっと！　私そんなぶりっ子じゃないの……もがもがっ！）」

「？　なのは……何か変な音が聞こえた気が――」

『大丈夫です、なんでもありません』

「なんか今日は微妙に口調が硬いね、なのは」

『そ、そんなことは……コホン。そ、そんなことないよぉ！』

「……うん、分かった。じゃあ今から行くよ」

『待ってるよぉ～♪』

「うん」

『ユーノぉー！早く来てねー！』

「……フェイト？　なんか今日は妙に……テンションが高いね」

『そうかぁ――』〝フェイトちゃん〟？』あ、うん……ゴメン。しゅt――じゃなくてナノハっ！』

「……まぁ、行くけど」

『待ってるよぉ～』

「……うん」

何だか違和感を感じつつも、と声は同じだったので特に疑いもなく彼は部屋のドアを開けた。

しかし、その時――

「お久しぶりです、師匠」

「えっ？」

「それでは師匠は頂いていきますよ、ナノハ」

――何か知らぬ間に、掻っ攫われました。
「えっ？　えっ？」
何この状況？　とユーノくん絶賛混乱中。しかし、唐突に現れた来訪者に攫われてしまったので、今何がどうなっているのかが分からない。
しかし、よくよく考えてみれば、まずはこの誘拐犯の顔を見といたほうがいいのを思い出したユーノくんは、今自分を抱えている人物の顔を見る。すると……。
「――えっ？　嘘、シュテル？」
「ええ、お久しぶりですね……師匠」
そこには幼馴染と似た顔立ちの女性がいた。
嘗て、起こった事件の『闇の欠片事件』と『ギアーズ事件』や『砕けえぬ闇事件』の際に、『闇の書の闇』から生まれた、なのは、フェイト、はやてのコピー、『構成体（マテリアル）』の一人で――。
マテリアルSこと、星光の殲滅者――シュテル・ザ・デストラクター――である。
何の因果か、オリジナルのなのはの最初の師匠であるユーノのことを「師匠」と呼んでいる。戦った時に、彼の魔導運用に「素晴らしい」という評価をしており、おそらくそれが原因かと思われる。
まあそれはともかく、今はなんでとある別の次元世界（エルトリア）に行ったはずの彼女が何でこんなところにいて、しかもなんで今こうして自分を掻っ攫っているのか……まずそこから分からないユーノくんは、とりあえず質問してみることにした。
「あ、あの……シュテル？」
「はい、何でしょうか師匠？」
「あの、なんで僕は攫われてる……のかな？」
「突然の無礼はお詫びします。ですが、こうでもしないとナノハたちがうるさいので……ちょっとだけ強行手段に出させて頂きました」
「な、なるほど……」
そこで納得するなよ、とツッコミが来そうな程あっさり受け入れてしまったユーノくん。（理解するのが嫌だった、というのもあるのか

もしれないが）
　ユーノくんが生返事をしてしまったその時、シュテルの後ろからこれまた何人かの女性が出てきた。
「僕らもいるぞー」
「うむ、マテリアルは三人そろってこそ、だからな」
「あ、あの、お久しぶりです……」
「……うん。もう、これくらいじゃ驚かないよ……」
　さて、さらに出てきたマテリアルズと紫天の盟主。雷刃の襲撃者と闇統べる王、そして砕けえぬ闇。
　レヴィ・ザ・スラッシャー、ロード・ディアーチェ、ユーリ・エーヴェルンの三人である。
　言いたいことはかなりあった。どうして止めてくれないの？　とか、マテリアルズのちゃんと成長するんだね、よかったとか。エルトリアの方はどうなったの？　とか、四人が来てるなら、アミタさんやキリエさんはどうしたの？　とか、……そもそもどうやって来たの？　とか。
　さて、どれから言うべきか……とか思っていたら、と戸津にレヴィに抱っこ役を変わられる。
「レヴィ……何するんですか」
「ボクだって抱っこしたいよ―、このユーノ、聞いてた通りすっごく可愛いしさぁ～」
「これ、ケンカするでないわ」
「なかよくですよー」
「……、」
　可愛い、か……と少し落ち込むユーノくん。しかし、そんなことを考える間もなく次なる襲撃が行われる。
「「「!?」」」
「？」
　シュテルたちが急に後方を見たので、ユーノも気になり工法を見てみたのだが……そこには、人とかはいなかった。いなかった。だが、代わりに――

――ものすごい勢いで迫ってくる桜色と金色と白色と虹色と新緑と橙色と青色とかの光が向かってきた。
「ディバイーン……バスタァァァッー！」
そして先陣を切り、迫りくる桜色の光の砲撃。
「ブラスト……ファイア――ァァァッ！」
それを真っ向から迎え討つ、朱色の炎の砲撃。
それぞれの威力を相殺し合い、それを放った本人たちは一旦止まり、対峙する。（さっきまで管理局の中だった筈なのだが……どんだけ早いんだろうか、彼女らの移動速度←これも愛がなせる業か……《たぶん違う》）
「やっと……追いついたの」
「ナノハ、師匠のことなら……私に任せてくださいと言ったじゃありませんか」
「そんなの納得できるはずないの！　というか普通に考えてユーノくんはうちに来るはずなのに、なんかくじ引きとか王道はもう少し寝かせようとかで最初はスバルの家に行っちゃうし、なのにヴィヴィオが漁夫の利で一緒にお風呂とか入っちゃうし！」
「!?　それは本当ですかっ!?」
ユーノの方を見て、ものすごい剣幕で問いかけるシュテル。ユーノは恥ずかしそうに、顔を真っ赤にしつつ、かなりの間をおいて――
「……うん」
――と答えた。
「くっ……！　もう少し早く来ていれば……ッ！」
「だからシュテルどいて……。次にユーノくんとイチャイチャするのは、……私なの！」
「……それとこれとは話が別です。一〇年近く離れていた私と違って、貴方には十分時間があったではありませんか？」
「うっ……」
「ならばそれを物にできなかったあなたに落ち度が――」
シュテルはこれ幸いとばかりになのはを丸め込もうとしたのだが……。

「あれ？　でもシュテル確か五年位前まで、割と来てなかった？　確かちょっと忙しくなるから少し来れなくなるって言ってたから、それが終わったのかと……」
「し、師匠それは……！」
「……シュテル？」
「……、」
「ねぇ」
「……バレてしまっては仕方ありません。ですが、それでもあなたが有利だったのは変わりませんよ、ナノハ。ですからブランクの長い私に譲るのはある意味当然……」
「ううっ」
　確かにそれも事実。さて、如何様にしたものか……。
「でもでも！　私だってくじ引きして順番決めたのに！　いきなり来たからってユーノくんをとるなんてずるいよ！」
「……まぁ、そうですが――こんな状態の師匠を見て、正気でいられる方がいるなら私は見てみたいですね」
「「それは分かる」」
「」
　ユーノくん、絶句。世界は本当に、こんなはずじゃなかったことばっかりだ。と独りごちてみる。
　何だか、もう、どうでもよくなってきた。あーどうせ僕は女顔だよ―、シャマルセンセーにショタっ子とか言われちゃいましたよーと一人自暴自棄（だけど傍から見れば可愛い）な状況になったユーノくんである。
　その間にも、シュテルたちはごちゃごちゃと言い争いが続く。
「師匠とのツーショットくらいしか慰める者が無かった者の気持ちがあなたに分かりますかナノハ！」
「ツーショット!?　う、羨ましい……私だってもって無いのに！　っていうか、仕事忙しくて会えないのはこっちもだよ！　お陰でヴィヴィオまで争奪戦に加わっちゃったし……パパと呼ばせよう計画は破綻だよ」

「な、なんと……そこまでしようと……」
「でもなのは、ヴィヴィオのパパなら私が奥さんの方がいいよね？」
「フェイトちゃん冗談はその胸だけにしとくの」
「いやいや、だってさ。聖王家の血とかそういうのにしても、どっちかっていうと私とユーノの方がいいじゃない。金髪だし、翠と紅だし声もユーノに似てるし」
「ママたち！　なんで私をだしにしようとするの！　というか寧ろ年齢引き下げなこの現状なら、私が結婚する方が自然――」
「「お子様は黙ってないさい！」」←婚期逃がしかけの乙女たちの叫び。
「というか我らを忘れるな、我らとて男日照りなのだ」
「そーだぞーおとこひでりだぞー」
「そーですぅ～」
「（あー空が青い……）」←曇ってます。主に砲撃のぶつかり合いの煙で。ただそれ以上に瞳のフェイルターを曇らせています。現実逃避的な意味で。
　しかし何だろうか、自暴自棄にはなってみたものの……なんだか状況からは逃げられなさそうだ。というかレヴィ力強いね。流石は力のマテリアル。後、頭の後ろがなんか柔らかい。ヴィヴィオと同じくらいはあるね。（経験則（強制）に基づく）
　そもそも、ならもういっそのこと一つの家にまとめたらいいんじゃないか？　なんて考えが浮かぶが、それもどうだろうか？　納得してくれなさそうな気もする。というかまた淫獣とか言われそうで嫌なんだが……。（最近は落ち着いてます。つーかもう割と本気で結婚させてもいいんではないでしょうかねぇ？　魔法少女二十五歳は半分行き遅れな気も……）
「はぁ……ダメもとでやってみるかな」
　何かそっちの方が簡単そうだ。早速自分の口座を管理してくれているアルフに連絡を取ってみる。
『ん？　ユーノ、どうしたんだい』
「アルフ、なんだかみんながケンカして困ってるんだ」

『……苦労するねぇ。で、何か手伝うべきことは？』
「僕思ったんだ、寧ろ一か所に集めたらケンカしないんじゃないかなって……後、僕もう疲れたよ……」
『……お疲れさま、ユーノ』
「それでさ、家買おうと思って」
『……オーケー、良いよ。今回はその短絡的な子供思考がいい回答を導き出したね。たぶんそっちのがたぶん楽だわ』
　割とガチで。
「僕の口座、いま残高どれくらいあるかな？」
『むしろ気にするような給料かい？』
「……ゴメン、最近口座どころか明細すら見てなくて……」
『……子供の頃はしっかりしてたのにねぇ……仕事バカは直さないと』
「面目ないです」
　注意：勿論この間にも言い争い、および砲撃による「お話」は続いています。
『さーて、じゃあ口座ちょっと確認しとくね……ええと――ピーくらいだねぇ』
「そんなにあったっけ？」
『そりゃユーノ、アンタはこのミッドの最重要データベースの最高責任者だろう？　おまけに考古学の方でも稼いでるし……それに、この間の研究も相当とったんじゃなかったかい？』
「あーそうだったような気も……」
『はぁ、まぁお金の方は問題ないね。提督権限もあるくらいだし、そこまで気にする必要はないと思うよ？』
「そっか、……じゃあ広めの家買っても大丈夫かなぁ？」
『むしろヨユーだろうに……』
「じゃあ適当に見繕っといてくれない？」
『さすがに自分の住む家のデザインくらいは自分で選びなよ……。まぁ、フェイトも転がり込みそうな気もするからあたしも住むことになる気はするけど……』

「ははは、賑やかなのはいい事だよ。ケンカ腰は嫌いだけどね……クロノはまぁ、多分べつだけど」（ハッ！　ＢＬの臭いが!!）←落ち着いてください、同人作家さんのお嬢さん方。
『そんじゃあ、ほい。カタログ送っといたよー』
「アルフも資料探すの早くなったね―」
『そりゃ長年働いてるからねぇ……』
「その感謝を込めて、アルフとザフィーラのことも考えて選ぶよ。はやても来るだろうから、ヴォルケンのみんなも来るだろうしねぇ」
『ばっ！　べ、べつにそんな余計な気は……まわさなくてもいいんだよっ！』
「はいはい」
『ユーノぉぉぉ～～～～っ!!』
「ごめんごめん」
　気のない謝り方をしながらカタログをしばらく見て、良いのはないかと探すユーノくん。ちなみにこんなに長いやり取りをしてはいたものの、周りは気づかない。（どんだけ必死なんだ……）
　そしてついに、ユーノは良さげな物件を見つけた。
　――四階建てで、敷地が広く、縦に大きな造りとなっており、お子さんののびのびとした成長や、アウトドアな趣味もお庭で可能となっております。また、キッチンや食堂も広くつくられており、お客様をお招きする際にも安心の設計であります。大家族に、そしてのびのびとした暮らしを求める方にお勧めでございます。
　最後のフレーズに共感したユーノは早速この広告もとに電話をする。（下見はいいのか、と言えばまぁした方がいいのだろうが、彼の本業というか家業は考古学者で、発掘で鍛えられた目利きは結構こういう場面でも役に立つらしい）
　加えて既に建築済みらしいので（築一年と記載されている）これならすぐに住めるだろうと早速通信をつなぐ。
『はーい、お客様に快適な生活を！　カンフォートホーム・ミッドチルダ本店でございます～』
「あの、広告見たんですが……この四階建ての――」

『――はい！　ご購入を検討中でございますか？　それでしたら……
「あ、いえ、購入は決めたんです」あ、そうでございましたか！　大変ありがとうございます、それで奥様旦那様の方のご意見は……？』
「……ボク、男です」
『た、大変失礼いたしました！』
「いえ、今ちょっとした手違いで若返っちゃってまして……気にしないで下さい」
『……もしかして管理局の方ですか？』
「ええ、まぁ」
『そうでございましたか、では管理局の方がよくご利用されているおすすめのローンプランが――』
「いえ、一括でお願いしたいんですが……」
『――い、一括……でございますか？』
「ええ、口座の方は……の――です。早速引き落としを」
『は、ハイ……ええと』
　ぽちぽちと言われた通りの口座を入力していくが、応答していた販売員も半信半疑であった。しかし、確かに引き落とされた。しかもあっさりと。ちなみにミッドではこういった金銭の管理が進んでいるので、こんな簡単な方法でもあっさりと売り買いが可能なのである。（保険等の自動適応されるのだ。←ハイテクってすごいね、便利だね）
　最後に名義さえ示してもらえれば、後は登録されているデータをもとに自動で手続きや履歴を本人たちの元へと届ける様になっている。（送り先は端末やデバイスなど様々ではあるが）
『お、お引き落としは完了いたしました……』
「そうですか、ありがとうございます。あ、ちなみに鍵とかは……？」
『あ、そちらに関しては今から名義を取らせて頂けば、すぐに開錠の為のパスをお客様のデバイスまたは端末に送信させていただきます』
「なるほど、じゃあ僕の名義は――ユーノ・スクライアです」
『ユーノ様、ですね？　ではそちらの方に後五分ほどで開錠データが送信されますので、しばらくお待ち下さい。本日はお買い上げいただ

き、誠にありがとうございます』
「いえ、此方こそ……ありがとうございます」
『ではユーノ様の……無限書庫の総合司書長様のこれから快適な生活を心より願っております』
「何から何までありがとうございました」
そこで通信は終わったが……、販売部の方ではあっさりと大型物件がさばけたことに狂喜乱舞していた。しかも、あの総合司書長が購入したということでこれからの販売にも拍車がかかる。箔がつくことは間違いないだろう。
この日より、この不動産屋兼建築会社なカンフォートホームは売り上げがますます上り調子になるのだった。
勿論、その拍車がけをした人物本人は、そんなこと知りもしないが。
「あ、送られてきた」
この通りである。
「？」
まぁ、それはともかくとして……ユーノは面倒なこの状況をどうにかして収める手段を手に入れたわけで、早速それを使ってまどろみタイムに入りたい。というかホント疲れた。
「ねぇーみんな」
「どうしたの、ユーノくん？」
「どうしたのですか、師匠？」
「どうしたの、ユーノ？」
「どうした～ユーノ～？」
「どないしたんや？」
「どうかしたのか？」
「せんせー？」
「ユーノ先生、どうかされたんですか？」
「ユーノくん？」
「ユーノさん？」
「どうかしましたかぁ～？」
皆動きを止めてくれたのでほっとし、先程家を購入したことを告げ

……ケンカはやめて欲しいというと、皆しばし呆然とした（レヴィとユーリは別↑分かってないのと、付いて行けてない――つまり天然――な二人であった）

そして、そして～？

新たな共同生活が始まった。（決着が半分うやむやになったともいう）

× × ×

くじ引きをしたのにこれではと思ったが、なんか同棲状態になれたし……まぁ我慢しようと思った女性陣は、ユーノくんの寝顔を眺めつつ……その日を終えるに至った。

ただ、勿論……ユーノくんとのお風呂は誰も成すことができなかった。（本人が強く拒否）

「この前ヴィヴィオが余計なことしたせいなの！」

「余計な事じゃないもん！　スキンシップだもん！」

「……ユーノとお風呂……はいりたかったなぁ……」

「……いっそ監視カメラでも仕掛けたろうかなぁ……」

「……子鴉、その辺でやめておけ。犯罪だぞ」

「師匠……」

「しゅてるん、おちこまないでよーほらほら！　ボクの元気の出るポーズ百選見てみない～？」

そんなレヴィをユーリがやんややんやとはやし立てる。

「スバル……この前のお風呂騒動の時、映像とかは……？」

「……私たち戦闘機人にも、視覚情報の録画の機能は無いんだよ、ティア。……ううっ……！」

半分泣いているフォワード二人。

ちなみに余談だが、寝るときにユーノ君の隣を確保できたのはレヴィとユーリ、そしてディアーチェだった。（天然とオカンの勝利）

隣なのに三人なのは、ユーノくんの髪の香りをかごうとした変態がいたからである。勿論、誰とは言わないが。
そして、こんな感じで唐突に始まった幼児化から始まる騒動は、次の段階へと進んだのだった。

×　×　×　おまけ・そのいちっ！

「ここ、どこでしょうか……」
「もぉー！　ちゃんと道を覚えるなり地図見るなりしてよねお姉ちゃん!!　おかげで迷っちゃった上に、ディアーチェ達もいなくなってるし！　もうどうするのよ！」
「大丈夫です！　何とかなります！」
「どっからくるのよその自信……K・S・P――キリエ・スーパー・ピンチよん……」
迷子になっていたエルトリアのギアーズ姉妹。
＊この二日後、ようやく彼女らのことを思い出した（ユーノに言われて）マテリアルズによってサーチ＆無事に保護（回収）されましたのでご安心を。（笑）

×　×　×　おまけ・そのにっ！

そう言えば、ユーノくんを幼児化させたロストロギア……いったいどうなっているのだろうか？　ロストロギアのその後を追ってみよう。
発動の後、すぐさま（ユーノくんがアルフに言われてから）解析に回されたものの、よく分からないままであり、一時ユーノに返却された。もともと彼が鑑定を管理局の方から（厳密にいえばクロノから）依頼されたものであり、気長に頼むとのお達しであったのでそれほど気にかけられることもなく、机の上に放置。←ヲイ。
そしてユーノくんが購入した自宅へと机上の中身ごと移動。（気づ

かれずにね）

結論、家の中に（リビングの装飾品になってます↑置いたのはヴィヴィオ（勿論無自覚）ｗｗ）

そして、これがその、まま大人しくしているわけがない。次なる嵐の種は、すぐそこ――「こんにちわー遊びに来たわよー！」、「おじゃましまーす」――うん来てるよ、……すぐ、そこまで。

――「お邪魔するっす～！」、「こんちわー」、「陛下――、ユーノさんお邪魔します」、「お邪魔します」、「カリム、やっぱりせんせーに行ってからの方がよかったんじゃないかい？」、「何言ってるのロッサ、ユーノが小さくなってるんだもの！　見なくちゃ損よ、それに昔出来なかったことも今なら……ゴホン、な、懐かしい姿を見るのもいいものじゃないかしら？」――

ものすごいそこまできてるよ。

――「あ、これキレーね――」、「地球のとは何か違うね――」、「アレ、なんか光ってないすか？」、「ホントだ――」、「ホントですね」、「どうなってるんでしょうか？」、「そもそも、これって……宝石……何でしょうか？」、「カリム、これ何なのか分かるかい？」、「いえ、ユーノにでも聞いてみましょう」――

……。

――「いらっしゃい、アリサ、すずか。それにカリムさんたちも……」、「ユーノ？　昔みたいに、呼んでください」、「……カリムお姉ちゃん」、「はい～♪（↑彼女は既に二十年近く前に副作用を克服済みなので、効能だけ楽しめます）」、「では、僕はお兄ちゃんと……」、「……ロッサお兄ちゃん」、「ほう～これはいいものだねぇ～♪　↑彼は天然で効能のみを楽しんでます」、「ところでユーノ、なんでちっちゃくなってる訳？」、「ほんとだぁ、でも可愛いね～」、「最近同時亡くなってきたね。いやまぁ、色々と――って！　その石、なんで光ってるの!?　というかなんでリビングに!?」――

……。

――「ユーノく～ん、皆の分のお茶はいったよ～」、「アリサ、すずか、いらっしゃい。カリムさんたちも、いつもお兄ちゃんがお世話に

なってます～。オットーとディードも、いつもヴィヴィオの面倒見追てくれてありがとう」、「いえいえ、大したことは、」、「ケーキ焼けたで～。おーカリムいらっしゃい」、「こんにちは、はやて。久しぶりですねぇ～」、「今ちょうどマテリアルのみんなも来とってなぁ～」、「もうすぐ皆キッチンから来ますよ～」、「みんながこっちに!?　まずい！　アリサ早くその石窓から捨てて！　早くしないと……！」、「えーでもこんなキレーな石もったいないわよ」、「いやそうじゃなくて……！」――

……。

――「師匠、出来上がりました。お茶会の準備は整ましたよ。別次元の師匠とヴィヴィオがしてたような」、「いや、それはいいよ！　ていうか別次元ってなにさ!?　そんなことよ理みんな避難させないとティロ・フィナーレしちゃうよ!?」、「ユーノもべつじげんのこといってるなー」、「ですねー」、「レヴィ、ユーリ！　重要なのそこじゃないよ！」――

……。

そして、物語は……動き出す――第三段階へと！

――「へっ？」、「なに？」、「なんや？」、「？」、「これは？」、「何かしら？」、「??」、「なんだろう？」、「なによこれ？」、「どーなってるんすか？」、「さぁ？」、「なんでしょう？」、「さぁ……？」、「……あぁ、もう……」――

そして、全てが（一部の層を除き）ちっちゃくなる――

「「「えええっっっ!!!!!?????」」」

――続く♪

×　×　×　おまけ・そのさんっ！

本編でちっちゃくなっちゃた者たちに与えられる舞台上での運命（さだめ）。

その定めの通りに物語が始まるとき、舞台上での喜劇が始まる。
その運命の中で得るものとは、主役(ヒーロー)か、姫役(ヒロイン)か、脇役(モブ)か、悪役(ヒール)か。
広がっていく無限の物語の海を駆け巡るとき、小さくなったものに与えられし定めが見える。
次回、《ステージシフト、第一話》

原作決まってないけどぉ、サービスサービスぅ～♪

『金色の閃光のまどろみ　――memorys to Fate.――』

夜中、まさに「真夜中」と称すにふさわしいほどの深夜のことだった……。

巨大な邸宅の廊下を歩く一人の金髪の女性（今は見た目ロリ）名をフェイトという少女の姿があった。彼女は、最近この家にとある青年（今は見た目ショタ）名をユーノという少年と共に住み始めた住民の一人である。

彼女が一体全体何故こんな真夜中に一人廊下を歩いているのかというと、まぁ端的に言えばこの家に住んでる少年と一緒に寝たかったからだ。勿論別に夜這いなんて真似をしようというわけではない（というか、出来ない……恥ずかしくて……）。彼女は別に特殊な性癖があるわけではないので、そこまで深い考えはなく……なんとなく昔のことを思い出しながら彼の元を訪れようとしているだけである。

ちなみに、他のみんなはそれをしようとしてごたごたした小競り合いの内に、疲れて眠ってしまった。彼女は少し全力ではなく、皆が疲れてしまうのを待っていた。何事も全力全開だけでは乗り越えられない。時にはこういうことで、特利を得ることもある。

はてさて、そんなことを考えているうちに彼の部屋の前まで到着した彼女は、最近の自分たちの傾向への警戒として、当然鍵をかけているであろう彼の部屋のドアのノブを静かに上下させる。

やはり、鍵はかかっていた。

しかし、そんな事では彼女は止められない。ただ勿論、ドアを壊すなんてことはしない。あくまでも自分は、彼と一緒に眠りたいだけだ。……あの時みたいな感じに……。それが理想だと彼女は考えている。

しかし、あの時とは違い、彼の部屋にはロックが掛かっている。だが、幸いなことに彼女はレアスキルである『電気変換気質』を持っている。〝電気〟と一口に言っても、これは中々に凡庸性が高い。攻撃

に転換させるのは勿論のこと、〝電気〟のその性質上〝熱〟や〝磁力〟への応用もできる。
熱で焼き切るというなら、べつに電熱でなくても、『炎熱系』の魔導師であるよく模擬戦をしている〝烈火の将〟や幼馴染のマテリアルである〝星光の殲滅者〟でもいいだろう。（まぁ、彼女らが細かいコントロールが得意かどうかは知らないが）
ただそれだと、ドアを壊すのとあまり変わらないし、下手をしたら火事になる。
だとすればそれは使わない。要は鍵だけを開けられればいいのだから、鍵を壊すなんてことをしたいわけでもない。相棒である斧であり、鎌であり、剣でもあるデバイスを使えば鍵だけの切断もできる。切るのは得意だ。でもそれもしない。だって、〝磁力〟を操作してしまえば簡単に、しかも何も壊さなくても開けられるのだから。
ガチャッと部屋の戸が静かながらも確かな開錠音を鳴らし、部屋の戸が開いた。（ただ、弟か息子のような存在であり、今は妹か娘的な存在と共にちょっと遠い世界で暮らしている彼もまた、自分と同じ「F」の産物であり……『電気変換気質』を持っている。彼は、自分とは違い素直ないい子なのでこんなことはしないだろうが、彼といい感じな娘的な存歳の桃髪の少女の部屋に入る時とか、ケンカして謝るときなどに強引に入ったりしないか……少し心配になる。何せ、上手く使えば電子錠だって開けられるのだし、凡庸性はかなり高く、広いので……自分みたいにちょっとイケないことに使わないか〝母親〟的な部分が心配と自らの行動を嘆くような警告を鳴らし、〝女の子〟としても部分がそれを仕方ないと肯定し、鼓動を高鳴らせたままに胸を熱くさせる）
そんな葛藤を一旦頭から離して、そっと部屋の中にお邪魔する金髪の少女フェイト。
「……お邪魔しまーす……？」
「……すぅ……すぅ……」
よし、と彼女は小さくガッツポーズをした。彼は起きてない。つまり、拒否はしない。前も拒否しなかったから別に問題はないとは思う

が（年齢的な問題は、今は関係ない。もう一人の娘的な存在……むしろこちらの少女の方が自分に似ている。彼と自分との子供っぽいという意見も含めて、えへへな感じ……である少女が先に子供になってしまった彼を見た時から、いつの間にか父親的な存在であったはずの彼に好意を寄せ始めた。いや、元からそういう感情あは有ったのだろうが年齢と、煮え切らないながらもどう見たってできてるよねな自分とは別の彼女のこの世界に置ける「母」の存在に、半ばあきらめていたのだろうが……その垣根は、取り払われてしまった。プラス十三からマイナス五歳まで縮まった年の差は、彼女を一人の女に変えてしまった。まぁ、それはさておき……今の彼と自分は『子供』である――つまり、問題など……微塵も無い↑結構あるけどね、主に争奪的な意味で）それだから、今邪魔するのものもなく、久々に思う存分温かそうなところで寝られるならこれでもいいやと彼女は短絡的な思考のまま（お忘れ化とは思うが、これが今作のロストロギアの特徴であるとここに記そう：詳しくは第一話「ちっちゃくなる」を見てくださると分かると思います）彼のベットにもぞもぞともぐりこむ。

やっぱりとても暖かい。それはやっぱり昔から変わらない。

あのとき、そうそれは……丁度「ジュエルシード」をめぐる争いの後の、初公判の前日の夜のことだ。

あの時、ユーノは自分の証人としてミッドの方を訪れており、色々と助けてくれた。ジュエルシードは元々彼の見つけたものだが、それを運んでいたところを襲ったのは……これは確定ではなく、あくまでも推測だったが……彼女の母親であるプレシアだったと言われている。（のちに、何の因果か蘇った〝家族〟と再会したときそれをリンディ母さんの方がプレシア母さんに尋ねていたのをフェイトは聞き、あれは実は偶然でジュエルシードを探していたところにユーノが発掘したことを知り、それをどうにかしようとしていたら地球にばらまかれてしまったというのが本当らしい……）

まぁ、その当時はフェイトは「利用されていただけ」という建前で裁判を乗り切ることになっているとはされていたものの……。やはりどこか不安であったのは確かだ。

その上、あのとき……後半の前日になって、一緒にいてくれた自分の使い魔であるアルフが今回は被告席には入れないというのはかなり堪えた。勿論、最終判決の際はアルフも被告に入っていたが、一番初めの時は入れなかった……というより、最初のは最終で「ほぼ無罪」になるための形式上のものと言っていいが、半ば事情聴取に近いため緊張していた。勿論、前日の内に「被告」である自分は裁判所入りを果たし、「発掘者」であるユーノも「証人」として同行していた。（この場合の承認は、被告の発言に差異が無いかの証人である）

信じられるものは少なかったあの頃の自分は、縋っていた母も、姉のようなリニスも失い……使い魔であるアルフとも、そのあとで観察担当兼引き取り先として温かく迎え入れてくれたリンディやクロノ、エイミィとも放され……あんまり喋った事の無い同世代の男の子と二人、おまけに元々の敵対の図は、私と彼のもので……それが彼が負傷し、なのはとの敵対に変わり、その後和解という結果に終わった……というのも、より一層緊張を加速させたのだが――当時の自分が思ったよりも、彼は優しかった。

何というか、落ち着いた。不安でつぶれそうな自分を、あまり感じた事の無い雰囲気で包んだ。今にして思えば、あの感じは姉のアリシアかリニス（いまは二人とも復活を果たしてます。リニスさんはWの次の時系列辺りで復活の予定です）に似ている気がしたのだが……それは当時は分からなかった。ただ、安心した。

そんな風に思えたのは、きっと彼と私が……どこか、似ているから。

共に天涯孤独。自分のルーツを一度は閉ざされた。孤独を知る者同士でもあった。

だからきっと彼に甘えてしまったのは仕方ない事だろう。

そんな風にだらけてしまうのは、彼がいけないんのだ。彼の持つ雰囲気が、私を和ませてくるから悪いのだ。

だから、私はあの時彼と一緒に眠った。色々な意味で、あたたかかったから。（大人になってから、たまに思い出して悶えることも多いが、大切な思い出ではある）

そのあとも、執務官になるのを助けてもらったり、「空白の時」の際

も……色々とあった。
でも、総じて彼は温かかった。
だから、私は彼に甘える。
――私だって、女の子だもん……。結構、弱いんだよ……？　だからね、ユーノ。なのはたちばっかりじゃなくて、私のことも……ちゃんと見ていてね……？
彼の腕に抱き着きながら、彼女はほくほくとして眠った。
なのはたちと一緒にいるのも温かいが、似ている者同士だからこそ……感じられるものもある。同族嫌悪の段階など、もとから超えてしまっていた。
――彼も私も、一人が辛いのは知っているから。傷つくことも傷つけることの痛みも、知っているから。そして、それを救ってくれた、優しさも……知っているから。だからこそ、思いやりの大切さを知っている。ぬくもりの大切さを知っている。だから、甘えたいし……ホントは甘えてほしい。「依存」なんて呼ばれるかもしれない。でも、そんなのは言葉の一側面でしかない。可能性だって、想いの形だって、無数に存在しているのだから……いまの私は、ユーノの隣にいたい。
ただそれだけだと、彼女は思いながら、まどろみの内に溶けていった……。

＊　＊　＊　おまけ・そのいちっ！

翌朝の司書長の反応。
「……、」
「ｚｚｚ……」
「……ボク、どうしたらいいんだろう」
大人に戻ったら、少しは自重してくれるかな……？（むしろ逆効果です：より具体的には既成事実的な何かを、創らされるでしょう。きっと←飢(乙)えた獣(女たち)たちを見ながら）

「……それにしても…フェイト、昔っから……割と甘えん坊だなぁ……まぁ、僕もきっと君のことは言えないんだろうけど……」
そんな二人の和やかな雰囲気に、家中の糖分濃度の上昇を察知した他の女の子たちが飛び込んでくるまで……後、十分ほど。
「……むにゅ……ゆぅのぉ……」
「はいはい、何でしょうか、可愛い眠り姫……？」
そのセリフを、聞き取り／られて……眠り姫（フェイト）が目を覚まし、怒った女の子たちが飛び込んでくることになるまで、後……五分、いや……一分。

＊　＊　＊　おまけ・そのにっ！

「やっと名前出してもらえました……」
ごめんなさいリニスさん。セリフ入れるの忘れてました……。本当にごめんなさい。ナンバーズ書くのに気を取られてました（いやいや、あたしらのせーにすんなよ『9番』）すみません……みなさん。
「まぁ、これからフェイトの傍にいられれば私はそれで……」
出番、いっぱい用意しますね。
「しかるべき場所に、私のやるべきこと、いるべき場所（役）があれば、そこへと誘ってください」
はい、分かりました。
「でも、家庭教師だった身としては……ある意味少しホッとしました」
なににです？
「……フェイトがあまりこう……痴女のような扱いではなくて、です」
ああ、ハイ……。
「まぁ、夜這い、なんて　行為もちょっとアウトかとも思うのですが……微笑ましい、ということで、まぁ、今回はいいです」
そいつはどうもです。
「うちの子があんまり変態みたいなかんじにならないようにお願いますね？」
はい、きっと……たぶん。

「……今、多分て言いました？」
いえ、言ってませんが……。
「……まぁいいです、ギャグでも節度をわきまえてくださいね。あの子は儚げですが……芯は強い子なんですから」
……はい。
「よろしい♪」
確かに、痴女扱いは二次の影響だよなと思う今日この頃。

＊　＊　＊　おまけ・そのさんっ！

次回の更新予定は、ステージ・シフト第二弾。『ウルトラマンガイアパロ』を予定しております。
予定では、配役は――
我夢――ユーノ。アッコ――ティアナ。博也――クロノ。玲子――エイミィ。
メインはこんな感じで、
コマンダー――はやて。千葉参謀――シャマル。堤チーフ――シグナム。稲森博士――リンディ。ジョジー――スバル。ダニエル――ロッサ。キャス――フェイト。田端――ヴィータ。リンブン――ヴィヴィオ。学友三人組こと、サトウ、マコト、ナカジ――アリサ、すずか、なのは。

大地に宿りし赤き光と、海に宿りし青き光。
二つの光の織り成す物語が、始まる！

『着せ替えって、替えてる方は楽しいけれども、替えられる方は辛いらしい　――Ｃｏｓｐｌａｙ　ｏｆ　Ｕ―ｎｏ．――』

最近、ミッドチルダにて生活中。

まずここからしてちょっぴりおかしい。普段あたし達（あたしと紫髪の幼馴染）は、基本的には海鳴市の方で生活している。昔色々あったこともあり、あたしらは『魔法』に非常に近い……でも少しだけ違うような、言ってみればあたし達の〝オリジナル〟とでも言えばいいような力を持ってる。まぁ、もちろんそれを使えるのもあたしらだけ、完全なるオンリーワンというわけでもないのだけど……とはいえ、まぁそんな感じの力を持っているわけなのだけど、あくまでも私らの生活の中心世界は地球なのだ。これは『魔法』を認知していて、かつこの世界の中でもそこそこの影響力をもつようなあたし達は丁度良くミッドチルダと地球を繋ぐための役割――所謂橋渡し役をやるのに丁度良かったから、というのも大きい。

そんなわけで、会社経営の跡取りの令嬢のあたしと、これまたお嬢様な現在大学院に在学中の幼馴染と一緒に窓口的な役職をやってる。だか、いかにそんな役回りをしているとはいえ……まだまだ『魔法』を知っている者は少ない、というより迂闊に露見させるわけにもいかないということで、その部署では主にミッドチルダの方から来た応援社員の方々と共に色々な橋渡しをしている。

物資の輸入・輸出だったり、技術の共有だったり……後は、人の行き来だったりを管理していたりする。

とまぁここまでを前置きとして、現在進行形であたし達は幼馴染の仕事バカ（この言い方だと特定するのは難しいが）の新たに抱えた面倒ごとを更に広げてしまった（ちょっぴり自業自得な部分もあるが）所為で子供になってしまった。

あまりにも突拍子がない、といえばそこまでだが……それが事実だったりするから余計に始末に負えない。

その苛立ちは、その原因の〝ロストロギア〟の解析を急かしたことと……この機を利用してちょっぴり休暇を得られる事になったこと、そして～♪

「あのさぁ……アリサ？」

「なぁに？　ユーノ」

「この格好、ものすごく恥ずかしいんだけど……着替えてもいい？」

「えぇ～、いいじゃないちょっとくらい、減るもんじゃないんだから」

「……いや、減るよ。主に男としてのプライドとかが……」

「そんなこと、アンタ元から女顔なんだし今更よ、今更。気にするだけ無駄ってやつよ。受け入れて納得なさい」

「気にするよ！　それにこの状態を普通に受け入れも、納得もしないよッ!?」

これでちょっと鬱憤を晴らしてるのよねぇ～♪

なんとも楽しそうに笑いつつも、どことなく有無を言わせないような〝威圧感〟をもつ彼女の笑みに……ユーノ君はただただ従うしかなかったのだった……。

「それにしてもアンタってホント女顔よねぇ……、その上天然ものだし」

「天然って……それを男の僕に言うの？　アリサ……」

「そーよねぇ……でもなんだかそう言ってたら段々腹立ってきたわね。男のくせにあたしらよりも手入れが要らないなんて」

「あ、ありしゃあー!?　い、いひゃい、いひゃい!!」

むにぃーむにゅぅー、と頬っぺたを引っ張るアリサ。そんな彼女の様子が、何だか微妙に母親にかまって欲しいと示す赤子のように見える気がするのは、気のせいだろうか？

「うぅぅ……酷いよ、アリサぁ」

「フン！　なっさけないわねぇー。そんなだからいつまでも経ってもこうなのよ、まぁその方があたし的には面白くていいけどネ♪」

「そ、そんなぁ……」

とぉ～っても良い笑顔でアリサちゃんにそう言われたユーノ君は、ガーンという擬音が合いそうな悲痛な顔を浮かべるのだった。

「さて、そんなことよりも続きよ、続き！」
「も、もういやだよぉぉ――ッ！」
「うっさいっ！　今のアンタはあたしのおもちゃなのよ！」
　そういいつつ、ユーノ君が今着ている服（勿論女物）を引っぺがすアリサちゃん。
「はい、次これね♪」
「もう嫌だよぉぉぉ!?」
「問答無用よ！」
「うぅぅ……」
「うんうん♪　さすがあたしのチョイスね、よく似合ってるわ～」
　そう言って落ち込んでいるユーノ君をニコニコ、つやつや（？）とした笑みで見ているアリサちゃん。
　そんな彼女がユーノ君に着せたのは、何故かメイド服。そう、丁度どっかのアリサと似たような声のこれまた似たような金髪ロリお嬢様が、なのはのお姉さんと似たような声の借金執事に着せたような奴である。
「ちょっと、黙ってたら面白くないでしょユーノ。『お嬢様』とかって言ってみなさいよー」
「……お、お嬢様……」
「」
　アリサちゃん、急に黙る。
「……？　アリサ？」
「――ハッ、な、何よ……」
「いや、なんだか急に黙るから……」
「べ、べつに何でもないわよ！　それより次行くわよ！」
「うぇぇぇッ!?」
　そしてネクスト。
「今度は……何だっけコレ、地球の着物だったっけ？」
「うーん、これも結構似合うわねぇ」
　胸が無い方が美しく見える、つまり必然的に絶壁・オブ・絶壁（どこかで誰かが苛立ちを感じた。具体的に言うと馬鹿と償還が云々の

学校のポニテヒロインが）の男の娘が着物の着こなしに関しては最強ということに……ゲフンゲフン。
まぁ、それ抜きにしても、とても似合っている。子供化したとはいえ、髪の長さ等はそのままなので、ユーノ君やなのはちゃんたちの髪型は大人の頃のままとなっている。（一つ結びやサイドポニテなど）
ただ、自分で戻せる方々はそれを自分で変えたりもしてるが、それはまぁ余談であろう。
「あ、そうだ」
「い、一応聞いとくけど……な、何するのかな？」
「それはぁ～……こーするの、よっ！」
ユーノ君の帯に手を掛けて、思いっきりひぱって回すアリサちゃん。
「そぉ～……れぇぇぇぇッ！」
「あぁぁぁぁぁぁれぇぇぇぇッッ!?」
所謂殿様プレイ（？）という奴である。
「よいではないかー、よいではないかぁーッ!!」
アリサちゃん、ノリノリである。
そして、帯は結構あっさりと最後まで達し、ユーノ君は床に目を回して倒れる。
「あぅぅ……」
「さ～て、お次は～？」
床に転がったユーノ君を放置して次の服を選ぶアリサちゃん。
「はい、次はこれ♪」
「は、は……ぃ……」←もはや抵抗をあきらめた。
続いてのお洋服は？
「……、」
続いてアリサちゃんがチョイスした服とは――黄色を基調とした、どっかの魔法少女の服だった。
「うーん、これはいまいち……かしら？」
そう、いまいちボリュームが不足している。決して越えられない壁的な（性別等の含めた）意味で。その部分だけは……さすがに埋めら

れない。
「まぁ、良いわ。……って、そんな疲れと悲し気な目で見ないでよ。もぉ、じゃあ次は男の子の服にするから」
「……」
結局コスプレ自体はするという、なんとも言い難い気持ちがユーノ君の中にあったが、どうせ逆らっても無駄なので、そこは受け入れることにした。
「赤コートに、白手袋。そして……黒いパンツ……」
「おー、似合うじゃない」
「まさか三つ編みにさせられるとは思ってなかったよ……」
「その方がいいのよ、初期はそうなんだから。あ、そうだねぇねぇユーノ。ちょっと手を合わせてみて」
「……こう？」
パンッ、と両手を合わせる。
「いいわぁ！　いいわよユーノ！」
「そ、そうなの……？」
「～♪」
思わず「兄さん」呼びをしてしまいそうになるほどである。ユーノ君は、錬成系の魔法は使えないけど。（まぁ、盾的にはまさに「最硬」ではあるが……「強欲」の名に該当するかは……まあ正直微妙である）
さて、お次は……？
「次これね」
「これはまた……随分と……」
「言葉濁してないで早く着なさい」
「……分かったよぉ」
さて次の服は、フェレットパジャマ。
「あははっ！　これまでで一番かわいいかも、ねぇユーノ？」
「……これ、べつにただ単純にフェレットモードになってもよかったんじゃ……？」
「それじゃあいつもどーりじゃない」
「……ボクの存在義って、まだフェレットなの？」

「半分はね、少なくともあたしが初めに見たときはそうだったし。そんなに変化が欲しいなら……こっち着てみる？」
そう言って差し出されたのは、どっかの街で不条理な契約を迫る白い邪悪《マスコット》のこれまた着ぐるみパジャマだった。
「……」
「……」
（ボク、そんなに悪いことしたっけかなぁ……？）
（これなら契約も一発ね……ご愁傷さまねＱＢ）
その頃どっかの救助隊の訓練施設に一角で、一人の陸士が持ち前の「物凄い怪力（馬鹿力）」で訓練を抜けようとして相棒の執務官に止められていた。
より具体的には「は、放してティア!!　私はあの白い悪魔（某教導官に非ず）を始末しなくちゃいけないの!!　それこそじっくり、ねっとり（？）と!!（というかマミさんタッくんのＱＢコスとかどんだけ私得――（ｒｙ）」そう口走りつつ、妄想しつつ、じたばたともがく青髪の彼女を橙髪の彼女が羽交い絞めにしていた。
「……ねぇアリサ、これ脱いでもいい？　何だかこのままだと命と貞操的な方での危機を感じるんだけど……」
「……まぁ別にいいわ。確かに世の理が変わっちゃいそうだからやめにしましょ――『アレ？　こんなところにいたのかい、ユーノ先輩。ちょうどよかった、こんど魔法少女をもうひとりくらい堕とそうと思っててね。手を貸してほしいな……って、なんで縮んでいるんだい？　ショタコンの需要の方に方針を傾けたのかな？　どっかの姉上のようなことをするのぅ。まぁ僕はかまわないんだけど……ともかく、手を貸してよ。次の僕のターゲットは、友枝町と後プリズムフラワー経由の時空の少女たちなんだどこれがまた中々の逸材で……』――消えなさい、この淫獣っ!!」
『きゅぷぃっ!?』←丸焼き
訳が分からないよ、と言い残して白い邪悪は消え去った。（ただ、ほんの少しどっかの男の娘が混じっていたけれども）
「……あのさアリサ。その……」

「アンタはよくやったし、よくやってるわ」
だから気にしなくていいのよ、と言い放つ。（実際、ユーノくんの場合結構な割合でアフターサービス充実してますからねぇ）
まあ次はこれね、と先ほどの流れお構いなしに次の服を要求してくるアリサちゃん。
「女神ですか……」
「どっかの理（ことわり）『――呼びました？　↑どっかの星光――』を越えた存在になったみたいな感じね……（……でも、その格好も……いいわね、ハァハァ）」
アンタにならこの世界の命運託してもいいわ。と思いつつ、先程葬り去った白い邪悪もこれなら手を出せまいとアリサちゃんは思った。ただ、今度は寧ろアリサちゃんの方が〝獣〟になりそうな雰囲気であったが……。
「……あの、アリサ……さん……？」
「あ、ゴメンゴメン。はい次これね」↑少しずつ落ち着いて来た。
「……分かった」↑悲しいかな、もう慣れ始めた。
続いては――。
「これは……なんというか」
「う～ん♪　さすがにこれはばっちりねぇ～」
どっかの凡庸決戦兵器のプロトタイプパイロットのスーツを着て立つユーノくんの姿にアリサちゃんはニヤニヤしていた。
「金髪なのがちょっと残念だけど……まあ許容範囲ね」
「なんで、女の子仕様の方を……？」
「そんなの今更でしょうが、まあいいけどじゃあこっちも着てみる？」
「……これは」
半袖のYシャツと黒い学生ズボン。一般的な日本の夏の学生のスタンダードすぎるほどのスタンダードファッションだが、先程の恰好の後だと……どっかの天王星の守護戦士と同じ声の神の子の主人公と同じような格好である。とはいえ、彼自身は金髪なため、どっちかって言えば「うーん、歌はいい。リリンの生み出した文化の極みだ」というセリフを言ったホモっぽい少年の方があってるかもしれない。

（どっかの世界観だと、アインハルトと同じ声のとってもフェアリーな幼女マスターとの熱愛が発覚したりもしたが）
（同じ声の黒魔導師）
「ねぇユーノ♪」
「（なんか嫌な予感が……）何かな、アリサ……？」
「ん～？　あれ見て♪」
そう言って彼女が指さした先にあるのは――いつ間に作ったのか、まっさらな病室。
「～♪」
そして、いつの間にかなんかパジャマに着替えているアリサちゃん。
「な、何を……」
するつもり、と聞こうとしたとき……なんかもう先の展開が読めた。
「――脱出！」
「させると、思う？」
ものすーっごい「良い笑顔」でそう聞かれた。
そして彼女が手を合わせ、この空間を密室に置き換える。しかし、ユーノくんとて優秀な魔導師。そう簡単にやられはしない。
「トランスポー……た――『させると思う？』――うぇっ!?」
すると、これまたもの凄い妖艶な表情をしたアリサちゃんがユーノくんの方に顔を寄せて耳元でささやくような感じにそう問いかけた。
魔導師の魔法の構成はデバイスを用いようが持ちいまいが、基本的にどっかの巨大学校都市の能力者たちと同じように数式のごとく組み立てるものであるので、本人が動揺したりして冷静に更生を行言えないとまともに術式を展開できなくなる。とりわけデバイスの補助なしが通常のユーノくんでは……まあお察しである。
「さぁ、ユーノ♪　あのシーンの再現、しよっ♡」
「い、いやだよ!?　あ、アリサなに言ってるの!?　そんなことしたくないよ！」
アリサだっていやでしょ!?　とユーノくんはアリサちゃんに言うのだが……。

「……知ってる？　対象にされても、手を出さないのが嫌だった……っていうのがあの愛憎劇の中で明言されてるんだけど？」
意気地なし――というセリフ、みなさんご存じだろうか？
「だ、だからって……！」
「あたし、アンタならいいのよ」
「な、なぁ……ッ⁉」
「ねぇユーノ、私の事――好き？」
既に、本編の筈なのにパロ全開になりかけているが……既に止まれない、止まれないのだ。
「さあ、あたしのモノに――なりなさい」
彼女の瞳が、彼の瞳を捕らえた。
その時――グラリ、と世界が歪む。
そして、二人がベットの上と横にパロディのスタンバイレディした二人。

そして――。
「――なのはも、フェイトも……怖いんだ。………助けて」
しかし、彼女は微動だにしない。
「助けてよ、アリサ。ねぇ、起きてよ……。ねぇ……アリサぁ……！僕を一人にしないでよ……おきて……いつものように、僕を馬鹿にしてよぉ……！　ねぇ、アリサ、アリ……サぁッ！　ねぇっ‼」
そして、彼女を大きく揺さぶった。彼女の体が、彼の方を向きそうになり体中に張り付いていた電極などがはがれ――――と、そこまで言ったところで――――。
『ちょぉぉぉっと待ったぁぁぁああああああああああああああああああっっっ!!!!!!』
「ちっ……もう少しだったのに」↑この作品のチャプターヒロインとしての特権フル活用中だったが、乱入者により中断。
「……あれ？　なにしてたんだっけ……？」↑正気に。
「アリサちゃん抜け駆けなんて許さないのぉー……」↑目に光無い、完全魔王シフト。

「アリサ……何してるの……？」↑ヤンデレモードに、死神の如き様。
「抜け駆けなんて、させへんよ……？」↑案外、怖い。
「ねぇアリサちゃん……させないよ？」↑禍々しいオーラ全開。
「アリサぁん……？　――させませんよ」↑こちらも全力全開シフト。
「――――させません……！」↑天地に覇を成す力、ヤンデレシフト。
「はぁはぁ……せんせーのＱＢコス撲滅（私専用!!　せ・ん・よ・う!!）」
↑今すぐにでも悪魔化しそう。
「ユーノ先生は私の……お持ち帰りぃ――決定」↑どっかのお姉ちゃん系魔王のオーラ。
こうして、楽しい、楽しい（？）着せ替えタイムは終わりを告げた。
しかし――。
「――うふふふっ……。良い絵がいっぱいね♪」
これまでの映像は、しっかりとどっかの湖の騎士のお姉さんによって撮影・保存されていたことが、のちに発覚するのだが……それはまた別のお話しである。

＊　＊　＊　おまけ・そのいちっ！

「……今回は邪魔されちゃったけど、またやりましょうねユーノ♪」
「何を!?」
今は笑顔の彼女がひたすら怖い。……ついでに後ろの皆も。
『（アリサ／ちゃーんッッッ!!!???!!）』

＊　＊　＊　おまけ・そのにっ！

ちなみに、今回のコスプレ騒動の過程で……とある魔法少女たちに迫る白い邪悪の魔の手は一応止まった、らしい。
ただ、諦めが悪い彼らはこの世界で何人かの少女に声を掛けたのだが――。
『やぁ、僕と契約して魔法少女に……』
パターン・Ｎ

「え、いやなの。というか貴方はお呼びじゃあないの。寧ろユーノくんにもう一回来てもらって今度は永遠の誓いを……あ、そういえばまだユーノくんから『お礼』の形でもらった物ってないの。出会いの始まりはユーノくんだし、もらった物は大きいけど、『お礼』はもらってないから今度は……えへへ、永遠の愛の誓いとかを――あ、まだいたの？　とにかくユーノくんじゃないならお呼びじゃないの。他を当たって欲しいの」

『いや、僕らと契約すれば望みは叶う――』

「そもそも、『お礼』もらう条件は既に整ってるから別に望みはないの。あとは、ユーノくんからの指輪か……あるいはもっと具体的な既成事実を――えへへへ～」

『……そんなにユーノ先輩がいいのかい？　でも、ユーノ先輩も僕と同じ……』

「同じではないの。特に戦闘サポートも具体的な説明もなしに、ただひたすらに利潤を貪るような本物の邪悪の化身の貴方たちとユーノくんは根本的に違うの」

『……』

一刀両断。殺されないだけましと思おうか――「あと、私の旦那様と娘と教え子を死へと誘ったあなたの罪は重いの」――そうはいかない様である……。

《Ｄｉｖｉｎｅ＿Ｂｕｓｔｅｒ．》

『きゅぷぅいっ！』

マミった。

パターン・Ｆ

「いやだよ」

『……望みとか、無いのかい？』

「別に……そこまでは。今が一番、充実してるから」

これまでに積み上げてきたその『今までにこそ、黄金にも等しい輝きと価値がそこにあるっ!!』みたいな感じである。

『……（これ以上は無駄かな。まったく、たまにこう淡白なのもいるから分からないよ、人間は）』

「あ、でも……」
『？』
「貴方をここで、始末しておくことだけは……殺っておくよ」
『きゅぷっ!?』
「終わりにしよう……いやな定めを、ここで」
《Ｊｅｔ＿Ｚａｍｂｅｒ．》
金の光を放つ大剣が、その白い身体に叩き込まれる。
ズパンッ！　一刀両断（今度は物理）
「貴方は、罪を犯しすぎた……わたしの大切な人たちを、傷つけたことは……何よりも重い罪だ」
パターン・Ｈ
「嫌や、そんなんまっぴらやがな」
『そう言わずに、話くらい聞いておくれよ』
「ネタが割とんのに乗るほど甘い女やないで私は」
『』
至極当たり前である。
「それに、このまま放置しとくと……あんたなら家の子らにもちょっかいかけそうやしなぁ……それに、職業柄悪を見逃すわけにはいかへんのよ」
流石管理局の司令官と、どっかの巨乳風紀委員なだけは有る。
『またかい……』
「ラグナロク」
白い魔力の奔流に、消えた。
パターン・Ｓ（月村）
「嫌だよ」
『何故だい？』
「私が欲しいのは、皆と同じだから」
『はっきり言うね』
「そうじゃないと手に入らないもん」
『だったら契約して楽に手に入れたらどうだい？』
「それじゃあ、皆に失礼じゃない……」

『何故だい？　合理性が全く分からないんだけどなぁ』
「合理性（そんなもの）じゃ、測れないのが……人間なんだよ」
『……わからないよ、そんなにユーノ先輩がいいのかい？』
「まぁね、可愛いし……それに、すごく優しいから」
　彼女もまた、真っ直ぐに進み……止まらない。
「だから、じゃまは……しないでね」
　彼女の背後から暗い夜のオーラが生じる。夜闇の如きその紫のオーラは、翼を形作り……目の前の邪悪を、音もなく薙ぎ払った。
　パターン・S（ナカジマ）
『……』
「……」
『……、ええと』
「……、なに？」
『いいえ、なんでもありません』
「そう、じゃあ――消えて……」
　容赦ない。（当たり前かもしれないが）
「私の大切な人たちに近づくのは、許さない……」
　ループの中で、ずっと苦しんできた経験は……伊達じゃない。
　パターン・T
「ふぅーん……そうなんだぁ。少女の感情のエネルギーを、ねぇ……」
『説明はしっかりしたんだけど、それで契約の方はどうするんだい？』
「そんなわかり切ったことを聞くなんて、いい性格よね」
『……』
「もちろん答えは――Ｎｏ♪」
　恐いですね、怖いですよ……（どっかの目の腐った高校生によるコメント――「ふーん、そうなんだぁ……怖いんだねぇ、可愛い♪」ごめんなさいごめんなさいごめんなさい）
『なら別にいいよ、他にも当てはあるからね』
「あれ？　誰が逃がすなんて言ったのかな？」
『……』
「知ってる？　あたしも、なのはさんと同じの撃てるのよ？」

《Ｓｉｆｔ＿ｐｈａｎｔｏｍ＿ｓｔｒｉｋｅ・》
彼は橙の奔流の内に消えた。
パターン・Ｖ
「円環の理を、ここで……断ち切るよ」
『わからないね、君の必死になる理由が』
「分からなくてもいいんじゃないかな。分かろうとしたくなったときに、貴方はもう少しだけ……人間に近づけるよ」
『僕はそもそも君達とは違うから、『近づく』の定義がいまいち不明快だとおもうんだけど？』
「わかろうとすることから　、始まるんだよ」
『……』
「いま、貴方を浄化するよ。私の、この、光でえええッッ！　〝セイクリッドオオオ・ブレイザァァァ――ッッ〟」
虹色の聖なる光が、悪しき体を焼き払う……。
パターン・Ｅ
「その定め、その悪しき野望……私がここで、打ち破ります！」
『話は聞いてくれないんだね』
「まずは、貴方を倒さなくては……なりませんから」
『また、大切な人の為……ってやつかい？』
「はい、その通りです」
『なぜそこまで、寄り添うんだい？』
「……分かりません、ただ――」
そう、人は、人間は……ずっとずっと昔から、互いを思いやりながら生きてきた。
「――ずっと昔から、そうやって来たんです。そうやって〝絆〟を紡いできた……ただ、それだけのことです！」
『それは単なる依存なんじゃないのかい？』
「言葉でいえば、それもまた正しいのかもしれません。ですが、人間の心は……言葉だけでは測れない強さがあります。それをあなたが知るまでは、きっと……貴方は本当の意味で、誰にも勝てません」
『何に対しての勝ち負けなのかな？』

「――人の心に、です。柵を、鎖を断ち切る力を〝覇王・断空……拳ッ!!〟」

碧銀の輝きを宿した拳が、叩き込まれた。

『まったく……訳が分からないよ』

心を知る者は、心知らざる者に勝てない。いつの世も、どんな時でも……最後はその意志の力の前に、敗北するのだ。

＊　＊　＊　おまけ・そのさんっ！

《ガイアパロ》をまだ書いてる途中ですが……ちょっと妄想が浮かび、『とある』と『ＩＳ』のパロも書こうかと思い……取り掛かり始めました。

もしも、何かご希望党がありましたら遠慮なくご意見をお寄せください。

各パターンとしては、

『とある』で、貨物置場での決闘、木原数多戦、雪原でのヒーロー激突あたりを。キャストとしては、当麻はクロノかユーノ、エリオあたり。美琴はフェイトかレヴィ、アリシアあたり。インデックスはユーノかキャロ、ヴィヴィオあたり。一方通行はユーノかなのは、ヴィヴィオあたり。打ち止めはヴィヴィオかアリシアあたり。浜面は、ヴァイスとかそのあたりを。絹旗はミウラとかアインハルト。フレンダはアリサかティアナとか。麦野はシグナムかアリサとか。大体そんな感じにしていくつか『パターン』でかき分けようかと思います。

『ＩＳ』で、姉はフェイトかシグナム当たりで……束さんはなのはかシャマルあたり。ヒロインズは、まだ未定な感じです。

『月下流麗、妖艶な眼に映るのは　Ｂｌｏｏｄｙ　ｄｅｓｉｒｅ　ｆｏｒ　ｙｏｕ．』

それは、またしても夜……月がやけに輝く夜更けのことだった。
きいぃ……っ、という音と共にドアを開けて入ってくる人影は非常に小さい。しかし、その纏った雰囲気はとても幻惑的で、妖艶なものだった。夜闇に映えるその紅の双眸は、前にここを訪れた閃光の名を冠する少女よりも深い色――真っ赤な鮮血の如き色に染まっていた。
だがその妖しげな雰囲気に反し、瞳の持ち主はその大きな瞳をとろんと蕩けさせながら目の前にある目的のものへと向かって行く。
そのまま辿り着いたベッドの中へとのそのそと潜り込んでいったその者は、その中で眠っている目的の〝者〟の元へと向かって行く。
さすがに寝床へ入って来られたこともあって、やっとこさその侵入者に気づいたその者は、もそもそとうごめくそれの正体を高めるべくかぶっていた毛布をめくりあげた。前にも似たようなことがあり、その時は気づかなかったため朝起きたときに驚いたものだが、さすがに二度目ともなれば落ち着くというもので――
「――ん……だれ……？　フェイト……？」
そう呟いた者の顔を、月の光が照らす。長く濃いめの金髪と、翡翠の瞳。明るいその色彩は侵入者の持つものとはちょうど対照的の様でもあり、穏やかで包み込むような雰囲気を纏った可愛らしい少年を照らし出す。加えて、その月明かりは彼だけでなく彼の方へ這い寄ってくるものも映し出しており、少年が寝ぼけ眼を向けると……そこには、漆黒のような艶を持った闇に映える紫の髪と紅に染まった瞳の少女がいた。
「は・ず・れ♪」
楽しそうに節をつけ、その少女はその少年の呟きに応える。
「す、すずか……？」
「うん。ゴメンね、ユーノくんのところに来たくて……来ちゃった♡」

すずかと呼ばれた少女は、ユーノと呼ばれた少年に向けてそう返すと少年のおなかのあたりにふわりと抱き着く。
ぎゅっと抱きつかれた少年は、どうしたらいいのか対応に困った。
「ふふふ～♪　ゆ～のくぅん……」
「す、すずかぁ……」
赤面しながらすずかを押しとどめようとするユーノ。だが、すずかはその細腕からは想像もできないような力を込めてユーノにさらに強く抱き着いてすり寄る。その恍惚とした顔はちょっとアブないような感じさえ抱かせるようで……ユーノはとにかくすずかを止めようとするのだが、すずかは止まらない。
「やぁー……っ」
「ちょっ……!?」
すずかはユーノの首のあたりに顔をうずめ、首筋のあたりをペロっと舐める。その感触にユーノは「ひやぁっ!?」と悲鳴にも似た声を上げる。そんな彼を見てすずかは愛おしそうに口を緩め、目を細めてユーノの耳元に囁き掛ける。
その様は彼女の好きな猫そのもののようだ。
「うふふふ……ユーノくんってば、かわいい♡」
「かわいいって……というか僕男だし……と、とにかくすずか。落ち着いて――」
ユーノはそう嘆願するが、
「……むぅ、ユーノくん。いやなの？」
「え、別にいやとかじゃ無いけど……」
「だったらいいよねー♪」
「……」
どうしようもない。
ユーノはその事実をようやく飲み込むに至った。まあ普段は大人びているし、穏やかな彼女が今こんなに……なんというか、どうにも盛ってるようにしか見えないような状況はあまり認めたくない。とりわけ、今彼女は自分たちと同じく幼児化しているのだから。
ただ、この状況に心当たりがないわけでもない。

すずかは地球出身だが、ミッド出身の自分たちでいうところの『リンカーコア』に似た器官を持っている。だが、そこまではいい。そもそも、『リンカーコア』の有無はさして重要な問題ではない。

問題は、ここからだ。

地球では基本的に『人間』に分類されているのは一種類だという話なのだが……実は、希少な『血筋』を受け継ぐ人種がいくつか存在しているのだという事を、ユーノはおおよそ十年ほど前に知った。

ミッドチルダをはじめとした次元世界にはこうした事例は珍しくはない。基本的に、大体の世界が人間という形を好むらしく、人間としての姿をとることが多いし、そこでも様々な力を宿すことはよくある。

これと同じことが地球でもあり、その内の一つである『夜の一族』と呼ばれる血をすずかが受け継いでいるらしい。

それを十年ほど前にあった『色々』の結果知り、奮闘の末……すずかやアリサとの間に出来てしまった隔てりを解消することができた。だが、その際にまた一つ余計なことを知ってしまった。

それは――

「ふふ……っ（にへらぁ）」

「……」

それが、このすずかの態度の元――俗にいう『発情期』というやつである。

『夜の一族』という種族には、この『発情期』が伴っているらしい。どうにも時折こういったものが、周期的に訪れるらしい。

勿論、対処法はある。『夜の一族』というのは、所謂吸血鬼の一族。ただ、日の光などに弱いとかニンニクに弱いとか鏡に映らないとか、そういった弱点的なものはないらしい。身体能力や自然治癒が人間以上であるという力の代償に、体内の鉄分の比率が変わりやすいため、鉄分を得るために人間の血を吸うようになったとか。そのきっかけ作りのために、その対象である人間――とりわけ気に入りの異性――を誘惑するためにこの発情期が周期的に訪れる。

そんな訳で、発情期的なこの情緒不安定な状態を解除するには、ま

ずはその力の高ぶりの元である鉄分バランスを戻してやれば正気に戻る。まあ要は『吸血』させてあげればそれでよいのだけれども……ここまでデレデレとしているすずかを見るのは実に久しぶりであるため、ユーノは少しばかり動揺と誘惑にさいなまれてしまい冷静さが失われていた。

因みに、前にユーノが発情期（これ）を見たのは、丁度十年ほど前――美しい漆黒の月夜の下だったのだが……まさかこのタイミングで来るとは正直思っていなかった。

今現在の互いに幼児化しているこの状態を差し引いて尚、ユーノはすずかに魅惑されている。

精神は既に大人で、自分の身体もすずかも子供に戻っているのに、だ。

「ゆぅ～のくーん♡」

すずかから漂ってくるその色香のようなものがユーノの心を彼女に縛り付け――目が、離せなくなっている。

どくどくと高まり続ける心音と、顔に集まり続ける熱。どうしてなのかと何度自身に問おうとも、互いに今は子供なのにと思っても、そんな思考など軽々超えて……彼女の魅力は簡単に彼の心を縛り続ける。

「……ぁぅ……」

喉の奥が詰まるような感覚。

すずかのさらりとして、つややかな漆黒にも似た紫の長い髪からふわりと漂うその香りにくらくらする。

「……だ、め……だよ……」

そんな弱々しい制止など、寧ろ情欲を引き立てるようなものでしかない。益々興が乗ったように、すずかはユーノのことをぺろぺろと舐め続ける。

ぞわり、とユーノの背筋に悪寒が走る。しかしそれは恐怖よりも、初心な彼の中にある熱情の高ぶりと言い換えてもいいのかもしれない。もともと奥手な方だが、ユーノとて男なのだ。こんなかわいくて、今は色気たっぷりな同い年の幼馴染な女の子に迫られてしった

ら、まいってしまうのも無理からぬことではないだろうか。
せめぎ合う理性と欲望。
高揚する心と、羞恥にも似た感情が、混然となり混ざり合う。
――いったい、どう動くべきなのだろうか。

ユーノは、再度自身に問う。だが、そんな自問自答など、自分の中に定まった答えが無ければ何の意味もない。自分から何かをできなければ、なされるがままなのは必然。すずかになされるがまま、ユーノは流れに流されるままになっていた。
「ふふふ～♪」
すっかりご機嫌と言った感じのすずかに頬ずりをされていた。
恍惚とした表情の彼女は、幼くなっても失われない妖艶さを醸し出しながらユーノに迫る。
幼くなってしまっても、その夜に生える美しい姿は前に見たときのまま――いや、むしろそれ以上かもしれない。ユーノは、鮮血のように染まった真紅の双眸に吸い込まれそうになりつつも、迫り来る少女をなだめようとするが……それを聞いてくれるほど、深夜の彼女は昼間の彼女とは打って変わって優しくあっても甘くはない。
「ゆ～のくぅーん♪」
「す、すずかぁ……」
その細腕には、相も変わらずどこから沸いてくるとも知れぬ力が宿る。そこらの男の豪腕など、その辺の葦のごとくへし折ってしまいそうなほどに感じられる。
こうなってしまうと、もはやユーノにはすずかをとめる方法はひとつしかない。
『夜の一族』の発情期とは元来、子孫の生まれづらいという側面から来るものだと話に聞いた。故に、いとしい人との愛ある営みによってそれは解除(みた)される。ただ、それをするわけにはいかない。子供の体であるということはもちろんであるし、それに加えて別にすずかとユーノはそういう関係ではない。

そんな女性に、その上に幼馴染で大切に思っている相手ならそんな不義理を働くわけにはいかない。

……まぁ、彼女からすればそうなってほしいのかも知れないが。

ともかく、ユーノはもうひとつの手段に出る。

押さえつけられている体だが、すべてを封じられたわけではない。まだ、有効な手段として用いることのできる部分の自由は取り戻せるはずだ。

そう決意したユーノは、迫るすずかの顔をまっすぐに見据える。

「――――っ、……ぁ」

その美しさに、決意が揺らぎそうになる。

しかし、ここで折れてしまうというのは間抜けな話だ。せっかく、彼女を傷つけないと、守ると決めているのだから。

「――――すずか」

「なぁに～、ゆーのくぅん？」

やっとユーノの注意が自分に向いたからか、それともあきらめて自分の『お相手』をしてくれると思ったからか、すずかはこれまで以上に甘い声を向けてくる。

そんな彼女とは裏腹に、ユーノは自分の指を無防備に開いているすずかの口に入れる。

その際、彼女の伸びた牙に、指を擦るようにしながら。

吸血鬼、という生物のモデルになったことから分かるように、『夜の一族』と呼ばれる彼女の牙は確かな鋭さを持ち、ユーノの指の薄皮を切り裂き、血を滲ませる。

「あ……ぅ――――そんなぁ……ず、ずるいよぉ……！」

血を一度口に含んむことで、すずかの本能に刻まれた優先順位が入れ替わってしまう。

赤子のように指に吸い付き、その血の味を舌に馴染ませていく。

味が馴染み、その味わいがつたわるたびに、すずかの内に秘める吸血衝動が意識を締めていき……目の前の少年の首筋の辺りに、熱を伴った視線が注がれだし――そして。

「――あむ……っ――」

首元に、牙が突き立てられた。

んぐ、んぐっ……と血が吸われて行く。その感覚に、ユーノは意識が少しずつ遠のいていくのを感じる。

生気を吸い取られるような、その不思議な感覚は、ある意味で自分の命を搾り取られて行くようなものではなるが――それでも、目の前にいる彼女が自分の命を奪い去る悪鬼になることはない。

それだけは、揺るぎない確信だと言える。……時たま、さっきまでのようにタガが外れるようなことを除けば、その認識に傷はない。

「……ちゅ――ぅ、ん――っ」

暫し、そんな声だけが静かな夜更けに響き渡る。

永遠であるかのようなそのひと時。時間にすれば数十秒にもみたない、まさに文字通りの〝一時（ひととき）〟であったのだが、二人の体感には容易く永遠を感じさせた。

「ぁ……ん……っ」

恍惚とした表情を浮かべ、蕩け切った様子でびくびくと小刻みに体を震わせているすずか。

しかし、その震えが次第に収まっていき、血の様に染まった深紅の瞳が、夜闇の様な紫色にも取っていく。

「……もぅ。ホントに、ずるい……よ」

こてん、とユーノの身体に倒れこみ、すずかはそのまま眠ってしまった。

その姿を確認し、ユーノは「……ふぅ……」と安堵の声を漏らす。

――どうやら、不義を働かずに済んだようだ。

いささか的外れな安堵だが、それでもユーノの奥手な心は少年の頃から――というより、今はもっと幼くなっているが――ちっとも変っていない。

そんな彼が、こんなところでなし崩し的に彼女を貪ることはしない

だろう。
そうしてすっかり夜の静寂を取り戻したことで、どこかホッとした思いのまま、ユーノも布団の中に溶け込み、眠りに落ちた。
優しい闇が二人を包み、安穏とした夜の中に消えていく。
眠りの世界は、酷く穏やかなもの。
それは決して悪い事ではなく、人が侵すことのできない領域の一つであるともいえる。
そんな夜に、夢の中。
彼と彼女はどんな思いをその儚い世界に託すのだろうか――。

＊＊＊　おまけ　そのいちっ

「……」
「えっと、すずか……さん？」
怒っている。
凄く、不機嫌だ。
そんな雰囲気を放ち、すずかは布団にくるまりながらモヤモヤした霧を放っているように見えるのは気のせいではないかもしれない。
そう思えるほど、今の彼女は機嫌が悪い。
それはそうなのかもしれないが、二人とも幼くなっているため其処までの迫力や本気の恨めしさを出しているというほどに見えないのは幸いといったところだろうか。
「むぅ……」
でも、だからと言って、不満であるということには変わらない。
すずかはムッとしながら、ユーノの足の辺りに這い寄ると、土いじりでもするかの様に弄り始める。
脹脛や膝の辺りはまだ良いが、さすがにそれより上まで来られると地味に痛い。
つねられるのはまだ穏やかな方であるが、何だか地味に痛いのでど

うやって宥めたものかと距離を測りかねてもいる……。
どうしたものだろうか。
「えっと……えっと」
「……（つねりつねり）」
「あの……ごめん」
「……（ぎゅっ）」
「いてっ」
「ぁ……（離し）」
それからしばしの沈黙の後――
「……本当に、狡いよ」
「えっ？」
「フェイトちゃんの時は、お姫様とかって言って頭撫でてたのに」
「い、いや……アレはその……」
「ホント、ユーノくんはずるいね」
ニコッと笑い、すずかはまた猫の様にすり寄って言った。
「だから……優しくしてくれたら許してあげる♪」
その後、静かにしっとりと――紫の猫と翠の少年が戯れた。
甘えた小さな猫の姿を、少年が愛おしげに見つめる姿が、衆目に晒されるまで、後少し。

＊＊＊　おまけ　そのにっ

しっとりタイムをしていた頃の、他の方々。
「あれ？　すずかちゃんは？」
「そういえばおらんなぁ……何処やろか？」
「まさか……フェイトの時みたいに」
「えと、あれはその……」
「まずいの！　ユーノくんが食べられちゃうの！　アリサちゃんの時より激しく!!」
「なっ……べ、べつにあらはただ悪ノリしただけよ！　ま、まぁ？　そうしたいってユーノがいうなら……その、こっちもやぶさかでもない

んだけど……もにょもにょ」
「もにょもにょはなのはの特権なの！」
「なによ！　良いじゃない、少しくらいさせてくれたって。私たち人間の時のユーノ撫でてないのよ」
「わたしだって小説版での描写くらいしかないの！」
「まぁまぁ、落ち着きぃな二人とも」
「け、喧嘩は良くないと思うよ……」
そんなことしながら、彼女らが本来の目的に気付くまであと数分。

＊＊＊　おまけ　そのさんっ

半ばお知らせですが、このシリーズで募集してたステージシフトの方を、もう少し応募条件を変えるというか、具体的にしたいと思います。
これまで、パロ元の原作だけを選んで頂いていましたが、どうにも原作だけを指定して頂いた場合、その原作で一話から長期小説を作る様な形になってしまいましたので『ガイアパロ』の様に全然投稿できていない状態に陥ってしまいました。
なので、誠に勝手で申し訳ないのですが、パロ元の原作と共にそのパロをやって欲しいシーンまでを出して頂きたいです。
ステージシフトの立て直しをするので、少しばかりシリーズとしては休止しますが、はやて編やなのは編についてはそのうち上げますので、そちらの方を楽しみにしてくださっていた方はそちらの方もお読みいただければ幸いです。
ハーメルンでは、読んですぐにアンケートといくには活動報告かメッセージしかなく、仕様の関係上広くは取りづらいので、これをピクシブの方にも移してそちらでのアンケートも作ろうかなとも思いますが、その辺りはまだ検討中といったところです。
そのため、暫く間を置いてその辺りを決めたら、またステージシフト込みでこの小説を動かして行こうかと思いますが、詳しくは小説情報の方で見て頂ければと思います。

ご迷惑をおかけしますが、何卒よろしくお願いいたします。

『番外編』

『番外編』　ドキドキっ！　お風呂たいむっ!!

お風呂――それは命の洗濯。
お風呂――それは癒しと至福の時。
お風呂――それは場所により男の楽園(エデン)。

――そんな夢のある場所に現在、我らが司書長は足を踏み入れているの（強制）だが……。

「……何なの、この状況……？」
「？　何か言った―、ユーノくん？」
「……別に、何でものないよ、ヴィヴィオ」
我らが司書長は泡まみれになりつつ、そう答えた。
現在、ナカジマ家のお風呂にて入浴の我らが司書長ちっちゃなゆーのくん。ヴィヴィオ（大人モード）に泡を塗りたくられながら、どうしてか男の永遠に求めてやまない楽園(エデン)に目下潜入中（強制）なのだが、なんで――
「湯加減どーだ～？」ガラガラ―っ
「丁度いいでーす」
「大丈夫です」
「いいお湯加減だよー！」
「いいお湯だよぉ」
「とってもいいです、ノーヴェさん」
「ええ加減ですぅ」
「そっか。じゃあ、あたしも入るかなぁー」
――こうなってるんだろうか？
何かが間違っている気がしてならない。そもそも僕は二十三なんだよ？　（今は五歳だが）
そもそもなんで男の僕がここに入ってるんだろうか……、と悩んで

みたゆーのくんだが、あまりにも唐突な場の運びに半分頭が麻痺している。

そもそも、事の運びの発端は……およそ十分前までさかのぼる――。

× × ×

――およそ十分前のこと……。

「そーいやお前ら風呂はどういう順番で入んだ～？」

きっかけは、なんてことのない一言だった。

「うーん……あ、そうだ！　皆で入ろうよ！」

そんな一言を言ったのは、誰だっただろうか？　とりあえずそんな発言が飛び出たあたりで、ユーノはじゃあ皆が上がるまで待つか……と本を開きソファーに埋まったユーノくん――だったが、

「じゃあ一緒に入ろっ！　ゆーのくん♪」

「えっ？」

大人モードのヴィヴィオに、猫の子よろしくお風呂場に連れていかれてしまった。

しかも、誰も反対しない。

あれよあれよという間に服をひんむかれて浴室に放り込まれてしまった。

ちなみに、服を脱がされたときの一幕で――。

「ユーノくん、ほら腕あげてー？　はら、ばんざ～い」

「えっ、あ……うん。えっと……」

ユーノくんが服を脱ぐたびに、周りの女性陣の動きが止まっていることに彼は気づいてない。

（うわぁ……ユーノくん、肌キレー……）

（司書長は、男の子……のはず）

（これは寧ろ……男の娘――ハッ！　新しいネタが！　〝ショタ司書長とドS提督〟……〝男の子と執務官ズ〟……〝聖王女と男の娘な

パパ〟――――うん、イケるっ！　（確信））
（うわわわっ！　あうぁうぅぅ……！）
（……ホンマについとるんやろか……？　――って、何考えてるんやウチは!?）
「あっ、じゃあユーノくん次は……」
「ちょ、し、下は自分で脱ぐってばっ！　もぅ！」
最後の「もぅ！」にみんなきゅん、ときたのは余談……だろうか？
そして下も脱いだユーノくんを大人モードのヴィヴィオとアインハルトが（こちらもちゃっかりと変身済み）浴室へと押していく。
結果的に最後に浴室に入室したユーノ君だが、彼の下の方に女性陣の視線が集中し……みんなの声（心の）が重なった。
『（ちっ……タオル装備か……）』
「さぁ、体洗ってあげるよーユーノくん」
「へっ？」
そんな訳で冒頭へと戻る。

× × ×

再び現在――。
「ホント、なんでこうなってるのかなぁ……」
世界はこんなハズじゃなかったことばっかりだ、今ではあまりケンカもしなくなった悪友の言葉を心中で復唱しつつ、ため息をつく。
「どーしたのぉ～？」
「……いや、なんでもないよ……」
そうだ。娘的な存在にお風呂場で体を洗われちゃってることなど、なんてことない。そう、なんてことないのだ。
「じゃあ次は下――」
「だ、だから下は自分でするよ！」
何でこんなに下を下をというのか？　そんなに興味が……そんなまさか、まだ十歳だろうに。
勿論、彼が思っている以上に、女の子は早熟である。

「それにしても、ユーノくん肌キレー……」
「ホント、じゃああたしにも触らせてー」
「私も～」
「わ、私も……！」
「ぼ、ボクも！」
「……ウチも、ええですか？」
「な、なんでみんなしてこっち来るの!?　ちょ、ちょっとノーヴェも！
　見てないでとめ――」
「おーい、あんま虐めんなよ―？」
「「はーい♪」」
「――ちょっとぉっ!?」
　そして、柔肌を（男だけどね）あ出る様にさわり、もとい洗ってるのだ。そう、もちろん健全だよ？　（視線逸らし）
「ちょ、そ、そんな……んぁっ！　く、くすぐったい、よぉッ……!?　ぁぁんっ！」
　ごくり、そんな擬音が聞こえたのは、決して幻聴ではないだろう。
　ヌメヌメ、と柔肌に指を滑らせていく女性陣。段々と、高揚する肌に少しばかり湿ってしまうのも、無理ないことだろう。（汗で、だよ？　勿論……だよ、ね？）
　ユーノくんはなんだか自分の体を撫でまわす女性陣にどうしたらいいかわからないが、体に精神が引っ張られがちで感性が子供寄りになっているとはいえ、彼もまだまだ「お盛んな」お年頃である。しかも、彼女らは誰一人として……タオルつけてない。いくら自分が女顔でも、子供の姿でも、少しくらいその辺を考えてくれてもいいのではないだろうか？　というか、ヴィヴィオとアインハルトとジークはそのぽよんぽよんっと揺れる果実をどうにかしていただけませんかねぇっ!?
　男なんだから、仕方無い。物体が熱を帯びて膨張するのは自然の摂理だし、仕方ないことだよね？　（熱膨張って知ってるか？　とか、ぼ、膨張してしまった……。なんてセリフもあるくらいだし）
　でも、今のユーノくんは正直地獄である。理性をマルチタスク展開

で使用しなければそそり立つのを阻止することすらできないだろうが、彼は意地でも耐える。
　でも、そんな彼の〝鉄壁〟の理性を全力でイマジンブレイクしに来るのは女性陣である。
「はぁ……はぁ……ゆーのくん、可愛い……」
　むぎゅッ！
「ぬあぁっ!?　ヴぃ、ヴィヴィオぉー!?」
　豊かな双丘に、押しつけられるユーノくん。顔が真っ赤に染まる。逆にヴィヴィオの方は、恍惚とした表情になり、頬の赤身は妖艶な色を帯びていた。（ヴィヴィオ姐さんと呼びたい気がするまである）
　するとそれに呼応するようにして他の女性陣もユーノにすり寄ってくる。
「わ、私も！」という感じでユーノに這いよる女性陣。それによってさらに、それこそ爆発しそうなほどに顔を真っ赤に染め上げるユーノくん。理性も、そろそろリミットブレイク寸前である。具体的には、アストロからコズミックまで、ロケットドリルから超銀河まで段階をすっ飛ばしてフィニッシュしそうである。
（も、もう！　……色々……限、……界だよぉ……）
　その時、具体的にはノーヴェがそろそろ止めようと立ち上がったとき、もっと言えばフラッとユーノ君が倒れそうになったとき……腰のタオルが、とれた……。（何故か？　それはお決まりだからだ。物理法則？　何それ美味しいの？）
　はらり、アーンドオオオ、ビキィィインッ！　な、マンモスぱおーんである。
　ユーノくんの鋼の理性も、男の理性殺しには勝てなかったよ……。ユーノくんの砦をぶち壊し、大人の頃と何ら遜色のないそれは……まったく男らしくないと言えば失礼だが――可愛すぎる男の娘な彼の、男の部分を……確かに体現していた。（大人いしいほど狂暴なのって……いいよねっ！）
「「「「お、おっきい……」」」」
「――――ハッ!?　……あうぁあっっ!?!?」

どうにか、最後のマルチタスクを使って意識を無理やり取り戻し、慌てて前を隠すユーノくん。
「あうあうあう……っっっ～～～～!!!!」
（……可愛い……ぽっ）
その後、おとなしく湯船で膝を抱えて顔を湯の中に沈めて「もう、駄目だ……最低だ……ボク――死にたい……」と言っている司書長に皆が謝り、どうにかユーノくんを立ちなおさせた。
そのあとは、みなさんご存じのとおりである。

× × × おまけ・そのいちっ！

このことをのちに聞いた女性陣（主に幼馴染ズ）が次なる作戦を立てようとしたが、とある形で阻止された。（主な貢献者は橙毛のロリ狼）
だが、それでも彼女らは諦めない。決して――
――その目に、ユーノくんのたくましいナニかを見るまでは、決して……！

× × × おまけ・そのにっ！

次なる襲撃者、迫る。
とある電波をキャッチしたとある彼方の次元世界に移住した翡翠の弟子（自称）。ショタ化した司書長をめぐる争いに再び投下される火花。司書長の明日を握るのは幼馴染か弟子か？　司書長をどちらかがその胸に抱いたとき、決戦の行方が決まる。
次回・《ちっちゃくなったゆーのくん》シリーズ　第五話「来訪の弟子、再会」
さぁ～て、次回もサービスサービスぅ♪

×　×　×　おまけ・そのさんっ！

ちっちゃくなったゆーのくんを作り出した、とあるロストロギア。その力がヒロインズに及ぶとき、パロディシリーズ《ステージ・シフト》が始まりを告げる。

様々な次元や世界が交差するとき、彼ら彼女らの道（ルート）が生まれ、物語は始まる。

＊いろんな作品の設定にユーノくんたちを配役して、書こうと思います。（手塚治虫先生の「スターシステム」みたいな感じで書ければと思っています）ジャンルは特に決めてません。個人的にはラノベか特撮とかあるいは普通の有名な童話とかでもいいかなとか思ってたりはしますが。

此方もアンケートで皆さまのご意見を伺おうかと思うのですが、アンケートをとっても原作を知らなかったりするものは流石に書けないのでそのあたりはご容赦願います。

《ステージシフト》
『第一話　試作・Wパロ』

――はい、よーい……アクション！「カチャンッ！」

ここは、風都。風が、人々の心を伝える街。
風の声が、響き渡る街……。
そんな街の閑静な住宅街のはずれに、一つのビルがあった。
そのビルの看板には、こう書かれていた。
【――八神事務所】と。

机に赴き、コーヒーを優雅にすすりつつ、タイプライターを打つ少年クロノがいた。彼はこの事務所の責任者……「おっはよ～！」……失礼、〝部下その一〟であった。
「クロノく～ん？　勝手な捏造はせんといてな～、ここの所長私やさかいになぁ」
「くっ、いつもこれだ……」
やれやれ……、とため息をつくさまは妙に似合っていた。どこかの世界もまた、彼はこうやって振り回される立場にあるのだろうか？
（まぁ、この世界軸だと、相棒ポジのコウモリモドキだろうが）
「相変わらず君のやることはどこかで必ず、つまずくねぇクロノ？
実に興味深い、君がここ一番以外でも成功できるようになる確率でも計算してみたくなったよ」
必ず、のところにかなりアクセントを置いて、この事務所の頭脳（こちらは掛け値なし）な男の娘な少年は自らの相棒である真っ黒な少年にそういった。
「……ご挨拶だな、我が相棒フェレットモドキくん？」
「君に言われたくないね、コウモリモドキ三世くん？」
バチバチとばなお散らすコンビに、ここの所長である八神はやては

ストップをかける。その手には「けんかよしいや！」のスリッパが握られている。　パコンッ！　という音を立てて二人の頭を直撃する。二人は頭を押さえて悶絶し、その鋭いツッコミに賞賛と皮肉を込めたコメントを我らが所長様にたまう。
「相変わらず容赦のない鋭いツッコミだな……」
「ナイススイング、はやて……」
「ふふん♪」
　しかし、勿論不満がないわけではなく、クロノはぼそぼそと文句をつぶやきつつ立ち上がり机に戻る。
「……（まったく、このお転婆娘は……そんなんだからタヌキとか童顔貧乳とか言われるんだ――）」
「誰が、美少女♪　童顔貧乳タヌキやねん!?」
「そんな事は言ってないだろッ!?」
　ちなみに彼女が握っているスリッパには、『貧乳はステータスや！』と『童顔で何が悪い？　若さこそ正義!!』が握られている。（ちょっぴり豪華仕様）
　さて、一通りのギャグをかましたところで、本日の業務へと戻る一同。（一人は半分ニートだが）
【八神探偵事務所】は、本日も割と平和であった。

×　×　×

　風都の中心に位置にそびえたつ、この街一の名家である『スクライア家』にて。
「そういえば……例のあのメモリの成長具合は、どんな感じかね？なのは」
「はい、まったく問題ありません。お父様」
「そうかそうか……これでまた、一つ地球の記憶に近づくことができるね。我ら、選ばれし家族が」
　この家の党首であるジェイル・ｓ・スクライアが次女であるなのはにそういった。現在この広い屋敷で二人暮らしであり……妻・プレシ

アは失踪。なのはの姉、長女フェイトもまた現在失踪中――とは名ばかりの、財団Xにての保護下に置かれている。
　ちなみに、これまでの間に長女であるフェイトは二人の人にほれ込み、しかしそのほれ込んだ相手は二人とも消えてしまい、今彼女は完全に浮草状態である。
　故に、今この街を脅かす脅威となりし存在は、『地球の巫女』とやらになるための準備中のなのは（重度のブラコン。よく本棚の中の弟のところに遊びに行く）である。
　まぁ、なんとも難儀な一家である。（ここはギャグ時空だからね）
「あ、お父様。そろそろユーノくんに会いに行ってきますぅ」
「ああ、ユーノによろしく頼むよ。あ、後いい加減戻ってきてくれと伝えておいてくれ」
「はぁ～い」
　そして、『地球の本棚』へ、入る……。
「ユーノく～ん」
「……また来たのかい、姉さん……」
「もぉつれないなぁ～」
「……」
「ありゃ？　お姉ちゃんが来たのに無視なのかなぁ？　悪い弟君だねぇ」
「……はぁ、じゃあ僕帰るよ」
　そう言って星の本棚から出ようとするユーノ。だが、
「……？　アレ？」
「あらあら、ユーノくんらしくもない。ここは私が、コントロール握ってるんだよ？　『家族』の本が読める様になったのも、私がプロテクトを解除したからなんだからぁ……」
「……弟閉じ込めて何がしたいのさ」
「うふふふ、気づいてるんじゃないのぉ？　こーゆーこと、したいって」
「え、ちょ……!?（な、なのは、こんなの台本には……）」
「（かんけーないの、今は私とユーノくんとの絡みなの。ここまで五話

近くの間、ずっと表でユーノ君成分を補給できなかった分をここでチャラにするの）」
「うわちょ!?」
するとその時、
「「すとおおおおおおおおおおおおおおぷっっ

フェイト「か、母さん落ち込まないで……」
アリシア「ママ、落ち込まないで……」
フェイト「お姉ちゃんも復活したんだ……」
アリシア「うん、やっぱり当てはめには人数いた方がいいからね」
ティアナ「ところで、私たちの出番は……？」
スバル「はいはい！　私アクセルがいいです！」
はやて「それだと私スバルとくっつくことになるやん!?　私おっぱいは好きやけどレズじゃあらへんがな!?」
スバル「大丈夫です！　ダブルアクセルエクストリームでせんせーとユニゾンでヒロインですから！」
シュテル「スバル、その役目は別に私でもいいと思うのですが？私の魔力光赤ですし、何なら見た目通り黒で師匠の隣を……」
ティアナ「シュテルさんまで……というとこのままだと、今回の私の出番が本格的に無くなってしまう!?」
なのは「というかシュテルが相棒なら元祖パートナーの私でもいいの！」
フェイト「それはずるいよなのは！　寧ろそれなら私でしょ、私のカラー黒だし！」
クロノ「それだと僕の出番がなくなるのだが……いやむしろ逃げ出したいからこの方がいいかもしれないな……」
ユーノ「クロノ逃げるのはずるいよ」
クロノ「そんなこといってもなぁ」
シャマル＆コロナ「「ユノクロキマしたわぁ――ッ!!」」
ユーノ「どこをどう見たらそうなるのかなぁ……？」
クロノ「気にするな、きにしても無駄だ……（遠い目）」
別世界でのアコースとの絡ませられを思い出したクロノさんでした。
段々とカオスになって来た。出ていない方々も、ちょっと不満げである。
エイミィ「どーせなら私がアキちゃんポジでもいいのにねぇ。これでも関西系魔法少女だったんだよ？　それならクロノ君とイチャイ

チャできるし～」
アルフ「あー確かに、エイミィはそうだったねぇ」
エイミィ「パメルクラルクだけやあらへんよ？　によろーんもできるさ～」
アルフ「芸達者ねぇ、うふふふ」
なんかのネタで盛り上がっている。
アリサ「にしても、私ら出番ないわねぇ……」
すずか「次に期待、だね」
アリサ「灼眼とかゼロ使ならなぁ……」
すずか「吸血鬼ものなら……きっと」
自分の出られそうな作品を思い浮かべていた。大丈夫ですよ、お二人には、空白のあたりを書いた特別枠をご用意しておりますから。
アリサ・すずか「「本当／ですかッ!?」」
ええ、勿論。二人にはチャプターヒロインとして、そしてその後のメインヒロインの一員としてとことん活躍していただきます。
アリサ「よし！」
すずか「やったね、アリサちゃん！」
でも少し、シリアス目なのでそのあたりはご了承ください。
アリサ「あんまりユーノに酷いことしないお話しだといいんだけど……」
すずか「だね……」
そのあたりは、いずれまた……。
――一方その頃……。
レヴィ「いくぞいくぞいくぞぉ～!!」←ソードフォーム（ブルーだけどね！）
ユーリ「レヴィカッコいいです！　私も這いよりたくなりました！」
ディアーチェ「主ら……」（呆れ）
ヴィヴィオ「……私達って空気、ですね……」
アインハルト「……ハイ。やっぱり私って影の薄い女なのね……。フフフ」

リオ「あーまた悪乗りしちゃってるなぁユーリちゃん――お仕置き、しないとね♪」ジャキッ！　↑フォーク＆「囮よ！」なソード装備。
コロナ「り、リオ―？　だ、駄目だよ落ち着いてぇ～！　こ、こんな時こそ！　スマイルスマイル！」
リンディ「カオスねぇ～」↑リンディ茶、ずずぅ～。
レティ「まぁ、そうね……」↑普通のお茶ずずぅ～。
和むもの（マイペースなだけの人）もいた。
ヴァイス「男ポジは足りねぇ……だが、俺らのやくがらが微妙にかぶってて出られねぇ……」
グリフィス「ですね……青年ポジですし……」
ゲンヤ「親父ポジも、なかなか被るからなぁ……」
レジアス「……難儀なものだ」
ジェイル「逆に狂気キャラはいいものだよ、割とどれにも出られるからねぇ」
ゼスト「まぁ確かに……そうかもしれんな」
グランツ「発明家な父さんキャラも……有りだろうか？」
キリエ「十分アリよ！　むしろ必要だってばお父さん……じゃなかった博士！」
アミタ「そうですよ！　博士ならいいポジションは引く手あまたです」
グランツ「有難う、二人とも……」（感謝・感動）
ジェイル「やはり、娘たちはいいものだねぇ……」
グランツ「ああ……いいものだな」
グランツ博士って、カロスのプラターヌ博士っぽいですよね。
ウェンディ「それにしても、あたしらに出番あるんすかねぇ？」
ノーヴェ「まぁ、ドゥーエ姉も復活したし……クア姉も……一応な、……トラウマは消えてないけど」
チンク「……過ぎた同情もどうかとは思うが……あれは、本気で心配だと姉は姉を思うぞ、ノーヴェ……」
セッテ「……どうせ出番ないし」

トーレ「ＩＮＮＯＣＥＮＴでは空手バカになってたくらいだしなぁ……他はあんまり……」
オットー「執事か、シスターポジならまだ……それか陛下と一緒にとか……」
ディード「……あんまり、期待はできないかもですね……。でも、コロナお嬢様とも共演出来たりしたらいいですねぇ……」
ディエチ「まぁ……リオとも共演してみたいけど……」
ウーノ「私達基本影薄いからねぇ……」
ナンバーズ『はぁ……』
ごめんなさい、作者もいまいち把握し切れてません。
ナンバーズ『オイコラ作者ァァァッ!!!???!!』
ごめんなさい（ぺこり）
セイン「というかあたしは――ッ!?　ＣＶ…ミズハスだよ!?　ユーノ君とヴィヴィオと同じなんだよ?!」
忘れてたわけじゃないよ、ただ……。
セイン「ただなにさ」
ほっといたら面白いかなぁって……。
セイン「理由が最低だった!?」
ウーノ「（というか……天の声との対話って可能なのね）」
はい、時々出てきますよ。
ウーノ「心読まれた!?」
さてさて、他の方々は……「無視かよこの野郎!?」……いかがお過ごしかなー？
ウーノ「せめて聞いてよ!?」
さて先ほどまで言い争いをしていた他の皆さんはというと……？
なのは「とにかく！　やりなおしを要求するの！　テイクツーなの！」
フェイト「なら次は私がユーノの相棒に……」
なのは「フェイトちゃんはそのまま冴子さんポジなの」
フェイト「横暴だよ、なのは！　大体私そんな狂気に魅せられるような人間じゃないよ！」

ユーノ「(……そうだったんだ)」←ちょっと疑ってました。
はやて「なんかもういっそのことスカッと戦って終わりでもいいと思うんやけど……某サイト様のところやと、クウガの最終決戦パロで、なのはちゃんとユーノくんの二人だけで綺麗にまとめてたしなぁ」←半分諦め、ヒロインは次回に持ち越しかなと思い始めた方。
ユーノ「確かにあの雪山対決は二人の方がいいよねぇ。シンプルだし」
なのは「ほら、ユーノくんも私と二人がいいって」
フェイト「そんなこと言ってないよ、イメージカラー先行で私でしょ！　なのはは若菜さんポジで『エクストリィィィム!!』って言ってればいいよ！　私とユーノの合体技で逝かせてあげるから」
……ぶっちゃけ最近バトルシーンばっかり書いてたので、ギャグ寄りを書きたくなって暴走していましたが、バトルシーンだけでもちゃんと書きますかねぇ。
なのは「じゃあやっぱり私!?」
フェイト「私だよね!?」
クロノで。
なのは・フェイト「「なんでぇぇぇ!?」」
そんで、なのはとフェイトをエターナル（ツイン）役にして……、
全員『いきなり劇場仕様!?』
いやぁ……配役って難しいね。
全員『ごまかすなよ!?』
次のシリアス（？）バトルシーンで……（という名の名シーン再現のみ）……ラストにしよう。はぁ……男性キャラが足りないなぁ……。ポジ当てがむずかしいよ……。

ではバトル開始！
よーい、アクション！「カチャンッ！」

×　×　×

唐突に風都タワーの屋上にて。
「この世界は、私たちが支配するんだ！　そして、婚期逃がしなんてもう呼ばせなぁぁぁい!!」
「まずい、彼女らの感情がダブルドライバーの影響下に置かれて暴走してるよ」
「なら、とっとと片をつけるぞ……相棒」
「ああ……」
二人が取り出すグリーンとブラックのメモリ。
【ＣＹＣＬＯＮＥ！】
【ＪＯＫＥＲ！】
『変身！』
メモリを構えた二人の腕が、Ｗの文字のようになり、グリーンの方のメモリが先にユーノのベルトに差し込まれ、意識と共にクロノの下へ。
それをベルトに押し込み、ブラックのメモリを差し込み、展開させる。
【ＣＹＣＬＯＮＥ！】
【ＪＯＫＥＲ！】
再びガイダンス音声が鳴り響き、二人を風が包む。
右がグリーン、左がブラックの仮面の戦士――仮面ライダーＷへと、二人は変身した。
そして呼ぶ、最強の、究極への道を記す導き手を。
キュルルッ、ウォオオンっ！　と音を鳴らして、二人の下へと現れるエクストリームメモリ。ユーノの体を回収して、そのまま、ベルトからはせられるエネルギーのレールを滑り降りる。
ガキィン！　とベルトに収まったそれを左右に展開させる。
【ＥＸＴＲＥＭＥ！】
究極を掴め、Ｗ！
仮面ライダーＷ　サイクロンジョーカーエクストリーム、爆誕。
エターナル　『フェイトレイジング』と戦うダブルエクストリーム。
相手は強い、どこまでも、どこまでも、強い。だが、負けるわけに

は、行かない。
次々と連打を繰り広げていくW、しかし……、
『まだ、終われない！』
【ＺＯＮＥ！】
その時、二十六本のメモリが、エターナルの体中にあるメモリスロットに突き刺さり、マキシマムドライブのガイダンス音声を告げる。
【ＡＣＣＥＬＥ】
【ＢＩＲＤ】
【ＣＹＣＬＯＮＥ】
【ＤＵＭＭＹ】
【ＧＥＮＥ】
【ＨＥＡＴ】
【ＩＣＥ｜ＡＧＥ】
【ＪＯＫＥＲ】
【ＫＥＹ】
【ＬＵＮＡ】
【ＭＥＴＡＬ】
【ＮＡＺＣＡ】
【ＯＣＥＡＮ】
【ＰＵＰＰＥＴＥＥＲ】
【ＱＵＥＥＮ】
【ＳＣＵＬＬ】
【ＴＲＩＧＧＥＲ】
【ＵＮＩＣＯＲＮ】
【ＶＩＯＬＥＮＣＥ】
【ＷＥＡＴＨＥＲ】
【ＥＸＴＲＥＭＥ】
【ＹＥＡＳＴＥＲＤＡＹ】
【ＥＴＥＲＮＡＬ】
【ＲＡＩＳＩＮＧ】

【ＦＡＴＥ】
――ＭＡＸＩＭＵＭＤＲＩＶＥ!!――
その記憶の光の奔流に押され、屋上から放り出されるＷ。
そのままＷは地上へと墜落していくかと思われた……その時だ！
「……負けないで、仮面ライダー」
皆のその思いが、街の風を……呼ぶ。力を、勇者に伝える。
『Ｗ―Ｂ―Ｘ　～Ｗ―Ｂｏｉｌｅｄ　Ｅｘｔｒｅｍｅ～』
「ユーノ、風だ……風都の風が……！」
『僕たちに、力を……！』
エクストリームメモリに……人々の思いを乗せた風が宿る。
六枚の翼が、Ｗの背に宿る。
クリスタルサーバーを金色に変わり、さらなる進化を遂げるＷ。
――【仮面ライダーＷ　サイクロンジョーカー・ゴールデンエクストリーム】
空を切り、降下から上昇へと変わるＷ。そして、その過程でエクストリームメモリのウィングを閉じて開く。
【ＥＸＴＲＥＭＥ！】
――ＭＡＸＩＭＵＭＤＲＩＶＥ!!
『いっけぇぇぇッ!!』
そのまま、キックをエターナルへと叩き込んだＷ。
「こ、今度こそはぁ！」
「め、メインヒロインにいぃぃ！」
『ああ、それはまた、次回だ……』
「次は、結ばれたいよ……」
「ユーノ……」
『……僕も、だよ……。二人と、皆と……ずっと一緒にいたい……』
「（空気になってしまった……）」
そして、戦いは……終わった……。

×　×　×　おまけ　幼馴染五人組による次回予告という名の独白。

なのは「次は、結ばれたい……」
フェイト「運命を越えて……」
はやて「柵さえも飛び越えて……」
アリサ「貴方と、きっと……」
すずか「心を、思いを重ねて……」
『――どうか、ずっと一緒にいられますように……』
次回、《ステージシフト・第二話》へと――

――続く

第二弾『ウルトラマンガイアパロ　序』

ガイアパロ《序章：光の目覚め》

ミッドチルダの、とある大学の研究室にて――。

一人の青年……というにはいささか幼い研究者が、やたらデカい装置を使い、仲間たちと何かを始めようとしていた。

ユーノ「いいよ、始めてくれる？」

アリサ「ＯＫ……じゃあ、ダイブ開始よ、ユーノ」

ユーノ「うん……」

すずか「じゃあ、行くよ……システム起動、量子加速器エンジン駆動開始」

金と紫の髪の少女らから確認を取られたユーノと呼ばれた彼は、装置の中でやたらごついヘルメットをかぶり、始まった《加速》のＧに耐えていた。凄い圧力が体中にかかる。そして、だんだんと、意識が体をやつしたままに「現実の身体」から離れ、惑星の意識の中へと溶け込んでいった……。

――目の前の光景が変わる。

全てが後ろへと、いや……全てを振り切った先で彼を待っていたのは、赤い……世界。

大地の記憶の世界だった。

そこに広がる赤い、世界。さらにそこに佇む赤き、巨人と怪獣。ぶつかり合う両者だが、光の巨人の放った赤き光の刃が……怪獣を貫き、決着。

――凄い……とその光景を目の当たりにした彼は、そう口に出した。するとその巨人は彼の方を見た。

『……』

「……ウルトラ、マン……？」

その巨人は両手を彼の方に差し出した。まるで、何かを伝えるかの

ように……。
しかし、巨人の――「ウルトラマン」の意図が分かる前に、彼は現実の方に引き戻される。
凄い勢いで今度は吸い寄せられるような加圧にさいなまれ、次に彼がまともに感じたのは……ものすごい、煙だった。
「――げほっ、ゲホッ!?」
唐突に襲ってきた（？）というよりも戻って来た意識に、戸惑った身体が驚いたのか、それまで呼吸を忘れていたのか……どちらにしても彼は猛烈に咳き込んだ。彼の名は、ユーノ・スクライア。この学校でも（大学だけど）有数の天才少年（ここ大事）である。
そんな咳き込む彼を心配するのは、この彼と同じ研究室に属する少女ら、高町なのは、月村すずか、アリサ・バニングスの三人である。
「大丈夫？　ユーノくん」
「う、うん……何とか……けほっ！」
「あーあー……また派手に失敗したわねぇ……」
「まぁまぁアリサちゃん」
「し、失敗ってなにさぁ！　まだこの研究開発途ちゅ――「はーいそこまで、アンタもねぇいくら優秀って言っても少しは成果を出さないと呆れられるわよ～？」そ、そんなはっきり言わなくても……」
しょんぼりするユーノ。それを慰めるすずかとなのは。アリサは二人に「あんまり甘やかすんじゃないわよ」と文句を言ってる。
光電子管を装置から引き抜きつつ、これの容量が足りなかったのかぁと首をかしげるユーノに、なのはがこう聞いて来た。
「ところでユーノくん」
「？　なに？」
「ウルトラマンって……なあに？」
「……？　そんな事、言ったかなぁ……？」
「「言ってたよ／わよ」」
「???」
三人に同時否定され、自分でも無意識の内に何かを口走っていたらしいことをユーノは知った。

それから　少しして……お昼腐ご飯を食べるために校門前を歩きつつ、外へと出ようとする一同。
「ボクの発明だって……そこそこ役に立ってるよぉ……」
「ハイハイ、でも『極秘』とかで教えてくれなきゃ分かんないわよ～。それに、この研究にしてもいったい何の意味ある分け？　わけわかんない事してると、いくらユーノのラボって言ってもその内見放されちゃうわよ～？」
「まぁまぁアリサちゃん。もうその辺でそろそろ、ね？」
「はーい」
「にゃはははは……」
「……、」
「そんなことですねるんじゃないわよ……ユーノ」
「別に拗ねてなんて……」
　あからさまに不貞腐れているユーノに対してその背をちょっと強めに叩くアリサ。
「ほーら、いつまでも辛気臭い顔してんじゃない・わ・よ・っ！」
「いたぁっ!?」
「どう？　頭のスイッチ切り替わったでしょ？」
「……あ、アリサぁ――！」
「何よー元気出たでしょ？　寧ろ感謝してほしいわねぇ～」
「もぉーっ！」
　何か微笑ましいような追いかけっこをする二人を後ろ二人も微笑ましく、そしてちょっとうらやましそうに見ていた。
　そんな四人の横を何人かの生徒たちが素通りしていくが、その様子をユーノはぼんやりと眺めている。
「……ユーノくん、なんか今の子たちに見とれてなかった？」
「えっ？」
「ホント、ユーノくん……？」
「あんたもこんなだけ美少女侍らせといてまだ他の女の子をご所望ってわけ？」

「いや、べつにそういうわけじゃなくて……」
「それとも何、年上？　年上が好きなわけ？　そーいえばカリム先生に見とれてたような……」
「カリムさんは、なんていうか……お姉ちゃんみたいな感じがして……その……」
「……ユーノくん、もう少しだけ待ってよ。後そう、五年もあれば……きっと、その……」
「……すずかはいったい何を言ってるの？」
「……ユーノくん、ちょっと……お話ししようか？」
「なんの話をするのかな、なのは？　何だか目が怖いんだけど……」
そんなこんなを繰り返しながら、外へと出た一同を――いきなり非日常の始まりが襲う。

＊　＊　＊

けたたましいサイレンの音と共に、《ＷＡＲＮＩＮＧ》の文字が表示される。
「大気圏に異相の収束を検知」
「上空にワームホールを確認、巨大な物体が転送されてきます」
「ついに……来たんですね……」
「これが、厄災……っちゅーことなんか？」
『おそらくは、ただ……これが始まり……いや「前兆」でしかないのかもしれません』
「『前兆』？　これが……『前兆』でしかないと？」
『仮にそうだとしても、やれるだけのことはやってきました。あとは……』
「わかってます……都市防衛指令・発令や、シグナム」
「チームライトニングと、出ます」
『――これは訓練ではありません』
「オールチェックグリーン、スタンディングバイ」
「ファイター2、スタンディングバイ」

「ファイター3、スタンディングバイ。いよいよ実戦、ですね」
「まぁ、腕を見せどころ、ですね」
『私語は慎む様に』
「あ、はい！　了解です！」
「チームライトニング、シュートっ！」

＊　＊　＊

地上の方では、人々は大騒ぎ。地上に降り立つ……巨大な何か。
「あれが……、そうなのか？　アレの……事だったのか？　僕らが、恐れていたものは……！」
「ユーノくん!?」
「ちょ、どこ行く気よユーノ！」
「ユーノくん！」
そうこうしてる間に、どこかへと立ち去っていくユーノ。そして少し離れたところで、通信をして聞いてみた。
「あ、僕だけど……あれが……そうなのかな？　僕らの恐れていたのって……あれだったのかな？」
更にその時、空を掛ける三機の戦闘機。
「ああっ!!　飛んでる。ファイターが!!」
しかし、あえなく撃墜。
自分たちのしてきたことは無駄だったのか、と歯噛みするユーノ。すると、その時――地球との対話が再び実現する。
再び、赤き大地の記憶の世界。
「ウルトラマン！」
またその言葉は無意識の内に出てきた。そして、彼に力を貸してほしいと頼む。
「この世界が、危ないんだ！　僕は……君に、なりたい……ッ!!」
両手を差し出す。それを見て試しているのかと聞いてみるが、彼は無言だ。ユーノは意を決して……彼に両手を伸ばす。
「光が……僕を包んで……いや、これは――光が、僕の中に……」

まばゆい光が、彼の姿を変えていく!!
そして……赤き光の……大地の使者が……この地に降り立つ。
「お、おい何をぼさっとしてやがんですかぁ―!? カメラをまわせー!!」
「あ、あいあいボス!! こ、これは凄い特ダネにー!!」
「あぁまだメーク終わってないのにー!?」
地上ではそんな感じで、次にまた現れた巨大な存在に見なが目を向ける。
「ディアアアアアアアアアアッッ!!!!!」
ドゥッカーンッッッ!!!! という音と共に、大地を揺らし……降り立つ巨神。この星の意志の呼び寄せた救世主。光の……巨人。
破滅に抗うべく人類の選んだ未来を守るために、この星の意志は……救いの使者を遣わした。

次回、ガイアパロ《もう一人との出会い、そして交錯・決着。 Ｃｈａｐｔｅｒ＿Ｖ．Ｓ．＿ＡＧＵＬ．》

＊ ＊ ＊ おまけ：裏方の光景《Ｖｅｒ＿２ｎｄ》

ティアナ「……メインヒロインの筈なんですけど？」
スバル「セリフ、二つくらいしかなかったねぇ……」
ティアナ「むしろなんかなのはさんたちのほうがヒロインぽかった様な……」
エイミィ「ま、まぁまぁ……」
ティアナ「いいですよねぇ……本編でもちゃんと旦那さんがいる人は……しかもこの話でも確定済み」
スバル「私達、絡んでる男キャラなんて……」

ティアナ「あんたはトーマ君がいるでしょーが」
スバル「……どうせリリィには勝てないもん……」
スバル・ティア「「はぁ……」」
なのは「これは……メインヒロイン昇格の兆し……！」
アリサ「私達意外と出てたわよね」
すずか「うん、でも一話だからっていうのもあると思うけど……」
アリサ「まぁ……そうだけどさ……」
すずか「あとは空白のお話を書いてるところで印象に残りやすかったからとか（主に作者の）」
確かに、それも少しあります。
フェイト「大丈夫……ビゾーム回なら、いけるから……」
はやて「コマンダー……女性やったらある意味最大の理解者的な役割でええんとちゃう？」
シャマル「千葉参謀役……いつも驚いているような印象が……」
クロノ「……出番は次回か……」
リンディ「今回は私も出させてもらえるみたいで嬉しいわぁ」
エイミィ「まんま博士役なのか、母親的なポジなのかは少し気になりますね」
ヴィヴィオ「リンブン役かぁ……」
ヴィータ「あたしは……いや。カッコいいけどさぁ……」
ＧＯＤでヴィヴィオが少しアホっぽかったからねぇ。
エリオ「そー言えば何気に初出演ですね、ボク」
キャロ「おめでとーエリオ君」
エリオ「有難うキャロ」
ルーテシア「私も出たかったなぁ～」
エリオ「まぁ、ルーの出番もあるさ」
キャロ「そーだよルーちゃん！　一緒に出れるよ、きっと！」
ルーテシア「だといいんだけどねぇ～」

こんな感じで、次回以降も続いていきますのでよろしくお願います。

《空白の時　――ブランクタイムーー》

《ブランクタイム》　第一話　『始まりの傷』

《ブランクタイム》

『闇の書事件』。『闇の欠片事件』、『構成体（マテリアル）事件』、『砕けえぬ闇事件』。

様々な戦いが、あった。

そして、再び……大きな野望を成さんとするもの達が目覚めるまでの、しばしの空白の時が……少年と少女たちの間に訪れる。

その空白の中でかわされる、怒りと悲しみ、孤独と絶望。そして、信頼と愛の……物語が、今――始まる。

《空白の時、ブランクタイム　――灼熱と血の月を司りし、姫君たち――》

＊　＊　＊　『序章・不安が生む、心の亀裂』

あれから……二年の月日が流れた。

皆それぞれの道を選び取りながら、日々を過ごしていた。

それぞれの空を目指し、飛び立っていく。

だが、そんな子供たちの志を……まだまだ、未熟な心を、純粋な思いを……壊していくのだ。

――課せられた運命という、怪物が……。

事の始まりは、ほんのわずかな……些細なものだった。しかし、それは大きな欠落から……始まった。

空を舞う、純白の天使に突然訪れた……悲劇から、始まる。

それは、人々の心の片隅にある――知らないがゆえの恐怖と、失いたくない故の恐怖が……重なり、悲劇を……呼び寄せる。

少年と、少女たちとの間にある絆は壊れ、強く繋がり……とこしえ

のものとなる。
彼ら彼女らの抱いていた、始まりの「想い」が……「今」へとつながる。
これは、そんな「今」を作った……少年少女の『空白の時』の物語である――。

＊　＊　＊『少年が抱えしもの』

『無限書庫』、次元世界の叡智と記憶の全てを……その本棚に納める、超巨大データベース。いつからあるのかは、誰も知らない。しかし、これまでずっと「世界の記憶」をずっと蓄え、人々に伝えるためにいつも、その世界の片隅にあった……などともいわれるが、実際のところ、認知されたのは「時空管理局・本局」の中に置かれたことがきっかけだろう。
ただ、設立以前から管理局にあったことだけは確認されているが、誰が何のためにどのような目的で作られたのか、などは明らかになっていない。
それゆえに、扱える者が少なく……これまでずっと「物置」として管理局の「お荷物」呼ばわりをされていた。
だが、それもある一人の少年の手によって変えられた。
そのたった一人の少年の手によって……物置などと揶揄されていた『無限書庫』は、データベースとしての本来の姿を取り戻すことになった。これまで数年単位でなくては情報を「発掘」できなかったにもかかわらず、少年の使う「検索魔法」と「速読魔法」が、情報を引き出す決め手となった。
歴史の発掘を生業とする一族の出だという彼のその手腕に、時空管理局の上層部も彼の存在を認知し始め……『無限書庫』は瞬く間に管理局の主要部署となった。だが、その重要度とは裏腹に、これまで顧みられてこなかったこともあり、重要度と注目度のわりにその位置づけは人々の心の中でもかなり低い位置に鎮座することになった。
――所詮は文官。

――所詮はデスクワーク。
――所詮は物置だった場所。
――所詮は使い走りの下位部署。
――所詮は体を張らない楽な部署。
そんな認識が溜まり、徐々にそこで情報を集める者たちのことを顧みないような無茶な「依頼」が寄せられるようになった。未だに、体制は十分とは言い難いというのに……汚い「大人」の欲望は、どこまでも「子供」を苦しめることになる。
その欲のつけは「子供」に、ここを開拓した少年に回されることになる。
実際、発足から正式な部署として認められるまで――一年。
少年以外の「司書」たちが正式に配属されるまで――半年。
少年が『司書長代理』として、責任者となったのが――その直後。
そして激務に追われることになり、その半年が過ぎ……「司書」の半数が去っていった。
結果として、無限書庫に残った「司書」はたった数人……。
その数人で、激務をこなしていく日々……。しかし、作業効率はいまだに少年の受け持ちが六割という異常なほどの状況でも、少年は〝頑張った〟。
勿論、自分のやるべきことをこなしているとも言えよう。
だが、本当は……少しだけ、違うところに……『始まりの目的』があったのかもしれない。
――孤独なのは……嫌だ……。
孤独の海に包まれて生まれた少年は……ずっと、そこから抜け出そうとしていた。でも、そのための決定的な「他人」とのつながりを、彼は……ずっと、持っていなかった。だから、縋っていた。
――誰かに、認めてほしいと……。
そうして、ようやく……得られた。そう、感じられるものが……ようやく、見つかったから。

＊　＊　＊　『雷光を背負いし少女が成したいこと』

――執務官になる。
その始まりとなった気持ちは、一体……何がきっかけだっただろうか？
義兄の付いていた職業だから……というのもあったかもしれない。憧れの部分もあった。
だから、とは言わないが……行く当てをなくした少女を拾ってくれた義母と義兄の所属する管理局に入ることははなから決めていたし、彼女は一度罪を犯した。だから、その分の貢献をしたい、という気持ちもあった。
だから、戦闘タイプの彼女がつくにはちょうどいいし……義兄や義母の手伝いができる……それが彼女を、この「執務官」という官職に着こうとする意欲を更に掻きたてることになったのだ。
だが、彼女が〝家族〟に入ったころから、〝兄〟や〝母〟は昇進や彼女のそばにいようとする親心の為に地上勤務にかわろうとする関係でごたごたしており……彼女は一番参考になりそうな兄や母から教授を賜ることは出来なかった。
だが、独学にはやはり限界がある。
かといって、今から……せっかくできた友人たちと離れる選択をしてまで……そういった系統の学校に編入するのも、ちょっと複雑であり、彼女は行き詰まりを感じることになる。
無論、執務官になるのはかなりの難関であり……普通は一年や五年で慣れるのは本当に一握りの天才達だけだ。中には十年もの月日を費やす人も珍しくはない。だから、後一年かそこらじっくりと勉強して、大分落ち着いたころに兄や母に習うことだって選択の一つだ。
だが、やはり……気持ちは焦る。
そんな時だ、世界の叡智を操る部署に着いた幼馴染の少年に……教えを乞うことになったのは……。
彼の教えは分かりやすく、少女はめきめきと力をつけていった。
しかし、彼はやはりどうしても「忙しい」のだ。だが、それでも彼は一緒にいてくれる。

それが嬉しくて、でもやはり申し訳なくて……だから少女は彼にこう聞いたことがある。
「迷惑じゃない？」と。
その問いに彼はこう返した。
「全然」と。
それから、こういった。
「君が、僕を頼ってくれて……すごく嬉しい」と。
その屈託のない笑みでそれを言われると、なんとも言い難い高揚した心が彼女の胸に湧き上がる。頬が上気し、少女の色白の肌は……すっかり赤く色づいてしまう。
その何というか……とても「落ち着く」雰囲気を醸し出している彼に彼女は、記憶の中にある『姉（アリシアとリニス）』達の姿を思い出し、彼の姿と重ねていた。
だから、自分は彼に甘えてしまう。ひょっとしたら、親友よりも……どこか深い所での「依存」の様なものが始まっているのかもしれない。そんなことを考えてしまい、なんだか恥ずかしくなった。でも確かに、一番親しい異性……という親友たちとは違うカテゴリにいるわけだから、意識してしまうのはしょうがない気もする。
そう、しょうがないのだ。
彼の翡翠の光を放つ魔法陣に魅せられるのも、その上で本を高速でめくっていく彼の背に寄りかかって背中合わせで無重力の海に漂うことが心地よいのも、偶々忙しかった家族が家にいないから彼のところに泊まったのも、仕方ないのだ。
忘れることのできない、払拭もできないほどに、心に沁みついた温かさを手放すなんて、馬鹿らしいから。少しだけ、欲張りになるのも仕方無い。そう、仕方ない筈なのだ。
――だから、その日も彼女の心と体は……とても温かかった。

＊　＊　＊『夜空を統べる少女の心』

初めは、特に何もなかった。

女の子かと思った、でも男の子だった。
『闇の書』の呪いから助け出してもらうのに、一役を買った少年だと聞いた。
友達の〝始まり〟をくれた人だと聞いた。
友達の師匠で、一番仲のいい男の子だと言っていた、実際その通りだと見てて分かった。
後に、管理局のデータベースを扱える凄い人だと聞いて、とても凄い子だと分かった。
何度かそこへ遊びに行った時、割と彼が生活に対してだらしないことが分かった。
そんな風に無茶を平気でするところが、友達と同じだなぁと思った。
それで、皆でそういうのを直そうとして、行く機会が増えた。
料理を作っていったら、「美味しい」って食べてくれた。
その時に彼の浮かべた笑顔が、とても素敵だと感じた。
なんとなく、意識……していた。
そして、私がかかわった「罪」の観察期間が切れた今年の初め。魔導師として、ランク試験を受けることになり……、嘗て自分の持つ魔導書の「優しき管理者」である銀髪の女性の告げた『新たな魔導の器』を作る時が、……世に生み出す日が……来た。
〝彼女〟の意志を受け継ぐ「管理者人格」であり、「融合機」……そして、我が家の末っ子。
そんな子を生み出すために、彼の力を借りた。
自分たちの使う「古代ベルカ式」は、今ではもう廃れてしまった者であり……「近代ベルカ」が現在の主流になっているとかで、デバイスを作ること自体が困難であると分かった。ましてや、『闇の書』……現・『夜天の魔導書』の管理者人格だった〝リインフォース〟並のユニゾンデバイスとなれば、他に例が少なすぎる。
だが、そんな窮地に陥ったデバイス誕生計画を後押ししてくれたのが、彼がこの二年で開拓・整理を行い、本格的に「データベース」としての姿を取り戻した『無限書庫』であった。

しかし、そこなら資料が見つかるかもしれないという話を受けて、自分の可愛い『守護騎士』たちを引き連れて……ようやく自らの足で踏みだせるようになったことも手伝い……勇み足で向かったのだが——結果として、自分たちは役立たずであったといっていい。

【検索・閲覧・選別】

たったこれだけの作業である筈なのに、非常に手間取った。

まさに『無限』の名に恥じぬ様な、膨大な量の資料の数々。

ここに収められているのは、まさに「世界の記憶」であったと……実際にそこで資料検索をした彼女らは、それを痛感した。

そこへ忙しいだろうに、間を縫ってまで……彼は来てくれた。

そして、〝家族〟を生み出すためのサポートをしてくれた。

知り合って二年ほどしかたってないのに、彼は真摯に自分たちを支えてくれた。

なぜそんなにまで、皆を支えてくれるのか？　と聞いたこともある。

すると、彼は笑いながらこんな風に言った……。

——前に、フェイトにも同じことを聞かれたよ。

と、そしてさらに彼はこう答えた……。

——僕は、こうして皆を支えること位しか、できないから……。だから、自分にできることで……少しでも、支えられたら……って。皆と、一緒に……居たいから。……それにね、皆が頼ってくれると、嬉しいんだ……。少しでも、皆の力に……「支え」になれている様な実感があるから……。

だから、支えたいんだ……。と、彼は言った。

その言葉に、思わず自分も……周りにいた守護騎士たちも聞き入ってしまった。

——そして、彼に対する見方が……また少し、変わった。

その彼に対する『見方』……彼に対して抱く『想い』の像が——より強く、より深く、より鮮明に……そしてなによりも、……とっても熱いものに……変っていったのだ。

それから少しして、彼の集めてくれた資料を基にして……自分の

「リンカーコア」をコピーした『融合機』の製作が始まった。
少しずつ、少しずつ……。自分自身の魔力を注ぎ込みながら、「融合機（この子）」の主――〝母親〟として、血と命……そして、『心』を注ぎ込みながら、新たな生命（いのち）を形作っていった。
そして、ついに……その新たな命は、この世に生まれてきた……生まれてきてくれた。
『祝福の風』の名を受け継ぎし少女、その生まれてきたその姿はまさに「妖精」だった。しかし、彼女の透き通るような銀髪は……確かに、『祝福の風』の意志を受け継いでいることを、示していた。
そして、彼女はおとなしく静かな印象だった姉とは裏腹に、元気があふれださんといわんばかりの声で、自分の名を……主である自分に告げた。
「初めまして、マイスターはやて！　リインフォース――――Ⅱ（ツヴァイ）ですっ!!」
「こちらこそ初めまして……。これからよろしくな……リイン♪」
「はいです！」
この日、新たに誕生した命。
それに多大な貢献をしてくれた彼に対する「想い」は……〝友達〟だけでは、……既に、収まらなくなってしまった。
――その日から、彼女はもう忘れることは出来なくなった。この胸に抱いてしまった、どうしようもなく高揚する心の形を……。
――――彼を……好きになってしまった、という……その、「想い」を……。

＊　＊　＊　『炎の定めを受けし少女が思ったこと』

始まりは、何というか……まぁ、その……複雑で……。
真実を隠されていて……親友が、あたしやもう一人の親友の知らないところで、今の女五人組な親友グループの二人のために戦っていて

……そのきっかけが、始まりが……彼だった、らしい。
この世界を守ろうという、責任感など要らないだろう程、他人事と笑い飛ばせるのでは、とさえ思えるほど、彼がこの世界を救う理由などないのに……彼はここに来たらしい。当初環境が合わない状況で苦戦し、連戦による疲労で助けを必要とする程に弱り、あの姿になったと言っていた。
まぁ、それは別にいいと思う。
ただ、そういったことを知らないあたし達からすれば、それを告白されたときに思うことと言えば……まぁ、あれやこれやということで、でもまぁ確かにものすごく嫌がっていたのは分かってた。でも、あの時の彼は〝動物〟を演じきっていたわけで……それに結局気づいていなかったあたし達の方が強引に連れ込んだ、というのがどちらかというと正しい見解ではあるが……それだけで納得がいくほど、あたし達の「乙女心」という奴も安くはない――と思っていたのだが……。
まっさらな純白が似合いそうな茶髪の少女は全く気にしてなかったけど……。
自分よりも透き通った金髪の少女は寧ろその辺をよく分かってない様で……。
短めな茶髪の元・薄幸系美少女は「役得やねぇ」と逆に面白がっていて……。
夜空の様な紫の髪のおっとりとした少女は寧ろ両得とさえ思ってそうで……。
――それでもやっぱりあたしは納得がいかなかった。
だからだろうか？　彼を無意識の内に半分敵視・半分好奇心な視線を向け始めたのは……。
エロフェレットなんて罵ったこともあったけど、いつの間にかそういった類の感情は消えていき……いつの間にか、親友の輪に加わったその少年に対して、「凄い奴」だという感情も出始めた。
勿論他人より秀でているという点なら、あたしだって負けてはいないはずだ。あたしらのグループにいる彼女らだって、色々な才能に恵

まれている。ただそれとは少し違うベクトルで、彼はすごかった……というだけで、ちょっと興味が深まった。
桜色の星光や金色の閃光、そして夜空を統べる白き王のような、分かりやすい「強さ」ではない。
でも、悔しいが……彼女ら彼の働いている『無限書庫』へと親友三人に付いて行って、紫の少女と同じく初めてそこをみんなと共に訪れたとき、正直愕然としてしまった。
『魔法』――という世界のスケールに驚いて、呆れて、感心して、感動して……そして、見惚れた。
まさに『無限』の書物の中で、その本の海におぼれることなく寧ろその自らの翡翠の光で、本の流れを自らの手で制御して、まるで躍らせている様なその姿に、悔しいが……正直見とれていた。
だから、どうしようもなくこのころから……一緒にいたら、何でもできる気がするような……そんな気がしていた……。
そんなことを、黄金色の炎の定めを受けた少女は……思っていた。

――でも、私は……彼を、貶した、傷つけた、突き放した……。

なのに、……なのに、……なのに――
――彼は……私の元へ、私たち二人を……救ってしまった……。

それが、どうしようもなく……うれしかった。

そして、その思いは……一度彼と決別した後に、もう一度――よりいっそう強く、つながることになるのだった……。

＊　＊　＊　『月と血の定めを受けし夜闇の少女の気持ち』

――すごく可愛いフェレットさん……それが、私が彼に対して抱いた最初の印象。

そのあと、私が知らない……よく分からない不思議な力……『魔法』との出会いを親友に与えた人だということを知った。あと、彼が普通の男の子だということも含めて、私は……そしてもう一人の太陽のように活発な、私とは反対の少女も……私達は、知ったの。

それ以外は特に何もなかった、と思っていた。ただ、私たちの親友のとっても活発な金髪少女――アリサちゃんは、彼をお風呂に連れ込んだことを後悔していたみたいだけど……私は特にそういうことは感じなかった。

彼はとても誠実な人だということは分かっていた……。そう、〝分かっていた〟……。

それでなくても、私は不思議と惹かれた……。

嗜好も近かったし、彼の中性的な顔立ちも、それなのに時折のぞかせる真剣な表情、彼の優しい心やそれを現したかのような、翡翠の光に、私はとにかく……、どうしようもなく……魅かれていた……。

しかし、そんな彼に……私たちは酷いことを言ってしまった。

貶してしまった、罵ってしまった……傷つけて……しまった。

なのに、……なのに、……なのに。

――彼は、私達を助けに来てくれた……。

紫に染まった闇の月光の下で、暗闇の中に取り込まれそうになっていた私の元へと……彼は来てくれた。

仲違い……というには、一方的すぎる罵倒。

軽蔑されてもおかしくないのに、寧ろ当たり前なのに……それなのに、彼は私たちを優しく包み込んだ。彼は生まれながらの主人公（ヒーロー）ではない。でも、それでも……私たちにとっては、……私にとっては、あの時の彼は……まさしく、『ヒーロー』だった。

だからこそ、あの時の私は最低だったと今でも思う。
つまらない意地や、非常に身勝手な「知らない」という、……「無知」という名の〝罪〟に対する「怠惰」の代償に、私は自分の命すら失いかけた。
だが、その代わりに、傲慢にも私は……、救われる価値もなかったはずの私は……、彼との〝絆〟を取り戻すことができたのだった……。

彼女の抱いた「想い」は、いくつもの壁を乗り越えて……より一層強く……繋がっていったのだった。

＊　＊　＊『純潔の天使だった、血に濡れた少女』

……「痛かった」……。
そんな言葉では言い表せないほどの、衝撃と、熱を、あの時、その身に……受けた。
冷たいはずの雪の上に横たわったわたしの体は、内側からあふれ出す「嫌な熱」に侵されていた。
虚ろいで行く視界の中に、見知った赤毛の少女の顔が見えた。
彼女は顔をぐしゃぐしゃにして、泣いていた。
わたしの為に、泣いてくれていた……。
それを見て、思った。
あぁ、泣かせてしまったな……と。
だから、わたしは……その子の、ヴィータちゃんにこういった。
――――「大丈夫だよ」って……。
でも、結局それじゃあ……ヴィータちゃんを慰めることはできなかった。
そのまま私の意識は途絶えた。

そして、次に目が覚めたのは、真っ白な病室のベッドの上だった。
家族や、友達が、他にもたくさんの大切な人たちが、私が目が覚めたことを喜んでくれた。凄く、……すごく、……すごく、嬉しかった……。
けれど、
そこに、彼の姿はなかった。
それが凄く……寂しかった。
凄く、すごく……悲しかった。
皆に聞いても、顔をうつむけるばかりで、仕事が忙しいとか、また倒れたとか、……そんな彼女が求めている、彼女が欲しかった答えは……、何一つとして返って来ることはなかった。
でもそんな気まずさが流れる病室に、彼に関する報告が流れ込んできた。それはその場にいた彼女を、皆を……いや、それこそ管理局中にさえ届きそうな程にけたたましく、駆け巡って来た。
その……、
――「ユーノ・スクライア司書長代理が、危険な状態で手中治療室に担ぎ込まれた」
という知らせが……その場にいた皆を、彼女を震撼させた。
すぐさまそれを聞いたシャマルが、そちらへと飛んでいた後……その場には訳が分からないという呆然とした沈黙が訪れた。
なんで？　どうして？　ユーノくんが……危険な状態……？
そんな筈はない。
彼はもう前線を退いて久しい筈だ。
それなのに、何がどうなって彼が危険に等さらされなければならないのか？
有りえない。有りえるはずがない！
なんで、どうしてユーノが傷つかなくてはならないのか……。
ユーノのことを告げに来た局員が、病室に居合わせたメンバーの中で、管理局に入った後もユーノと親交が深かったクロノの前にユーノが倒れる前に集めていたという何かの紙の束と、データをクロノの前に出してきた。

「これは?」とクロノが聞いた。するとその局員は、「スクライア司書長代理が倒れる寸前まで集めていたと思われる、何かの資料なのですが……」それを差し出した職員も、それが何なのかまでは分からなかったと言った。

クロノがウィンドウを広げてそれを閲覧しようとしてみるが、容量がすさまじいらしく……クロノはそれを受けとり・開くのに苦労していた。そしてようやく開くと、そこに映し出されたのは、膨大過ぎる量の……資料。

それは、彼女自身へと……なのはへと向けられた……彼の誠心誠意の証だった。

――そこに集められていたのは、「リンカーコアの修復」と「脊髄神経治療」の膨大な資料。

全ては、君(なのは)を助けるためと言わんばかりの……彼(ユーノ)の、心の証……。

それを知ったとき、どうしようもなく……嬉しかった。

申し訳ないという気持ちもあった。

せっかく彼が繋いでくれたこの力を、上手く使えなかった自分に対する不甲斐無さもあった。

その所為で彼を危険になるまで追い詰めてしまったことが、悲しかった……。

でも、それでも……、どうしようもなく……嬉しかったのだ……。

自然と涙があふれる。とめどなく流れる。白いシーツを、濡らしていく。涙の海が、広がっていく。嗚咽が、大きくはないが……悲しさよりも、嬉しさが表に出るのを止められないような、苦しくも……温かいようなこれまでに感じたことのない心の泉から、何かがあふれ出し、先ほどまでどこかにあった隙間を、埋めていった。

その時気づいた。

前にも、『これ』を感じたことが……あることに。

そうだ、これは……この、〝心の隙間〟を埋めるような感覚は……、『あの日』から感じなくなっていった寂しさを埋めた――あの温かさと似ている。

『あの日』が訪れるまで、心のどこかに誰にも言えなかった〝隙間〟があった。
でもそれは、決して埋まらないのではないかと……ずっと思っていた。
心の叫びのようなものが、あったのだ。誰にも聞かせたくない、自分の一番弱い部分。
覆い隠して、目を背けていた、そんな……ところを、何も聞かずに埋めてくれる出会いがあった。二十一個の青い宝石と、たった一個の赤い宝石が、全てを変えた。
翡翠の少年と、出会った。
フェレットかと思っていたが……彼は人間の少年で、どこか自分と似ている部分があった。彼もまた、〝孤独〟を知る者だった。家族のいない痛みを、知る人だった。自分の居場所がないという気持ちを知っている人だった。
だからだろうか、彼と触れ合って……過ごすうちに、彼のくれた『魔法』の織り成す様々な出会いを重ねるごとに、彼女の心の隙間はいつ間にか……埋まっていた。

そして、その出会いが……これまでの、全てに……繋がっていったのだ。

母親を健気に慕い想う、優しき金色の閃光の少女に。
家族を守りたいと願う、儚くも……優しき夜空の王に。
そしてその先にある様々な、心を躍らせるような素敵な出会いの数々に……繋がっていたのだ。
そして、その始まりをくれたのは……彼だ。
だから気づいた、彼が少しだけ他とは違う特別だという感情に。
何といえばいいのかなんて、分からないが……どこまでも近いのだ。何よりもきっと近いのだ。分かってしまうから、そういう心の痛みを、平凡なはずの日常の中に居場所がかけている様な感覚を知っているからこそ、深く拙い「愛」の形に彼女は気づいている。でも、今

更近すぎるかもしれない、と思う程に近い。

――〝家族〟と称せるのは、案外……近すぎて拙いからなのかもと思ったこともある。

でも、今は、気づいている。そうだ、好きなのだ。どうしようもないくらいに……。

でもそれなのに、やっと、……やっと気づけた筈なのに、今彼を取り囲んでいる状況が最悪だったことには、気づけていなかった。

それに気づけたのは、そのすぐあと。

そして、もっと残酷な、真実を知った後だった。

この時、この瞬間から……始まったのだ。

長くて、深く、残酷な……空白の時が……。そしてその空白の、虚無の中を……とても温かいものが、埋めていくのも……。

とても深い……空白の時の中で、いくつもの悲しみを越えていく。

そして、未来（今）へと繋ぐための闘いの幕は――今、上がった。

＊　＊　＊　『始まり、傷ついた心――傷つけてしまった心』

――　アンタが居なかったら……あの子が傷つくことなんてなかったハズなのにっ!!　アンタが『魔法』なんかを教えたから……アンタがあの子に助けを求めたりしたから……!　そのせいで、あの子は……なのははっ……得体のしれない場所で……得体のしれない敵に襲われて……そのせいで、死にかけたのよ!?

もしも……あの子が死んだりすることがあるなら……その時

は絶対に、……!!!……絶対に、アンタのことを――私が殺すからねっ……!!!!!

……ごめんなさい……。

――ねぇ……どうして、〝元凶〟のユーノくんが……一番後に、来るのかな？　どうして、何も……傷つきもしないで、いられるのかな？　なのはちゃんが……こんなに、傷ついてるのに……。ねぇ、どうして？　どうして……？　……どうして……？

……ドウシテナノカナ、ユーノクン……？

なんで、平然としていられるのかな？　どうして一番に来ないの？

なのはちゃんは、ユーノくんをあんなに信頼してたのに、ユーノくんは……最後なの？

どうして、なのはちゃんを……私達から遠くに行かせる原因を作ったくせに、一番遅れてきて、何もできないの？　返してよ……、なのはちゃんを……返してよ……！　消さないでよ、なのはちゃんを、殺さないでよ……！　返して、よぉ……ッッ!!!!!

……ごめんなさい……。

――……（無言）

ごめん、なさい……。

――……（沈黙）

……ごめん、なさい……。

ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。

ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。……ごめんなさい。……。……ごめん、なさい……っ。

――ゴメン、なさい……っ!!

そして、彼は……逃げる様に駆け出すわけでもなく、呆然と立ち尽くすわけでもなく、憐れに這いつくばるわけでもなく、ただ……ひたすらに……静かにその場を、ゆっくりとした歩調で、立ち去った……立ち去るしか、なかった……。

＊　＊　＊『壊れそうになったとき、つなぎ合わせるもの　――執念――』

……。

……。

……。

……。

――逃げてしまった……。

――僕は……、いつも、いつも……弱い。

――『あの時』だって、そうだった……。

――助けを求めてしまった……。あんなことさえなければ……きっと……。

彼女は、ずっと……平和の中で、安全でいられたはずだ……。

――何とかしなくちゃ……。何ができる？　そんなことはいい、何

かしないと……死なせるもんか。
いや、ホントは――。
――なんとなく、気づいてはいた……。彼女も、自分と同じで……
いや、〝同じ〟なんて、おこがましいけれども……「無茶を厭わない」タイプだ。だから、〝少し〟彼女がいつもと違うことに、……気づいていた。
でも、それでも――。
――きっと、「大丈夫」。
そう、信じた。
勝手に、信じた。
たった十一歳の〝普通の女の子〟を……まるで無敵のヒーローの様に、勝手に全てを救ってくれると、そう勘違いした。……理想を、押し付けたのだ。
――……くそっ!!
自分への怒りが、溢れてくる。しかし、そんな『怒り』では状況を好転させることなどできない。
今……何よりも必要なのは、一体何か？
その答えがあるとするならば、「冷静な頭」と「彼女を救う為の知識」。
そして、それを……用意するためには――。
――そうだ、今の僕にできることはこれだ……。僕なんかでも、それは……できる。
でも今それは、君にしかできないことだ。
ならば行こう、僕の行くべき場所へ……。自ら潜った「穴倉」へと……。
自分の命なんていらない、無茶なんてどうでもいい。彼女を助けられるのならば、それでいい。彼女の為なら、命なんていらない。今自分にできる全てをもって、彼女に対する「逃避」に対する「贖罪」を……。
自らを卑下する内罰的な心と、救いたいという執念が……彼を突き動かしていく……。

＊　＊　＊『示した心、どこまでもまっすぐになった心』

目の前に示された、膨大な量の治療のための資料。
示された彼の鋼の如き意志の証で、彼の心の証明。
誰もが呆然となる。自分なりの誠意を行動で真摯に示した。何が何でも助けたいという気持ちと、自分の責任――見ようとしなかった責任――から逃避した分の贖罪。そういったもの全てを、……一言も発することもなく、文字通り死の淵まで自分を追い詰めながらも、結果として全てに対して見せる様に証明した。
それに対し、彼を知る者は――
嬉しさに、涙した。
彼の心に感動した。
何もできなかったことを悔やんだ。
彼のことも支えられなかったことを、悔やんだ。
彼の執念にも似たその思いに、ただ呆然とした。
彼のした行いに、その深い想いに……絶句した。
――ただ、誰もが……彼が「凄い」ことだけは……理解した。
そして、沈黙の中……一人の人物が、病室のドアを、……開いた。
それは、ある一つの真実を告げるために来た使者、〝スクライア〟からの来訪者だった。
その人は、名をセイ・スクライア。見た感じ、自分たちと同い年くらいの少女であった。彼女は、今日偶々ユーノの元を訪れたといった。そして『無限書庫』を訪れると、彼が尋常でない本にかこまれたまま、一人で異常な検索をしている現場に居合わせ、彼が重体であったことを知り限界の訪れて……いや、既に限界など超えて単なる執念の塊であった彼を止めて、というより、彼は既に意識すらなかった……そんな状態の彼を医務室に連れたといった。
それを聞き、偶々彼女が彼の傍を訪れたことに奇跡の様な偶然……

タイミングの良さに体の力が抜けるのを感じる一同。
しかし、彼女は……更に言葉をつないだ。彼を返してください、と。
それを聞き、驚愕する一同。とりわけ魔導師の皆は何故かと彼女に聞き返した。
それに対し、彼女は答えた
ここも、彼にとってあまりよい環境とも言えない場所になったのではないか？　ということを。そして、それは……端的に言って、事実である。
そして、彼女は語り始める。

――〝ユーノ・スクライア〟という少年の、これまでを。

彼には、血縁者がいない。なぜなら、彼は孤児だから。彼の出身地も、ルーツも、誰も……知らないから。
彼には、おおよそ〝家族〟と称せる存在が、いない。
彼は、二～三歳になるかならないか程度の年齢の時、ボロボロの姿で「スクライア」がその当時張っていた『里』に、流れ着いた。ぼろ布を纏い、首元に、赤い宝石をだけを身に着け……他には何も持たずに、彼は、現れた。
「スクライア」では移民は、珍しくない。というより、流浪の民であるからこそ……一族内の隔離された民族というわけでもない。だから、ユーノは割とあっさりと受け入れられた。だが、彼は……少しばかり『特殊』であった。
名は、彼の纏っていた布に縫い付けられていた擦れた文字から、「ユーノ」だと分かった。
ユーノは、初めは普通に一族の中で、普通の子供として過ごしていた。ただ、彼が〝学ぶ〟ことを知ると、人々は次第に彼を遠ざけるようになった。
彼は、なかなかに〝才能〟を持っていた。
それは、二年前にたった九歳でロストロギアを発掘したことからも分かるだろう。確かに『ジュエルシード』を見つけたのは偶然だが、そ

もそも彼は九歳時点で現場の「総責任者」だった。これだけでも、十分異常だ。

そう……彼は、〝学ぶ〟ことに才能が有りすぎた。

言葉を覚え、一族の生業である「歴史への探求」を知ると、彼の才能は爆発した。大人ですら真っ青にさせるほどの論文を書いて見せたり、思考能力そのものが回りより頭一つ二つ抜けていた。

それが、気味悪かったのだ。

天才、だけで片付けるには……少しばかり、彼の能力は突出しすぎていた。

歴史だけにしか才能が向かないのなら、そこまで気味悪がられることもなかったかもしれない。しかし、普通なら幸いなハズなのにこの場合は不幸なことに……彼の才能はとどまらなかった。魔法でも、彼の才能は高く評価された。

防御に関してはピカイチ。本格的な攻撃こそ、〝出来ない〟ものの……彼の魔導運用ははっきり言って子どもとしては異常だった。たいていの攻撃は防ぎ、大抵のものは束縛できる。まさに後方支援としては専門家、一人の魔導師としても一流と言って差し支えない。

だから、彼は気味悪がられた。

何せ、どこまでも彼が「スクライア」に利益をもたらすのに十分で、彼自身がどこまでも善性の塊みたいな気質であったことも、それに拍車をかけた。

初めは、偶然だった。

良い拾い物だと思った。

しかし、都合がよすぎるほどに彼は利益をもたらす。

そこで、歴史やオカルトにも秀でているスクライアの民は彼を何かの化身や使い、あるいは何かの落とし子ではないかなどと考え始めた。

それはどこまでも、膨らんでいく疑念だった。

しかし、直接的にユーノに関わろうとするものは、いなくなった。

案外、突出しすぎると、異常だと、どこか不気味だと、誰も構わなくなる。気になど留めなくなってしまう。

別に傷つけることもない。彼の居場所はここしかない。どのみち行くべき場所もない。ほっとけば出ていくか、ここに残るだけ。どちらでもよかった。確かにどこまでもあふれんばかりの才能や、彼のもっている「秘宝」は手放しがたいと言えばそうではあるが……次元世界は広い。元から、そういった一つ一つに溢れんばかりに「好奇心」を向けているスクライアに、こだわり続けるほどの執着を抱き続けろなどというのも奇妙で変な話だ。

どこまでも、新しい事を……歴史を追い求めるのに役に立つ、くらいの認識なのだ。

なぜなら、早すぎる勢いで〝自立〟した彼に対して、そこまで思い入れを抱くものなど……いはしなかったのだから。

だから、ユーノは孤立した。〝かかわり〟を持てなくなった。

誰ともつながりが、無くなった。

しかしそんな中で、唯一彼のそばに居たのがセイだった。

セイはまさに当時のユーノにとって自分を避けないたった一人の人物だった。でも、それでも居場所というには、「スクライア」は彼らには狭かった。だから、セイはいっそのことユーノに外の世界で暮らしてみてはどうかと語った。もともと、外で個人個人での探索作業も珍しいことではない。むしろこのままここでくすぶっているよりも、外の世界に出て行った方が彼にとって必ずプラスになるとセイは考え、ユーノにそれを進めた。そして、ユーノも、それを聞いてそうした方がいいと考え、外の魔導学院に入ることを決心したのだ。

だから、彼は里を離れることにしたのだ。静かに、目の前の少女以外には何も告げずに、里を去った。これは彼がわずか五歳の頃の話である。

そうして、その後彼は魔導学院に入ったのだが、そこでも飛び級で卒業してしまい……また彼は孤独に戻ってしまったのではないかと心配していた。一応在学中に騎士カリムやそのほかにもいろいろとお世話になった人々が出来たとも語っていた。それでも、魔導学院を卒業してしまった時点で、彼はそのかかわりとも希薄に戻ってしまい、また一人になったのではと心配していたとセイは語った。

しかしそんな時、彼に発掘の仕事が訪れた。
ここにいる者ならば、それがなんであるかはなんとなく分かるだろう。

そう、この時彼に訪れたのは……全ての、《始まり》の発掘だった。

――それが、彼を心配する彼女に、彼は「仲間」が……「友達」が出来たのだと嬉しそうに告げてくるきっかけになったと彼女はいった。

それがセイはうれしかったと語った。ようやくユーノに自分以外にも信頼できる者たちが出来たのだと。

だが、しかし……。ユーノは、また傷ついてしまった。傷つけられるような状況に陥ってしまった。

だから、セイは……ユーノを連れ戻したいと、皆に語った。

私はもう、傷つくだけのあの子は見ていたくない。

ただそれだけだと、彼女は最後にそういった。

それを聞いた誰もが、言葉を発することは出来なかった。

勿論、何も無く彼を彼女の元へと送り出したいわけではない。

言いたいことがある。

伝えたい思いがある。

誤りたいことがある。

自分のしたことの重さを悔いる程度の罪悪感は有る。

自分の犯した過ちに頭が気づける程度の間は有った。

自分の中の感情に区切りをつけられはしないが、それでも……それでも、思うところがあることは誰の目にも、耳にも、頭にも、心にも……全てに置いて、明らかだった……。

それだけは、「確か」だった。

その様子を見て、セイは少なくともこの場所に置いて……ユーノの居場所は有ったのだということを再認識した。だが、彼女もまた……

ユーノのことを〝見てきた〟ひとりであることには変わりはなく、彼女自身の気持ちとしてはユーノが「非難された」という事実だけでも彼をここから連れ去ってしまいたいとさえ思う。だが……確かに、ここにもユーノのことを〝見ていた〟人はいるのだ。ユーノ自身が望んだ「居場所」を、彼から取り上げてもいいのかと、そう思った。

でも、彼が傷つくことが必要だとも思えない。それに、彼は……優しすぎるから……背負う必要のない「もの」を、自分で勝手に……自分の体に枷としてはめてしまうから……。だから……いや、そんなのは自分の都合の良い「言い訳」だ。ただ、私が、彼の傍に入れない間に、他の誰かが……その位置にすっぽりハマっているから、それが、きっと……「悔しい」だけだ。本当に彼のことを思うのならば、自分の……すべきことは――。

彼女は、沈黙する皆に対して……更にこう告げた。いきなりきてこれでは無礼ですね……、ならばもう少しだけ……時間を置きます、と。

そして、事の次第は……少しだけ、時間をおくことになった。

しかしそれは、ただ単に結論を先送りにしたのと同義であり……放棄と変わらないのだということは誰もが分かっていることだろう。だが、それでも簡単に結論付けた回答を導き出せないのが、人間という「愚かな」生き物なんだろうということもまた、誰もが知っていることだ。

それぞれの「思い」と「想い」は、様々な交錯する螺旋を描きながら複雑な模様を描きつつ……どこまでも深い渦の中に囚われていく。

＊　＊　＊　『新たなる決意、そして……』

――……。

???　……な、に……？

――……なよ。

何だろう、誰かが……呼んでる？　そんなはずはないと思う、だって今ここには「僕」しかいないから……。そう彼は「暗闇」の中で何かの「呼び声」の様なものに対して答えた。というかここはどこだろ

うか、という疑問が彼の中に生まれた。
確か自分は、何をしていたのだったか……そう、確か――なのはを助けるための……資料を……集めて――――
そこで、彼の意識は覚醒する。
（そうだ、こんなところで寝てる場合じゃ……っ！）
――やっと起きたかい？　というかボクの呼びかけには反応せず、〝あの子〟のことを思い出しただけで目が覚めるなんてちょっと嫉妬するなぁ～。どっちかっていうと、君と過ごした時間はきっとボクの方が多いのにさぁ。
「……えっ？」
――やぁ、初めましてユーノくん。
誰だろうか、と思った。しかし、なんだか知ってるような気もするという奇妙な気分をユーノは今、現在進行形で味わっていた。見た目は自分よりも幼い少女だ。薄い翠の長い髪を持った、少女。誰だろうか、彼女は。そもそも、ここがどこかすらわからないのに、彼女が何者なのか――なんて……分かるわけもない。
――ボクが誰か、なんて考えるだけ無駄だと思うよ～？　悩むより、案外あてずっぽうの方が当たると思うよ。何せボクはかなり特殊な存在だからねぇ～。
「……そんなこと言っても。っていうか僕はこんなところで――『「遊んでる暇はない」かな？』――っ!?」
――「なんで!?」　って顔してるねぇ、まぁ別に不思議な事じゃないさ。だって僕は君のその熱～い想いを一身に受けてたんだよ？　このカ・ラ・ダ・に♪
「……な、何いってるんだよ……っ!?　僕はそんな変な事を君にした覚えなんていよっ！　というかあったことだって無いハズ――――」
――あれあれ～？　どんなイケないコト想像しちゃったのかなぁ～？　僕は別に君のその思いの下で本来の機能を使って、懸命に働いてけるように慣れて嬉しいな～とかって思ってただけなんだけどなぁ？　おませなユーノくんはいったいどんなイケないコトを想像してたのかぁ～……？

「なっ……!?」
ニヨニヨと笑いながら、ユーノを突っついてくるその少女にユーノは顔を真っ赤にしながら、うつむくしかない。彼の顔は羞恥で真っ赤だ。
――あぁ……もういちいち可愛いなぁ君は～。うりうり～♪
「……あぅぅぅ……」
――まぁ、冗談はこの辺にしてもだよユーノくんや。ボクの断りなしに死ぬなんてのは許しがたいんだけどなぁ……？
「……えっ……？」
死ぬ？　誰が？　どんな理由で？
――いや、君は自分のことを顧みるということを少し学んだ方がいいね。今死にそうになっているのは君だよ、キ・ミ・っ！
「……そう」
――反応薄っ!?　僕もかれこれと長々と生きてきたけど、君も相当変わってるねぇ……ま、べつにいいけどさ。
「……」
――とはいえ……死ぬんです、はいそうです、で終わらせやしないけどね。君は僕にとって誰よりも必要だから、ね。というか、『君』なら……もう僕が何なのか冊子はついてたりするんじゃないかい？
そう言いながら、ニヤリと微笑む少女はユーノをまっすぐに見据えていた。その微笑みの意味が、本当に自分の想像している通りのものであるのか……ユーノはいまいち自信を持てなかったが、口の方は彼の意志よりも先に……彼の中にある疑問を、既に「声」として彼女へと向けて放出していた。
「……君は、『無限書庫』なのか……？」
――イエースっ！　ザッツライト！　その通り!!　大正かーい!!
「……、」
アホっぽい、という言葉がしっくりくるような（どこぞの雷撃の水色の閃光を思い出させるような気も……）そんな彼女にユーノはどう反応すべきか迷い、色々と考えを巡らせると……今自分の状況を思い出してそれについて聞いてみた。

「ところでさ、さっき僕が死ぬとか死なないとか……そんなこと言ってたけど、それはどういう……」
――君は、あの子を助けようとして……無茶な検索を繰り返してたからねぇ……ぷっつりと限界が来ちゃったんだよねぇ。それで、今君は死にかけてる。絶賛死の淵に入りびたり中で、三途の川一歩手前みたいな感じかな。なんだか君のこと知ってるみたいな子が、君のことを医務室に連絡とってくれなかったらきっとボクでも助けるの相当苦労しただろうねぇ。
「……知ってる人？」
あの時逃げてしまったような情けない自分を誰が……、とユーノは思ったが、その人物は……彼の「家族」だったから。
「セイが……。そうかぁ……心配、かけちゃったなぁ……」
せっかく、仲間ができたって報告して……安心させられたかなって思ってたのに。とユーノは寂しそうにつぶやいた。
――……ユーノくん、君はあの二人の事を……。
「……あぁ、恨んだりなんて……するはずないじゃないか……。だって、二人の言って事は、本当だから。僕は、一番見ていなくちゃならなかったんだ。『魔法』は、僕が彼女に与えたものだったから……僕は彼女の絆を紡ぐ分だけ、そのリスクを少しでも減らさなくちゃならないのに……。それから、その『責任』から逃避してしまったんだから、その分のつけは払わないと……。それができたら、一度……謝りたいんだ、皆に。そして伝えたいんだ、ごめんなさいとそれから――」
――――これからも友達で、いても……いいですか？　って……。
――……君ってやつは……。なら、僕も協力しないとねぇ。
「えっ……？」
――えっ？　じゃないよ。主が困ってるのに、助けない従者がいると思うかい？　待ってなよ、ユーノくん。まずは目覚めないと……そしたら始めよう。君をもう穴倉のモグラなんて呼ばせやしないよ。ボクが、君をもう一度あの子たちの隣に飛ばしてあげるよ。防御主体？　後方支援型？　だから何だっていうんだい？　君には君にしか

できない戦い方がいくらでもあるだろう？　その君の可能性を伸ばすための協力が、僕は出来る。何故か、なんて野暮なことは聞くなよユーノくん。君は僕を目覚めさせてくれて、本来の形で使ってくれて、僕の機能をフルに仕えるだけの才能（ちから）がある。だから僕は君が大好きで、君が「助け」を必要とするのなら、助けるよ。いくらでも、どんな時でもね。だから見てなよユーノくん……ボクが君を、もう一度飛ばしてみせるよ。君ならそのための努力ができるのは知ってるからね。さあ、もう一度立ち上がろう……守るのだってちょっと変えれば、攻撃に転じることだって可能だってこと、見せつけてやろうよ。他の人たち（わり）にさ。

「……僕でもいいのかな？」

――少なくとも君が居なかったら何も始まらなかった。それだけは確かだと思うんだけど……まぁ、君がそれで足りないなら、もう一つ理由を提示してみようか。

「……？」

――君が、この世界に……必要だから。これでどうだい？まだ、不満かい？

「……、」

たったそれだけの言葉でも……心など既に決まっていた。

「名前……」

――ん？

「君の名前を、教えて欲しいな……」

――フフ、よくぞ聞いてくれたね。僕の名前は……――――

「……うん、有難う。じゃあ……立ち上がってみるよ。もう一回、自分のできることをするために」

――いいね。ヒーロー復活だ♪

「はは……、ヒーローなんて柄じゃないよ。そういうのは、なのはやフェイトやはやてたちのものだよ」

――……むぅ、ならそれに君を成らせるって言ってるのにぃ……。

「有難う。でも、きっと僕はそういうのになりたいんじゃない。もし後でそれに渇望することになっても、それは今の僕じゃない。進ん

で、そこでそう思うときの僕だ。今の僕は……そうだなぁ……きっと、目を覚ましたい、のかな？」
――……ふふふ、あははは っ！　いいねぇ!!　さっきまでとは大違いだ。それだけ変わっていれば、もう十分かもねぇ。じゃあ、起きようかユーノくん。……皆、待ってるよ。
「……うん、ここで引き留めてくれてありがとう」
――お礼はまずセイちゃんに、だよ。
「うん、それじゃあ……いってくるよ。また会えるん、だよね？」
――勿論、僕は、君の下にいつでもはせ参じるよ。
「そっか……本当に何から何まで有難う。じゃあ、今度は向こう（現実）で会おうね――――〝メティス〟」
――うん、ユーノくん。それじゃあね……。

そして、少年は、再び生への扉に手を掛ける。
背負うことから、今度は逃げないために。
皆のところへと、戻れるように……。
彼のもう一つの闘いが始まる。今度の相手は「情報」ではない。それはきっと……これまで、彼が真っ向からは立ち向かえないと思い込んでいた、「運命」なんてものだろう。

＊　＊　＊　『立ち上がる彼、向けられぬ顔』

今度逃げたのは、私たちの方だった。
あの後、私たちはどちらの病室にも行っていない。
もう、気まずいとかではなく……ただ、今の自分の醜さから逃げ出したかったのかもしれない。
彼の示した誠意は本物だった。対して自分たちはどうか、あの時彼に向けて吐き出した言葉以外……何も、してない。できもしない。不思議な力もない。何も……無い。

ただあるのは、あの時の自分たちの行動を……まだ正当だとどこかで信じている様な……自分自身の醜さだけだった。
セイは、何も言わなかった。
私たちが、彼女の〝家族〟を罵ったということを知っていた、はずなのに……。
――何も、言わなかった……。
それがどうというわけではない。罵られたかったわけでもないし、自分達の過ちを認めろと詰め寄られたかったわけでもない。ただ、その反応が……彼を思い起こさせるから……なおのこと、辛かった――辛いなんて思うこと自体が傲慢かもしれないが、それでも……この、胸が締め付けられる様な感覚にだけは……慣れることも、どうにかすることも……できなかった。
そんな時、二人の少女は――――それぞれが、ある一つの〝出会い〟を果たす。
それは、彼女らに課せられた……定めの始まりであり、かつ彼女らが「分かりたい」と望んだ……〝不思議な力〟との邂逅だった。
運命は、何処までも……何処までも、心を痛めつけんと動き出す。